報告集

第14回大会
せたがや福祉区民学会

学びあい 広げよう せたがや福祉の輪

「心（ハート）でつなぐ 未来につなぐ」

日時　令和4年12月3日（土）
12時～17時30分（開場 11時30分）
会場　駒澤大学駒沢キャンパス
種月館（3号館）

目　　次

◆ **せたがや福祉区民学会第１４回大会プログラム**..... 2
◆ **駒澤大学 キャンパスマップ**..... 3
◆ **全体会Ⅰ**..... 5
せたがや福祉区民学会会長挨拶..... 6
世田谷区長挨拶..... 8
せたがや福祉区民学会第１４回大会開催校挨拶..... 10
基調講演..... 12
◆ **実践研究発表**..... 21
ポスター発表一覧..... 22
口頭発表一覧..... 23
ポスター発表..... 26
口頭発表　第１分科会..... 36
第２分科会..... 52
第３分科会..... 68
第４分科会..... 84
第５分科会..... 100
第６分科会..... 116
◆ **ワークショップ**..... 133
◆ **全体会Ⅱ**..... 139
大会総括..... 140
◆ **大会プラス**..... 153
ＫＡｉＧＯ　ＰＲｉＤＥ＠ＳＥＴＡＧＡＹＡ写真展..... 154
区内障害者施設手作り品販売..... 155
第１４回大会実績..... 156
◆ **学会名簿**..... 157
せたがや福祉区民学会役員名簿..... 158
第１４回大会実行委員名簿..... 159
会員名簿..... 160
◆ **協賛企業等広告**..... 163
◆ **資料**..... 177
せたがや福祉区民学会規約..... 178
せたがや福祉区民学会設立趣旨..... 180

せたがや福祉区民学会　第１４回大会プログラム

１　全体会Ⅰ　　（１２：００～１３：００）　　３号館２階　３-２０７教室

○開会挨拶　　長谷川　幹　せたがや福祉区民学会会長

○区長挨拶　　保坂　展人　世田谷区長

○開催校挨拶　　中野　達哉　駒澤大学文学部部長

○基調講演　　「いのちとくらしを守る～地域防災と地域福祉の融合～」

川上　富雄　駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授

２　分科会　　（１３：００～１６：２５）

○ポスター発表　（１３：００～１６：２５）　３号館２階　ラウンジ　ウィステリア

【コアタイム】　（１５：１０～１５：４０）

※発表者が説明および質疑に対応します。

※ポスター会場は１３：００から１６：２５まで自由にご覧いただけます。

○口頭発表　　（１３：３０～１６：２５）　３号館２階　各教室

第１分科会　３-２１０教室　　第５分科会　３-２０３教室

第２分科会　３-２１１教室　　第６分科会　３-２０６教室

第３分科会　３-２０５教室

第４分科会　３-２０２教室

○ワークショップ（１４：００～１５：００）　３号館２階　３-２１２教室

３　全体会Ⅱ　　（１６：４５～１７：３０）　３号館２階　３-２０７教室

○大会総括

○次回開催校挨拶　杉原　たまえ　東京農業大学国際食料情報学部教授

○閉会

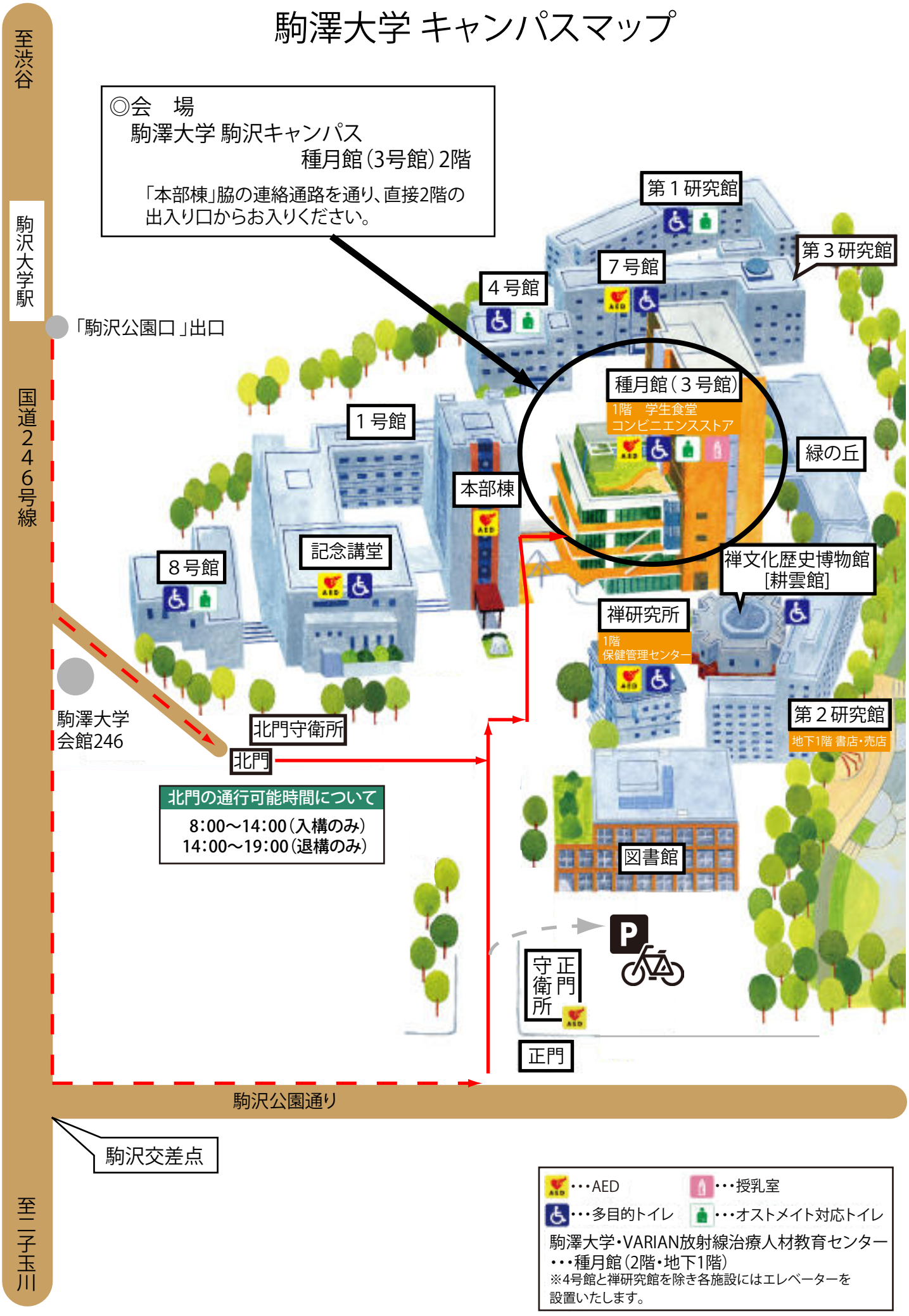
※全体会では、手話通訳・パソコン文字通訳を行います。
※分科会で手話通訳をご希望の方は総合受付にお申し出ください。

※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学の学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

駒澤大学 キャンパスマップ

◎会　場
駒澤大学 駒沢キャンパス
種月館（3号館）2階

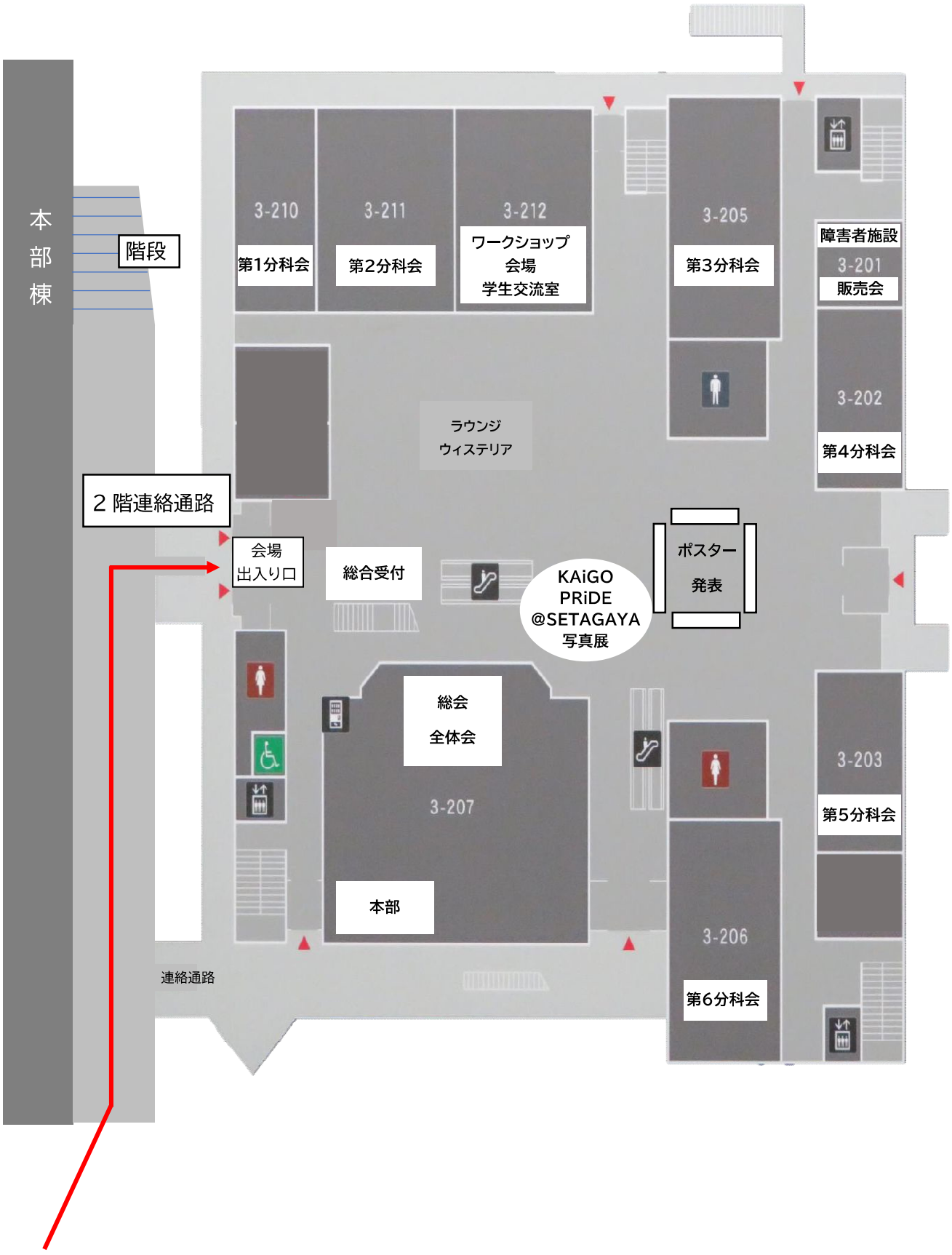
「本部棟」脇の連絡通路を通り、直接2階の出入り口からお入りください。



AED・・・AED　　・・・授乳室
・・・多目的トイレ　　・・・オストメイト対応トイレ

駒澤大学・VARIAN放射線治療人材教育センター・・・種月館（2階・地下1階）
※4号館と禅研究館を除き各施設にはエレベーターを設置いたします。

種月館（３号館）２階フロア図



全体会Ⅰ

せたがや福祉区民学会会長挨拶

せたがや福祉区民学会会長　　長谷川　幹

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました長谷川です。

今日は、せたがや福祉区民学会にお越しくださり、本当にありがとうございます。この学会は平成21年に設立大会を、この駒澤大学で行いました。13年目の今回も駒澤大学で開催できることを、うれしく思っています。

せたがや福祉区民学会は「学びあい 広げよう せたがや福祉の輪」をテーマとしています。福祉の仕事をする方には、学会というと大げさになりますが、十数年たちました。私は最初から参加していますが、最初の数年はまだ十分ではなかったです。4～5 年くらいたつと、非常に充実した内容になってきていると思いました。

学生の発表もあり、色々な方たちの集まり、福祉を中心に医療、大学や行政など、区民も含めて一緒になって行う学会です。日本では、僕の中では聞いたことがないユニークなものだと思っています。

そういう学会を支えるのが大学の方々です。駒澤大学、昭和女子大学、日本大学文理学部、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学、東京農業大学、日本女子体育大学の8大学です。大学を会場に本学会が継続して行われています。

コロナでこの 2 年は Web での開催でしたが、久々に対面で行われ、個人的にうれしいです。対面じゃないと、人のぬくもりとか、人との距離感が小さくなります。雑談も非常に重要だと、改めて認識しています。

今回は駒澤大学が会場で、サブテーマは「心（ハート）でつなぐ 未来につなぐ」です。文学部の川上 富雄教授の基調講演「いのちとくらしを守る～地域防災と地域福祉の融合～」の後、7つの発表テーマで42本の口頭発表、4本のポスター発表もあります。そして、学生理事・学生実行委員による基調講演を受けたワークショップ、「みんなで守る いのちとくらし」を企画しています。

日頃の思いを発表し、対面で交流を重ね、充実したものになればと思います。最後になりますが、開催にあたり、長尾 譲治実行委員長をはじめ、駒澤大学の教職員、学会理事、実行委員、学生ボランティア、関係機関のご協力によって、開催されることに、心よりお礼を申し上げたいと思います。

今日は、よろしくお願いします。

世田谷区長挨拶

世田谷区長　保坂　展人

皆さん、おはようございます。世田谷区長の保坂 展人です。

今日は第 14 回せたがや福祉区民学会が 3 年ぶりでリアルに開催されるということで、大変うれしく思います。

長谷川会長の話で、2009 年から、区内の昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学、東京農業大学、日本女子体育大学の 8 大学にご参加いただいていると聞いています。

日々の福祉の仕事に直面されている方から、区民の自主的なグループ、大学、福祉事業所、行政、あるいは区民の側からの発表があります。実践交流の場であるこの学会は、全国でもユニークな存在だと言われています。

さて、本日も、新型コロナの第 8 波の、いわば拡大期です。今年になってからは目立っていませんが、死者が 5 万人に達していて、そのうち 3 万人は今年、亡くなり、ほとんどが 60 代以上の高齢者です。なかなか、新型コロナウイルスに対する対策は試行錯誤で、国も自治体や地域で、最も困難だったのが、介護･福祉の現場だったと思います。

東京大学先端科学技術研究センターの児玉先生のお話では、2 年前の春に、特にヨーロッパで早く出現して、高齢者施設で、お年寄りが亡くなっている。亡くなり方を見ると、地域の病院がすべて患者さんであふれてしまい、そのあふれた患者さんの治療を施すことができないようなパンク状態になった。施設の中で感染者が出ても、当然、病院には行けませんし、行っても診てもらえない。まして往診はあり得ない。流行るがままになってしまい、1 つの施設の半数以上の人が、続々と亡くなる。職員の方も怖くて、仕事に行けない状況になりました。

2020 年春、ヨーロッパの相当の国で、亡くなったのは高齢者施設の入居者だったと聞き、日本もやがてそうした状態にならないとは限らない。どうやったら阻むことができるのかと思い、一昨年 7 月に社会的検査、高齢者施設、障害者施設の PCR 検査を全入居者に行いました。世田谷区は大変、施設数が多く、1 周するのに 3 か月ぐらいかかってしまいました。したがって医療チームを編成して巡回するとともに、1 人、2 人でも感染者が出たら、その施設全体で働く方と職員全員を翌日検査する方法で、拡大を抑える。クラスターの増殖を抑える取り組みをしてきました。それでも、どのぐらいのブレーキになったかは、今後の検証

が必要かと思います。国の方針としても高齢者施設での定期的検査が、取り入れられていきました。

この３年間、福祉の分野で、私の印象に残っている大きな取り組みは、まさしくコロナ対策です。それをやりながら、認知症に関する条例「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」と長い名前の条例ができました。これも認知症の従来からの一種の予断と偏見を、大きく覆して、認知症当事者の発言や参画を得て、尊厳をしっかり大切に尊重しながら地域をつくる条例です。

こうした条例ができ、まだまだ区民への浸透・理解は途上ですが、シンポジウムなどで認知症当事者が司会進行を行い、パネリストも全員、症状の違いはありつつも認知症の方で大変画期的であり、私自身の価値観も大きく変わる取り組みになりました。

入り口に世田谷区の介護の現場で働いている皆さんのポートレートが飾ってあります。KAiGO PRiDE という取り組みです。介護の現場で働く方の尊厳をしっかり取り戻していただく取り組みであり、また尊厳を取り戻すだけの社会全体からの支援や理解も課題だと思っています。

せたがや福祉区民学会は、3 年ぶりの対面開催で、いろいろなご苦労があったと思います。駒澤大学の長尾先生は実行委員長として、大変ご苦労いただき、実現にこぎつけたこと、心より感謝申し上げ、この学会が駒澤大学で開催されましたことは、世田谷区の大きな宝として、お礼申し上げます。

ご準備された方々、ありがとうございました。

せたがや福祉区民学会第１４回大会　開催校挨拶

駒澤大学文学部部長　中野　達哉

開催校を代表しまして、私から一言、挨拶をさせていただきます。現在、文学部長を拝命しております、中野です。よろしくお願いいたします。

本日、ご参会の皆様、事業所、活動団体、大学研究機関、行政等の福祉関係の皆様、ご多忙中にもかかわらず、平素からのご活動に感謝いたします。自らの実践を研究･考察されていることに、心より敬意を表します。

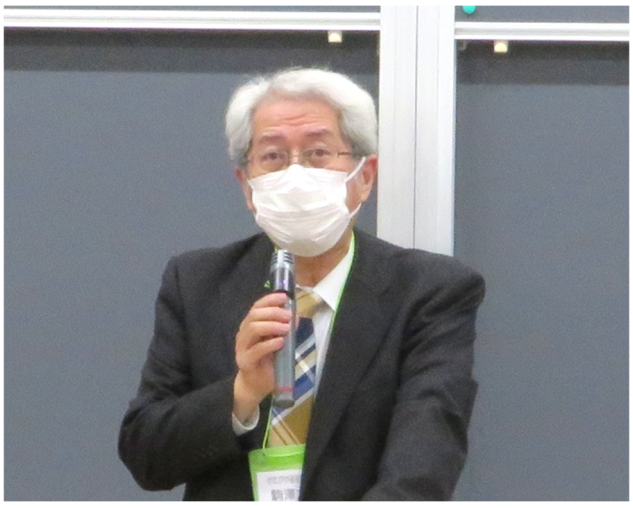
昨年、一昨年とWeb開催されましたが、今回は対面開催となりました。

今回、本学において第14回大会が、開催できますことを共に喜びたいと思います。第12回大会も、本学を会場として開催する予定でしたが、コロナ禍により開催が叶わず、2年越しで、ようやく開催することになりました。

久しぶりの対面開催であり、皆さんも楽しみにされていたと思います。開催校も、事務局の世田谷区社会福祉事業団の皆さんと準備を進めてきました。不慣れなこともあり、皆様には、ご不便などおかけすることもあるかもしれませんが、ご容赦たまわりたく存じます。

この後の基調講演に引き続き、多くの分科会を通じて、福祉実践活動の工夫や課題の紹介、意見交換、研究発表など、意義ある１日となることを祈念申し上げ、開催校からの挨拶とさせていただきます。

本日は１日、よろしくお願いいたします。



基調講演

駒澤大学文学部　川上　富雄

ようこそ、駒澤大学へ。駒澤大学文学部川上 富雄です。

「いのちとくらしを守る～地域防災と地域福祉の融合～」という題をつけました。

連携ではなく、融合しなければという問題意識でテーマ設定をしました。というのも、災害リスクの減圧･増圧モデルというものが紹介されていて、被害規模は災害の大きさや種類で規定されるのではなく、それ掛ける社会の脆弱性、ダムや堤防を造るなどハード面の対策。もう１つは社会面、ソフト面ですか、地域の中でつながりを作って備えておく。防災計画を作るのもソフト面になると思います。備えをしっかりしていれば、災害時に被害規模を減らせるというモデルです。今日は、ソフト対策の動向と、これから私たちがどういうことを考えていくかについて話します。

東日本大震災は 11 年前になりますが、およそ 2 万人の犠牲者が出ました。その中で、70 歳以上の方が 46%でした。障害のある人の死亡率は、なんと健常者の 2.5 倍でした。ほかの災害などでも同じような比率です。100 人のうち、75 人が障害者や高齢者です。2018 年の西日本豪雨災害、特に倉敷市真備町の例ですが、高梁川と小田川が決壊し、地区全体が水没。ここでも 51 人の犠牲者のうち 45 人、9 割近くは 65 歳以上。自宅で亡くなった方が 44 人。避難の判断が遅かったのか、しようと思っても動けなかった要介護状態の方でした。障害手帳を持っていた人は 23%、12 人でした。障害手帳を持ってサービスを利用している、あるいは要介護状態で介護保険サービスを利用している人は、相談支援専門員やケアマネジャーがついているが、災害時に手出しができなかった。何十人も担当してますから。地元の専門職は、自分の家も水に浸かっているかもしれない。いざという時には、自分の担当だからと、全員の利用者のところに行ったり、かけつけたり、確認するのは難しいと思います。この反省を踏まえて、災害時に要援護者を死なせない、命を守るための取り組みを本気で進めないといけない。

これまでの福祉関係者は、地域での日常生活、自立生活を支えるいろいろなケアプランを

作ってきたが、もし、この方が災害に遭ったときに命を守れるのか、個別避難計画も含めたケアプランを専門職は作らないといけない。専門職の話だけでなく、地域の中でも意識を高める必要がある。そんな話をします。

1つ目の柱、自然災害の状況と防災対策の動向から始めます。

戦前に我が国の大きな災害がありましたが、一番大きいのは関東大震災で、1923年、10万人が亡くなったり、行方不明になった。今でもその記録は破られていない。このグラフは戦後の犠牲者数。終戦直後は亡くなった人もいたが、戦時中、国の力を軍事力にかけていた。そのためインフラ整備や、まして防災の政策がなされていなかった、その脆弱性の裏返しだと思います。10年ぐらいたつと、ダムや堤防ができたりして、こういう犠牲が減ってきている。しばらく犠牲者は少なかったが、平成の時代に入って、1995年の阪神･淡路大震災、2011年の東日本大震災は、何万人単位の犠牲があった。

年表を見てください。内閣府が発表しているパワポです。2000年代になり、国をあげて、要援護者を災害時に守っていくということで、2005年に検討会が設置されました。翌年3月、年度末に災害時要援護者の避難支援ガイドラインを作成しました。ガイドラインを見ると大切なことが指摘されています。

ガイドラインのポイントです。実際には30ページくらいのものです。
避難行動要支援者名簿の作成の必要性、個別計画の作成の必要性も書いてありますし、福祉と防災の町内連携、関係者連携、地域で連携しなければならない、地域の防災計画も必要、あらゆる機関がBCPを作るべきなど。ところがガイドラインが法制化されずに寝かされていました。その後、東日本大震災が起こってしまった。

それを踏まえ、2013年に災害対策基本法が改正され、避難行動要支援者名簿を市町村が作成しないといけなくなった。同時に、地区防災計画も策定する、これは義務ではないのですが、この改正のとき、その概念も明記されました。

この名簿、市町村は、内閣府が要介護3以上の在宅の高齢者、そして障害者手帳の1種、1級2級以上の在宅の人に、市町村が本人に同意をいただき、地域の中で公開、公表していいと同意を得られた方を町内会に渡した。町内会に渡したところで止まっている。個人情報保護問題があるから。本人の同意がないところで、近所や町内の人が、個人情報を共有していいのか、という面で住民が不安がっていた。なかなかうまく災害発生時に、この人は避難行動要支援者だから、地域で支えようとは、つながらなかった。

2010年代、毎年のように災害が起きている。2014年には広島の安佐南区の豪雨、土砂崩れで、100数十人が亡くなった。2016年に熊本地震、2018年に西日本豪雨災害や大阪北部

地震、北海道の胆振地方の地震など、毎年のように大規模災害が発生し、福祉サービスを利用される方も犠牲になってきた。実は、内閣府の中に検討会が設置されて、2021 年 4 月に災害対策基本法の改正が諮られました。この改正以外にも、いろんな取り組みがありますが、今日は個別避難計画の話に絞って話を進めようと思います。

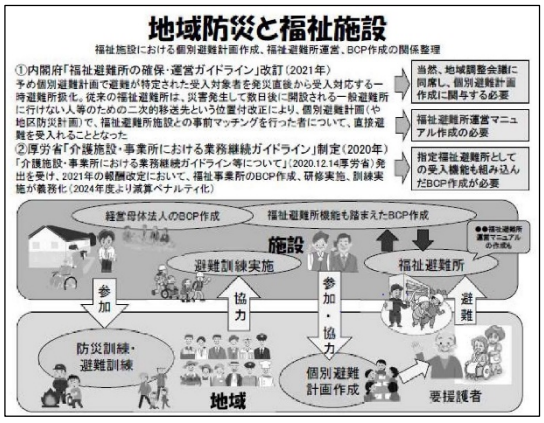
皆さんご存じかと思いますが、避難勧告の整理がされました。これでいうレベル 3、高齢者等避難が発令されたら、避難を始めてくださいと。それまでは、一体何が出たら逃げればいいのか分からなかったが、それが整理されました。そしてもう 1 つ、個別避難計画を市町村は立てる、義務ではないけど努めてくださいとなった。避難行動要支援者名簿に載っている人たちを、実際に災害が起こったとき、誰が安否確認をして、だれが避難所まで救出する手伝いをするのか、あらかじめ個別避難計画で決めておく。近所の協力者を避難支援等実施者と言うそうです。

法改正に先立って、日本介護支援専門員協会や日本相談支援専門員協会、全国民生委員児童委員連合会あてに、災害時に備えて、個別避難計画を策定してくださいと協力要請が出ています。2020 年、2021 年にかけて、いくつかの先駆的な自治体でモデル事業に取り組み、うまくいくかを内閣府が実験しました。

実はケアマネジャーが、自分が担当している在宅の要援護者の個別避難計画を作ろうとする際、報酬なく、ボランティアとしてやるのかという話が出てきた。このモデル的に取り組んだ大分県、兵庫県では、1 件個別避難計画を策定すると、7,000 円を出すことになった。これが全国に広がりつつある。担当する在宅の要援護者の個別避難計画づくりに、リーダー的に、中心になって取り組めば、ケアマネジャーに報酬が入る仕組みがだんだん出来つつあります。ただ、国が 7,000 円を保証しているわけではないので、自治体が予算化しないといけない。

内閣府から福祉避難所の確保運営ガイドラインが出ており、2021 年改訂されました。また、厚労省から業務継続ガイドラインが 2020 年に示され、2021 年の介護報酬の改定のときから出ています。次の 2024 年 4 月からの改定時に、BCP を策定していない、避難訓練をやっていなければ、減算対象になるペナルティがあります。

福祉避難所の運営は、一般の体育館や公民館の避難所での生活がうまくできないという人の二次的な避難所ではなく、個別避難計画に盛り込めば、高齢者等避難、レベル 3 が出たら、すぐに予め書いてある施設に避難することになりました。個別避難計画を作成する場面に、まず施設が出ていないと、知らないうちに決められても困りますので、そういう手間、仕事が増えてくる。さらに、そういう人たちを受け入れることを前提にした BCP も作ってお



かないといけない。今、利用している人だけでなく、さらにガイドラインでは、要援護者の人は家族と一緒に避難してきていいと書いてある。つまり、要援護者だけでなく、家族の食料や水なども含めて､我々はBCPを立てなければいけない。入所は年に2回、通所なら年1回の職員研修や防災訓練をしなければいけない。やること、防災がらみの仕事が、すごく増えてくる。

個別避難計画から地区防災計画、そして地域福祉との融合です。

内閣府から個別避難計画の様式が出ています。避難等支援実施者は近所の人になってもらわなければいけない。1人だと心もとないので2人くらい、避難支援等実施者を置くようにと、内閣府モデル様式で示されています。それぞれの自治体で、この様式は作り変えられるので、あくまでも参考です。

さらには避難所も決めることになっており、避難所までの逃げ方を地図に落としていく。これをケアマネジャーや民生委員、ご近所、本人、家族、場合によっては息子さんが離れた所に住んでいる場合は、来てもらって地域調整会議を開いてプランを固めていく。大変な作業になります。

ケアマネジャーと相談支援専門員がサービスを利用する要援護者のプランだけを作ればいいのではなく、社協のコミュニティソーシャルワーカー、地域福祉活動コーディネーター(SC)や、支援コーディネーター、地区を担当して地域支援に関わる専門職は、民生委員や自治会や地区社協と一緒に、制度を利用していない個別避難計画が必要な一人暮らしの虚弱なお年寄りの計画づくりも提案し、作っていく必要がある。

福祉の人が、これまでは孤立しないように、孤独にならないように、フレイル予防といって、居場所を作ろう、健康体操をしよう、集めよう、みたいなことはしていましたが、災害が起きた時、一人暮らしのお年寄りがどうなるかまでは、想像が及んでいなかったと思う。ここに来て、地域の方と一緒に災害が起きた時に、この人たちをどう守るか。これを取り組みの中に入れる必要があると思いますが、皆さん、どうお考えですか？

個別避難計画作成を通じた地域福祉との連動。

流れとしては町内会、自主防災組織、民生委員が、まず、どなたの個別避難計画を作るかを抽出する。危険地帯に住んでいる、一人暮らし、ADLとか判断能力で、スコアの高い人か

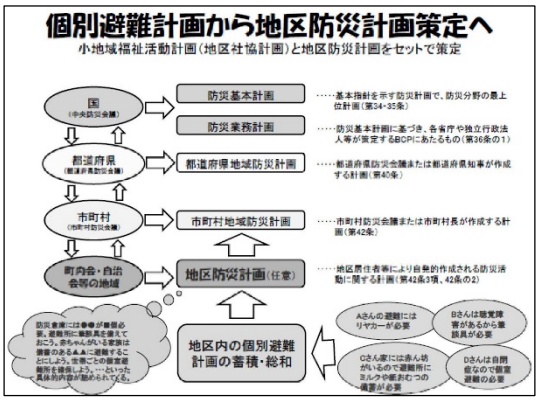
ら順に作ります。さらに本人及び家族の同意を前提とします。

地域調整会議を開いて、計画づくりをしますが、その際、ご近所の方に声掛けをして、避難支援等実施者として参加していただく。ここで、防災を理由に社会資源の発掘、人材発掘ができるのではないか。これが１つ。

さらに、地域調整会議でプランを立てる中で、一人暮らしのおばあちゃんの日常を知るなかで、災害が起こった時だけお手伝いするのではなく、買い物にも行けてない、体が弱くなっている、自力で外に出られないから１週間、話をしていないとか、いろんな状況が見えてきます。そうなると、これはほっとけない、災害の時の安否確認だけでなく、できることがあればと、共感原理をくすぐり、日常の生活支援活動にも関わっていく。

そんな仕組みづくりに発展させる個別避難計画づくりだけでなく、日常のインフォーマルケアの支え手として、住民の社会資源開発につなげられるのではないか。そういう社会資源の発掘、住民への防災啓発などを、生活支援コーディネーターや地域福祉活動コーディネーターは、これからは当たり前のように担っていく使命、役割があると思います。

地区防災計画の話です。



A さんの個別避難計画、B さんの個別避難計画を作ると、町内の防災倉庫にこういう物がないといけないとか、避難を手伝うツールがないとなる。地区防災計画は、示されたひな型に我が町を当てはめ、形式的に作るのではなく、個別避難計画のシグマ、総和として蓄積したものとして、こういう物を備えなければいけない。行政が指定した避難所以外に町内会や自治会、地区社協の判断で独自の避難所を作りたいという発想が出てもいい。地域の防災ニーズに即した地区防災計画を作ってもらいたい。そのお手伝いにも生活支援コーディネーターや地域福祉コーディネーターはぜひ、関わっていくべきだと思います。

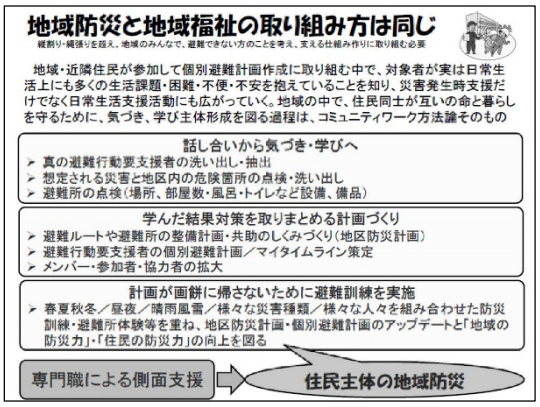
地区社協の活動計画だけでなく、地区防災計画も合わせて作っていくお手伝いができたらと思います。個別避難計画を作るなかで、一番よく言われるのが、個人情報の取り扱いです。知らない人の個人情報を共有するとなると、不安になります。でも、人間関係ができていて、顔見知りで、信頼関係があるという人なら、安心して個人情報を任せられると思います。手続き的には本人同意、また誓約書も必要ですが、前提として地域の中で顔が知れ合っている、人間関係ができていることが大切です。ここが難しいところ。無縁化社会化が進み、

地域の関係が希薄化する中、真逆。川を魚が遡上する、流れに逆らうようなこと、その手伝いを地域支援専門職はするべきだと思います。ここまでは要援護者の個別避難計画でしたが、私たちは大丈夫なのか？

個別避難計画やマイタイムラインが必要なのは、私たち全員だという思いがあります。例えば、今日来られている方々は、福祉事業所の職員、エッセンシャルワーカーですね。災害時には、施設運営をアシストするため出勤する。その施設には入所者がいるので。自分の家が大切だから行きません、とはならない。役割分担しながら出勤する。そのための BCP 策定です。その時、家族は残される。残された家族は小中学生かもしれない。彼らは両親がいなくても何とか生き抜いていけるような、家族の中での個別避難計画やマイタイムラインをぜひ作っておいてもらいたい。

先々週ですが、僕は岡山県の防災アドバイザーをしているので、今年度担当の玉野市の地区の防災訓練に参加しました。防災訓練には、おとうちゃんばかりが来るが、平日の昼間は会社に行っている。町内に残っているのはお年寄りと子どもばかりです。その人たちは、防災訓練をやってない。全市民、全区民が、我が家のマイタイムラインや個別避難計画を作って、訓練に参加するのが大切なんだと思います。防災を人任せにするのではなく、我々も一緒に取り組む必要がある。

地域防災と地域福祉は、行政施策的には別で、根拠となる法律も別です。だからといって、縦割りでちょん切るのでは、生活者としては一連の不安があります。



スーパーに食料を買いに行けない不安の延長線上に、災害時には逃げ出せないという不安がある。縦割りを乗り越えて、私たちは連携、融合していく必要がある。

語り尽くせませんが、「終わりに」に移ります。去年 7 月に、NNN ドキュメント、日曜日深夜のドキュメンタリー番組を見ました。金沢の竹川 操枝さん。50 歳を超えてから、防災士の試験を受けたそうです。その方は、地域の中で、次のように言っている。「もし、金沢市内全部が災害に遭ったら誰が助けてくれるのか。救急車、消防車は来ません。助けてくれるのは、隣近所です。仲良くしておいてください。面憎いと助けてもらえんよ。日頃から町内会活動、行事、サークルに参加しましょう。ボランティアにも参加しましょう。向こう三軒両隣のご近所付き合いを大切にしましょう。あなたの顔を地区で売っておいてほしい。見たことのない人より、見たことのある人を助けませんか？知らない人だったら、踏んで逃げ

るかもしれない。突き飛ばして、我が命が大事だから、逃げる。でも知っている人だったら、一緒に逃げようと手をひいてくれるかもしれない。避難所での食料配給時、最後におにぎりが 1 個しか残っていない。その 1 つを、知らない人同士なら殴っても取り合いになる。でも知り合いなら、半分こしようと、分けてもらえるのでは」と言っている。災害が起こったとき、自分の命を守るために、ご近所の関係を大切にしよう、と訴えています。

地域福祉と全く一緒であり、共感原理に訴える活動だと思います。竹川さんが言ったことを具現化する災害がありました。2014 年 11 月 22 日、白馬の奇跡です。深夜 10 時の長野県神城断層地震です。被害に遭ったのは白馬村のあたりだけ。断層が小さかったのだと思います。写真で分かるように、全壊 50 棟、半壊 91 棟、一部損壊 1426 棟。家に閉じ込められた方もたくさんいました。白馬村の堀之内地区では、26 人が崩れた建物の下敷きになったが、近隣住民に助けられた。1 時間ぐらい後に消防車が来たときには、もう住民が並んで、点呼して、41 世帯、118 人の安否確認が終わっていた。電気が止まって、真っ暗です。田舎なので、家にバールがあったり、懐中電灯があった。農機具が救助に役立つなどのメリット、強みがあったのかもしれません。なぜ、夜中の結構大きな地震で、誰も死なさずにすんだのか。分析したところ、長野県社会福祉協議会では、県内の市町村社協を通じ、住民支え合いマップづくりを 2000 年ごろから行っていた。白馬村の社会福祉協議会もご多分に漏れず行っていた。孤立防止のために、ご近所の誰と交流があるかなどを住宅地図に落としていくもの。住民流福祉総合研究所の木原孝久先生が作っているものです。これが導入されていたので、ご近所は、あのおじいちゃんが、どの部屋で寝ているまで知っていた。気持ち悪いかもしれませんが。崩れた家のここを掘れば、この窓を割って入れば、おじいちゃん、10 時だから寝床についてるはず、と助け合えた。支え合いマップを作った時は、災害に役立てようとは思っていなかった。おばあちゃんの孤立を防止しよう、おじいちゃんのフレイル予防をしようというものだった。それが、災害が起こったとき、命を守るツールになっていた。

もう 1 つの教訓。実際に私が関わった事例です。

石川県の内灘町、金沢市の郊外の住宅地。あかしや団地。昭和 40 年代に開発された住宅団地の住民懇談会に出たときに、参加したおじいちゃんが言った。「老夫婦の二人世帯で、要介護の妻の世話をしているが、災害時には私は妻をかついでは逃げられない。避難行動要支援者名簿への掲載に同意したが、あれはどうなっているのか」という話だった。要支援者リストに載っている災害弱者を本当に救援してくれるのか。毎年、避難訓練などをしているが、その際に私の家に助けに来てくれない、声かけも何もない。災害時に命を守ってもらえる気がしないと。実際に無理だと思います。名簿に掲載した意味は何だったのか。名簿がどう使われていて、誰が安否確認や救出を担当してくれるのか。町内会長の金庫の中に、避難

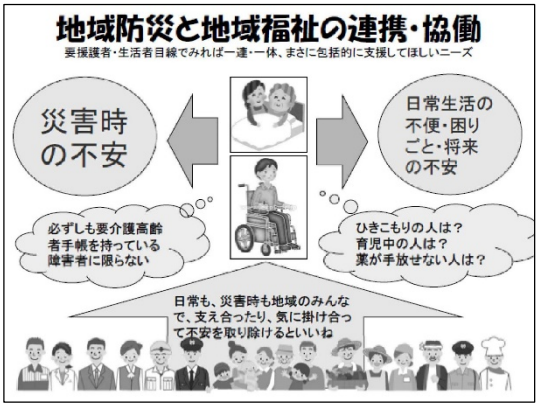
行動要支援者名簿が大切に保管されているのだろうと。「津波が来たぞ」と言いながらダイヤルを回し始めるのかな。災害対策基本法があっても、このおじいちゃんは守られません。

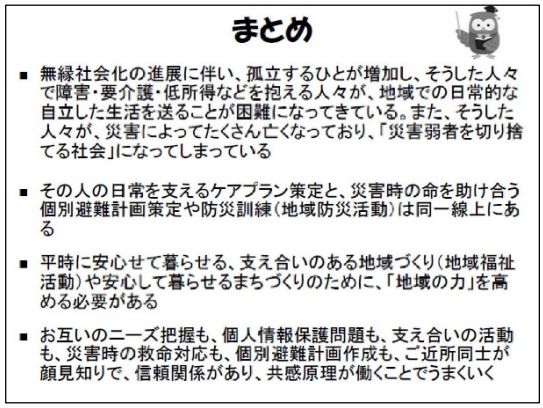
一方、鎌倉の保健師が言っています。在宅療養患者のAさんは、障害者にも要介護認定者にもなっていない。本人は自力では避難できないので、不安だと相談があった。保健師は、「自分から何かあった時に助けてと、ご近所にお願いしておけばいい」と言った。本人も、「そうだよね、頼れるのご近所だけ。民生児童委員を通じて、自治会長、ご近所に集まってもらい話をしたところ、トントン拍子、みんなで支えようとなった。制度の対象にならないAさんは、ご近所とのつながりがあるので、命が守られる。皆さんはどっちの町に住みたいですか？鎌倉に引っ越せと言っているのではないです。そんな町を作ってほしい。そういう町づくりのお手伝いを専門職の皆さんにやってほしいのです。

行政が何かやってくれると、思っている人もいるかもしれません。

実際、これまでの大きな災害で、国や行政、自衛隊がどれだけ助けてくれたか。どうしてもサポートに来るまではロスがある。その間、ご近所力が命を救うのです。福祉と防災は別物じゃない。暮らしている身からすれば一連のものです。その困りごとに、皆さんが寄り添って信頼し合える、顔の見える地域づくりを進めていただけたらと思います。万感の思いがありますが、非常に時間が短かったので、一部の話しかできませんでした。ご容赦いただければと思います。

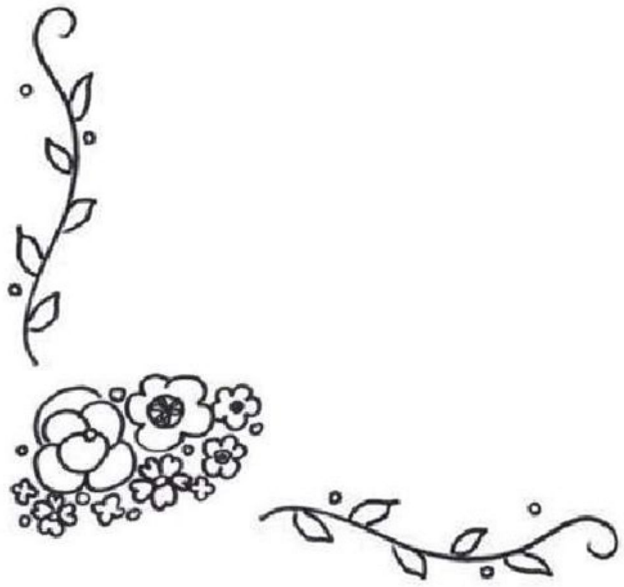
ご清聴、ありがとうございました。





Fin

I appreciate your listening to my lecture.



実践研究発表

ポスター発表一覧

【掲示】13:00～16:25　　*【ラウンジ　ウィステリア】*
【コアタイム※】15:10～15:40

助言者　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）

	発表者	所属	タイトル
1	長島　正明 杉原　知久磨	社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション	訪問介護における新型コロナ感染症対応とは －新型コロナ感染症、陽性者への取組み－
2	髙山　都規子	在宅介護家族会 かたよせ会	介護人生の卒業生の有様
3	山根　圭以子	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	遊歩倶楽部による歩行練習と相乗効果 －各人の有する問題点に着目して－
4	松岡　紗来	東京リハビリテーションセンター世田谷 障害者支援施設梅ヶ丘	高次脳機能障害を呈し、地域生活に破綻をきたしたことから自立訓練を利用して再度地域移行に至った症例

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。
　ポスター会場は、13時～16時25分まで自由にご覧いただけます。

口頭発表一覧

第1分科会　【3-210教室】

1　子ども・若者が輝くまち　世田谷

進行役・助言者　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	及川　愛奈 大下　夕華 金城　ゆりな 峯島　彩恵	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室	子どもの野菜嫌いと食育の重要性 －野菜嫌いを克服するために－	13:30
2	小泉　葉南 小出　ゆい 白藤　春香 早見　紗衣	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室	遊具の減少に伴う子どもの発達の変化 －公園遊具と多様な世代の子どもたちの視点から－	13:55
3	滝本　美花 大島　美喜 佐藤　尚武 坂田　朗	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	コロナ禍における主体性を育むための保育について	14:20
4	上田　若奈 山中　あすか 岡田　真未子	社会福祉法人 福音寮	地域とともに自立支援を －福音寮からのたびだち－	14:50
5	佐藤　里紗 宮野　友美袈	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 玉川地域社会福祉協議会事務所	演劇で知る！地域の頼れる仕組みのアレコレ！？ －演劇を通じて地域のつながりを取り戻す！ 学生、劇場、福祉の連携プロジェクト－	15:15
6	平井　美範 横田　菜桜 渡邊　丈琉 クーパー 耀子	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	女子大学生を対象としたマッチングアプリの実態調査	15:40
7	新垣 陽大　大槻 麻実 尾崎 悠人　西山 博務 羽川 夏音　本多 幸四郎 宮田 麻由	日本大学文理学部 社会福祉学科 2年	世田谷区若者支援と福祉社会フィールドワークの連携からの学生の学び －中高生の居場所「たからばこ」での経験から－	16:05

第2分科会　【3-211教室】

2　地域をつなぐネットワーク

進行役・助言者　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	名倉　壮郎 小島　雄一郎 浅村　訓子 瓜生　律子	砧地域ご近所フォーラム 2023実行委員会	砧地域ご近所フォーラム2022 よってらっしゃい♪みてらっしゃい♪新しい手も繋がっている手も離さない！ －すべての世代を砧地域でつなげるために－	13:30
2	田口　信彦 川﨑　千枝	社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会 地区サポーターの会「なんじゃもんじゃの会」 社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 上馬地区事務局	「なんじゃもんじゃの会」手ぶらで参加できるボラ活のススメ －住民による地域福祉ボランティア活動の一つのモデル－	13:55
3	真下　美弥子 辻　清哉	社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園	コロナ禍での新設小規模多機能型介護施設の地域交流 －地域を「ことば」とアートでつなぐ－	14:20
4	河田　祐子 片岡　沙織 小笠原　英毅	田辺薬局 三軒茶屋店	薬局カフェを通した地域へのアプローチ －ファーストアクセスの場を目指して－	14:50
5	吉田　和弘	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	社会福祉施設「まもりやま工房」における地域交流に関する実践 －自主生産品を使った地域交流について－	15:15
6	小林　正明	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 連携推進課	世田谷区社会福祉協議会の食支援の取り組み	15:40
7	竪山　順子 上原　明子 小澤　智佳子	一般社団法人 つながりラボ世田谷	MAPS CAFÉの目指すもの －親なきあとの障害者のみまもり－	16:05

第3分科会　【3-205教室】

2 地域をつなぐネットワーク
5 福祉の魅力向上・発信
3 多様性を認めあう共生社会づくり

進行役・助言者　川﨑 愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永 宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	小林 ゆかり 後藤 愛	NPO法人 せたがや子育てネット	地域で暮らす/育つ －コロナ禍での子育て支援の現場と地域のつながり－	13:30
2	市村 和行 秋森 かつ枝 伊藤 潤一 浅倉 信次	NPO法人せたがや移動ケア 世田谷区福祉移動支援センター おでかけサポーターズ	玉川おでかけバスの市民によるテスト運行の報告 －おでかけバスでコミュニティつくりを目指します－	13:55
3	鈴木 祐輔 磯﨑 寿之	三茶にサンタがやってくる実行委員会	三茶にサンタ電車を走らせて子どもたちに プレゼントを －経済困窮家庭支援を地域共創をもって－	14:20
4	西沢 晴斗 武田 郁子	慶応義塾大学総合政策学部 4年 (「たまごの家」) 世田谷区介護予防・日常生活支援総合事業住民主体型デイサービス「たまごの家」	地域における介護予防のための「通いの場」を運営するボランティアスタッフの参加と継続に至る要因とプロセスの探索	14:50
5	木原 正昭 泉谷 一美 服部 里絵 鬼塚 正徳	NPO法人せたがや移動ケア 世田谷区福祉移動支援センター そとでる	コロナ感染の影響下における「そとでる」の福祉輸送の活動報告 －コロナ禍における「そとでる」と事業者の奮闘について－	15:15
6	長原 來未 平敷 柚喜 村田 美優 谷戸 そら	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 社会福祉・精神保健研究室	メンズメイクに対する意識調査	15:40
7	鈴木 真衣 竹澤 奏 神田 裕子	東京医療保健大学 医療保健学部医療栄養学科	せたがや福祉区民学会活動を通して、学んだこと、これから自分たちができること －福祉の仕事に就いている方々の話を伺って－	16:05

第4分科会　【3-202教室】

4 ケアにおける協働・連携
5 福祉の魅力向上・発信

進行役・助言者　大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井 浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	寺尾 洋介　磯野 かおり 落合 美夏　保坂 和美 酒井 恵　藤原 ふさ子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	特養ホームにおけるチームアプローチで取り組む 褥瘡ケア －ラップ療法を用いたケアの実践－	13:30
2	西田 正 直井 史之	社会福祉法人東京有隣会 特別養護老人ホーム 有隣ホーム	終末期ケアへの私たちの想い －わがまま言ってもいいんです－	13:55
3	三浦 綾華	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム 久我山園	介護施設における新型コロナウイルス感染症まん延防止対策を実践して	14:20
4	細井 佑哉	東京リハビリテーションセンター世田谷障害者支援施設梅ヶ丘	移行先で適切な支援（ケア）を受けるために －動画を用いた情報共有－	14:50
5	康 徳龍 渡辺 重人	東京リハビリテーションセンター世田谷介護老人保健施設梅ヶ丘	介護老人保健施設利用者の自主リハビリの有効性	15:15
6	瓜生 律子 上之園 佳子	世田谷区福祉人材育成・研修センター 日本大学文理学部社会福祉学科 特任教授	安心して在宅生活を送るために －世田谷区福祉事業所調査の結果を踏まえ より良いケアの実現－	15:40
7	栃倉 勝 石原 しのぶ 髙橋 福太郎	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所	認知症があってもこの街で暮らす 行方不明者を救え！	16:05

第5分科会　【3-203教室】

6　一人ひとりに向きあった実践

進行役･助言者　諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	傳田　智也 五十嵐　泰起 石政　吾朗	日本大学文理学部 社会福祉学科 4年	せたがやゼミナールのコロナ禍での実践	13:30
2	黒野　大希	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	右膝骨折後、保存治療で清拭対応となっていた 利用者の入浴再開までの報告	13:55
3	比嘉　政美	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	アロマセラピーで認知症ケア －芳香療法で穏やかな日々を－	14:20
4	水内　寿美子 葭原　華陽 根本　一弥	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	お一人お一人の居場所を守ります	14:50
5	高橋　政道	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ･ホーム世田谷	地域で支える「重度失語症者」へのコミュニケーション支援 －デイ・ホーム世田谷「ことばの教室」の実践より－	15:15
6	白石　哲也	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	”その人らしさ”と向き合うことで主体性を引き出すことの出来た一症例 －YouTubeによる自撮り機能活用による社会参加の促進－	15:40
7	長谷川　裕和 小川　知子 設楽　希	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	つながりながら自分らしく生きる －小規模多機能ホーム三宿が支える生活－	16:05

第6分科会　【3-206教室】

5　福祉の魅力向上･発信　　6　一人ひとりに向きあった実践

進行役･助言者　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	木畑　実麻 手塚　由美	一般社団法人 輝水会	小・中・高校生夏休み福祉体験を経て －コロナ禍におけるオンライン開催の実践－	13:30
2	東内　郁美	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	Aちゃんとのトイレトレーニングでの関わり	13:55
3	浜川　真海	社会福祉法人たちばな福祉会 RISSHOKID'Sきらり代沢	非認知能力を育む乳児保育の実践	14:20
4	石丸　拓也	社会福祉法人嬉泉 おおらか学園	Iさんの現状における支援と取り組み	14:50
5	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房	「受容」のなかで求められることを考える	15:15
6	斉藤　由子	社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房	Aさんとの対話の積み重ねから学んだこと	15:40
7	長見　亮太	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立下馬福祉工房	仲間の場から外れがちなAさんへの誘いかけ支援 －クローズアップ場面を通してAさんが表した心情への気付き－	16:05

ポスター発表

【ラウンジ　ウィステリア】

助言者

田中　耕太　（世田谷区保健福祉政策部長）

山戸　茂子　（世田谷区高齢福祉部長）

	発表者	所属	タイトル
1	長島　正明 杉原　知久磨	社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション	訪問介護における新型コロナ感染症対応とは －新型コロナ感染症、陽性者への取組み－
2	髙山　都規子	在宅介護家族会 かたよせ会	介護人生の卒業生の有様
3	山根　圭以子	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	遊歩倶楽部による歩行練習と相乗効果 －各人の有する問題点に着目して－
4	松岡　紗来	東京リハビリテーションセンター世田谷 障害者支援施設梅ヶ丘	高次脳機能障害を呈し、地域生活に破綻をきたしたことから自立訓練を利用して再度地域移行に至った症例

※コアタイムは、１５時１０分～１５時４０分まで発表者が説明および質疑に対応します。

ポスター会場は、１３時～１６時２５分まで自由にご覧いただけます。

助言者

田中　耕太
（世田谷区保健福祉政策部長）

山戸　茂子
（世田谷区高齢福祉部長）

訪問介護における新型コロナ感染症対応とは

ー新型コロナ感染症、陽性者への取組みー

社会福祉法人奉優会　等々力の家訪問介護ステーション

長島 正明、杉原 知久磨

（感染症対策　新型コロナウィルス感染症　新しい生活様式）

目的

2019 年 12 月より爆発的に感染拡大した新型コロナウィルス感染症の為、多くの方に行動制限やそれに伴う様々な環境や生活様式の変化が求められた。そのような状況下、当事業所で行われた新型コロナ感染症陽性者への取り組みや対応で得られた経験から、訪問介護で出来る新型コロナ感染症対応ついて新たな知見を得る事を目的とした。

質疑応答

Q：発表事例は 2021 年 8 月で一番入院ができなかった大変な時期でしたが、防護服の着用に際して脱水症対策はされたのでしょうか。

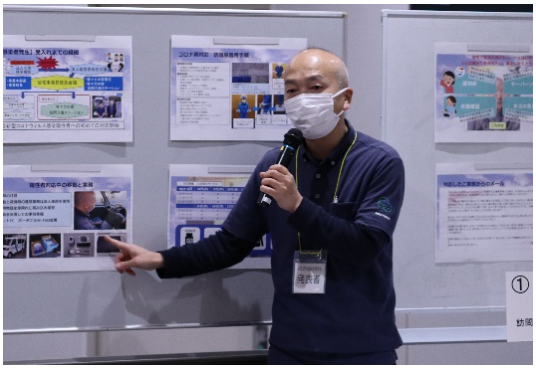
A：職員はサービスが終了したら、こまめな水分補給を行うことで脱水症対策を行いました。また、訪問する家の中は換気はしていましたがエアコンは効いていたので、防護服着用で脱水症になることなくサービスを提供することができました。

Q：感染された方のご家庭に入るケースは、この発表事例の方だけだったのでしょうか。

A：幸いにもこの発表事例の方だけでしたが、1 件だけでも多くの連携がないと実施できないことが今回初めてわかりました。

Q：事例以降も何回かコロナ感染の波がありましたが、利用者で感染された事例はありましたか。

A：同居家族の感染によるサービス休止依頼のケースはありましたが、幸いにも当事業所での感染者発生はありませんでした。



発表を終えて　　長島　正明（社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション）

ポスター発表と言う事であまり時間が取れず、思う事の半分も言えなかったように思えます。

しかし、発表後にご質問を頂けた事で、発表では言い切れなかった事やこちらの想いもお伝え出来た事、ご質問者の方に感謝申し上げます。

今回の取り組みでは、一事業所では難しい新型コロナ感染症対応でも、法人の力を合わせれば対応できた事をお伝えいたしましたが、その反面、一人の感染者を対応するのにも訪問介護で対応するには多大な労力が必要という事も伝わればと思いました。

今後も新型コロナ感染症への対応は続きますが、より実践的な対応についてこれからも考えていきたいと思います。

助言者コメント　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）

・このコロナ禍の 3 年間、感染対策をしながら訪問介護を続けていくには、多大なご苦労があったものと思います。今回は陽性者への訪問介護の取り組みを、現場と法人の緊密なコミュニケーションのもと、人と物を整えて、対応されておりました。今後、陽性者へのサービス提供が可能かどうかの判断基準が、この実践を通じてできたのではないでしょうか。等々力の家訪問介護ステーションの取り組みが、訪問介護の現場を担うほかの事業所にとって、大変参考になる取り組みになると思います。当日も訪問介護の合間というご多忙の中、発表していただきありがとうございました。

・今回現場の生の声を聴かせて頂いて、ヘルパー業務のご苦労を感じました。まだコロナ感染が収まっていないことと、インフルエンザ流行の恐れもありますが、今後も区民の在宅生活を支えて頂ければと思います。

介護人生の卒業生の有様

在宅介護家族会　かたよせ会
髙山 都規子

（家族介護　明るい未来のために）

目的

平成 6 年、私の定年と同時に主人が脳梗塞で倒れ、介護する身となる。その当時、社会福祉協議会で介護をしている人の慰労の旅行会があり、知り合った仲間 12 名で平成 9 年 11 月「かたよせ会」を立ち上げた。お互いの情報交換や癒やしを目的とした。今年で 27 年活動している。

質疑応答

Q：平成 6 年から介護をされ、その頃は現在と比べればサービスが少なかったと思います。平成 9 年から活動を開始されていますが、現役で介護に取り組まれている方にも、参加してほしいと思っていらっしゃいますか。

A：平成 9 年当時は、介護保険前でしたが、世田谷区にはいろいろなサービスがありました。現在、会としても本当は現役の方に参加してほしいのですが、なかなか介護を必要とする人を家に残して外出するということは難しいです。介護をしている人でも外出を自由にできる、そういう環境が世田谷区でも整えばと思いますし、また、そのようなサービスを自由に使えると良いと思います。

発表を終えて　　髙山　都規子（在宅介護家族会 かたよせ会）

私達のかたよせ会もコロナ禍のため、会場が使えず、人数制限があり、十分活動が出来ませんでした。しかし出来るだけ皆様に参加して頂きたく色々と考えましたが思いどおりにいきませんでした。

今回、世田谷区制 90 周年記念で「かたよせ会」も表彰されました。大変喜ばしいことで永く続けてこられたのも会員皆様のご協力が大きいと思います。例年は活動発表が教室でしたが、今回はフロアで行われたため、数多くの皆様に見て頂けたかと思います。ただ今回はパネル発表者が少なかったです。

助言者コメント　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）

介護保険が始まる前の平成 9 年からかたよせ会を立ち上げ、介護の情報が今ほどなかったころから、介護に携わられ、大変なご苦労があったものと推察します。会として多くのイベントを開催され、介護をする方々の貴重な情報交換の場、リフレッシュや自身の健康増進など、様々な役割を果たしてきたものと思います。コロナ禍でも、工夫されてイベントを開かれるなど、ご苦労をされながらも積極的な活動が続いております。会のみなさまにおかれましては、コロナ対策などで大変な時期かと思いますが、どうぞご自愛され、お元気でご活躍ください。

遊歩倶楽部による歩行練習と相乗効果

ー各人の有する問題点に着目してー

社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム

山根 圭以子

（個別支援　機能訓練）

目的

2009 年 3 月に歩行練習プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて 13 年目になり登録数 70 名、「歩けるデイ」として取り組んできた。新型コロナウイルスまん延の中、高齢者の外出機会が減少し下肢筋力の低下や意欲低下の相談が増えるようになった。それらに対し、従来の取り組みを見直す必要があると考え、遊歩倶楽部が在宅生活にどのように役立っているのか・・・チームを作って取り組み、「在宅生活をサポートするデイ」における遊歩倶楽部の可能性を考えた。

質疑応答

Q：理学療法士による支援が入るとのことでしたが、具体的には、どのような支援が入るのでしょうか。

A：ご利用者の「こうなりたい」を共有しています。ご利用者のニーズを共有し、理学療法士のアドバイスがあります。

Q：理学療法士のアドバイスに基づいて、その方の個性やニーズにあった支援をするのだと思いますが、手法の中心は、歩くことでしょうか。

A：その方にもよりますが、例えば、階段昇降や歩行器の操作能力の向上など、歩行を基本に支援を行っています。

発表を終えて　　山根　圭以子（社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム）

「遊歩クラブ」の活動は、歩行は自立した生活に欠かせない支援とのお言葉をいただきました。

引き続き、在宅生活サポートデイとして、いつまでも安心してご自宅で生活できるよう、今できることに着目しながら、ご本人の「こうなりたい」を共有し、楽しく機能訓練に繋げて行きたいと思います。

また、ＡＩによる歩行分析も活用することで、より具体的に現状を提示することが可能となり、モチベーションの向上に繋がるのではないかと考えます。

「遊歩クラブ」を通して、日々の生活に、楽しみ・喜び・生きがいを感じていただけるよう、個別性の高いプログラムの提供をめざして行きたいと思います。

助言者コメント　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）

・人は自分の意志でどこかに行くこと、例えばご利用者は、基本的に自分のタイミングで、自分でトイレへ行く力を持ちたい、また、ご家族は、介護力を持ちたいということから、こういった取り組みは大変すばらしいと思います。引き続きご利用者が豊かに生活できるように取り組みを続けていただきたいと思います。

・発表時間が短く、せっかくの取り組みをもっと多くの方に聞いて欲しいと思いました。課題に対する真摯な取り組みに期待しています。

高次脳機能障害を呈し、地域生活に破綻をきたしたことから自立訓練を利用して再度地域移行に至った症例

東京リハビリテーションセンター世田谷　障害者支援施設梅ヶ丘

松岡 紗来

（自立訓練　高次脳機能障害　地域移行）

目的

自立訓練は、障害のある人が自立した日常生活または、社会生活が送れるよう、一定期間訓練や支援を行う障害福祉サービスの一つである。今回、回復期を経て一度は地域移行したが、地域での生活の中で問題を抱えた人が自立訓練へ繋がり、改めて地域移行に至った症例を経験したので報告する。

質疑応答

Q：障害支援というより生活支援のようにお見受けいたしましたが、その方の暮らしそのものから支援のプランを作成されたのでしょうか。

A：発症から７年経過して、自立訓練が開始となったため、生活をしていく上での問題点に焦点を当てて支援しています。

Q：どのような種類のリハビリをされていますか。

A：集団リハビリを行っています。人と関わる中で、問題行動などが見られたので、相手の方がどのように思うかを考えてもらえるようなリハビリを中心に行っています。

発表を終えて

松岡　紗来（東京リハビリテーションセンター世田谷障害者支援施設梅ヶ丘）

発症から７年経っても、日常生活や社会生活を送れるように、訓練を行える場が世田谷区にあるという事や当センターでの自立に向けた取り組みや、成果を発表出来る機会を頂けてよかったです。

多くの方に、自立訓練の支援内容が伝わっていければ幸いです。

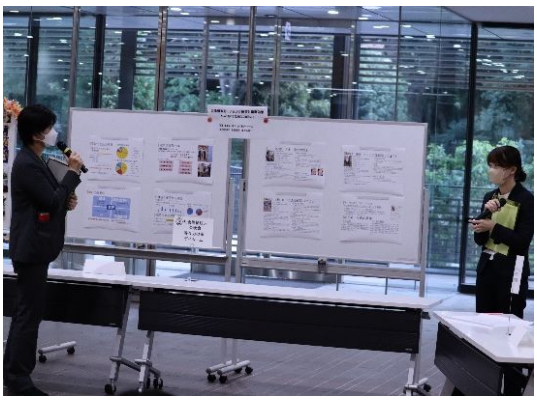
助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）

・リハビリを行う方法から、いわゆる障害者支援というより、その方の生活習慣や暮らしに寄り添ったリハビリであることが分かりました。

・障害福祉サービスの一つであるが、発表された事例は「生活支援」の内容でした。自立して生活できるよう、個人の特性に寄り添ったものであり、もっと多くの方にしっかり聞いて欲しかったと思います。引き続き、丁寧なサービス提供を期待しております。

・その方の暮らしや生活習慣に寄り添ったリハビリをされており、目からウロコでした。大変なお仕事と思います。こういう支援をしてくださっている施設が世田谷区内にあることは、心強いです。引き続き、取り組んでほしいと思います。



口頭発表　第１分科会

【3-２１０教室】

進行役・助言者

園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

	発表者	所属	タイトル
1	及川　愛奈 大下　夕華 金城　ゆりな 峯島　彩恵	東京都市大学 人間科学部児童学科 3 年 相談援助・社会福祉研究室	子どもの野菜嫌いと食育の重要性 －野菜嫌いを克服するために－
2	小泉　葉南 小出　ゆい 白藤　春香 早見　紗衣	東京都市大学 人間科学部児童学科 3 年 相談援助・社会福祉研究室	遊具の減少に伴う子どもの発達の変化 －公園遊具と多様な世代の子どもたちの 視点から－
3	滝本　美花 大島　美喜 佐藤　尚武 坂田　朗	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	コロナ禍における主体性を育むための保育に ついて
4	上田　若奈 山中　あすか 岡田　真未子	社会福祉法人 福音寮	地域とともに自立支援を －福音寮からのたびだち－
5	佐藤　里紗 宮野　友美袈	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 玉川地域社会福祉協議会事務所	演劇で知る！地域の頼れる仕組みのアレ コレ！？ －演劇を通じて地域のつながりを取り戻す！ 学生、劇場、福祉の連携プロジェクト－
6	平井　美範 横田　菜桜 渡邊　丈琉 クーパー 耀子	東京都市大学 人間科学部児童学科 3 年	女子大学生を対象としたマッチングアプリの 実態調査
7	新垣　陽大 大槻　麻実 尾崎　悠人 西山　博務 羽川　夏音 本多　幸四郎 宮田　麻由	日本大学文理学部 社会福祉学科 2 年	世田谷区若者支援と福祉社会フィールドワーク の連携からの学生の学び －中高生の居場所「たからばこ」での経験から－

進行役・助言者

園田　巌

（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）

樋口　美津子

（子どもの生活研究所こぐま学園長）

子どもの野菜嫌いと食育の重要性

―野菜嫌いを克服するために―

東京都市大学人間科学部児童学科　３年　相談援助・社会福祉研究室
及川 愛奈、大下 夕華、金城 ゆりな、峯島 彩恵

（子ども　野菜嫌い　食育）

目的

今回の調査研究の目的は、児童期の野菜嫌いの実態、原因を調査し結果を分析しながら、幼児期の食育活動の重要性について考察することである。

私たちは、保育所での実習を通して子どもの野菜の好き嫌いの多さを実感し、幼児期の食育活動がその後の野菜嫌いの克服に影響を及ぼすのではないかと考え、本研究を行うこととした。

質疑応答

Q：幼稚園や保育園では、みんなで参加・体験できる「芋ほり」が食育活動として取り上げられているケースが多いと思います。一方、ナスやピーマンなど収穫量が少ない野菜での実施も食育活動として大事だと思いますが、その場合はどのような工夫が必要だと思いますか。

A：例えば、子ども一人ひとりに個別にプランターを用意したり、グループ分けをするなど、少人数単位で野菜栽培を実施できれば、沢山収穫ができない野菜でも身近に食育活動ができるのではないかと考えます。

Q：食育の基本として「楽しく食べる」ことが大切な視点であると考察で伺いましたが、子どもたちが好きだと思われる、キャベツやレタスなどの葉野菜の栽培も食育活動として大切だと思いますがいかがでしょうか。

A：今回は好きな野菜の調査を行っていなかったので、今後の課題と考えます。好きな野菜の栽培も含めて、子ども達がどうしたら楽しく食べられるかということを考えていくことが、教育・保育施設としての役割だと感じましたので、引き続き研究を深めていきたいと思います。

発表を終えて

峯島　彩恵（東京都市大学人間科学部児童学科 3 年
相談援助・社会福祉研究室）

興味のある分野を調べて発表できて良かったです。これからも研究内容を深めていき、実習やその後の将来へ学びを活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

助言者コメント

園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・今回、学生達が食育についてこのように研究していることが、とても意味があると思いました。食育の基本である「楽しく食べる」ことは大切であり、嫌いな野菜を食べることを強要せず、子ども自ら食べたいという気持ちをはぐくむことが重要であると学生が感じたことは大事なことであると思います。日常の関わりを通して、子どもが身近な大人に愛着や要求を素直に表し、やりとりを楽しむ中で、徐々に周りの人に気持ちが向き、周りの人が食べているものに興味を示したり、「食べてみよう！」と食べられるものが広がっていくなどの前向きな変化が見られます。そして「自分を大切にする」気持ちもでてきます。生活全体を通して、子どもの意思の尊重や、興味に合わせた働きかけ、安心感や信頼が得られる関りに学生たちが目を向けていくことが大事なことであると感じます。

・食育は、食を通して周りの人への言葉や働きかけを信頼して受け入れ、人間関係をつくることにも繋がっていくことですので、学生達が実習に行った時に、「食育」についての意見を、どんどん現場の先生達に伝えてください。そして子ども達の育ちを一緒に考えていってほしいと思いました。

・子どもは大人のおいしそうに食べる姿や声かけによる影響が大きいので、そのような人間関係が大切になってくると思います。

遊具の減少に伴う子どもの発達の変化

－公園遊具と多様な世代の子どもたちの視点から－

東京都市大学人間科学部児童学科　３年　相談援助・社会福祉研究室
小泉 葉南、小出 ゆい、白藤 春香、早見 紗衣

（公園　世代　発達）

目的

私たちは大学の講義で遊具について学び、楽しさだけではなく危険性もあるということに衝撃を受けた。また私たちの幼少期に比べ、近年、遊具が減少しているのではないかと感じるようになった。

そのことから、私たちはどのような遊具が減少しているのかを調査した。また、それに伴う子どもの発達にどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とした。

質疑応答

Q：結論で、「遊具の減少が子どもの精神面の発達に影響を与える」という話をされていましたが、具体的にはどのような影響がありますか。

A：今回は当事者による意識調査からの考察を行ったので、発達面に関しては言及することができませんでした。重要な視点であると思われますので、今後の課題としていきたいです。

Q：発表者自身は、遊具でのケガの経験はありますか。

A：ブランコから落ちて、頭を打ち、出血したことがあります。今回の研究でも多く報告された事故でした。普通の使い方をしていてもケガをする事はあると思いますので、どのような対策があるのかは今後の課題としていきたいです。

発表を終えて

白藤　春香（東京都市大学人間科学部児童学科 3 年
相談援助・社会福祉研究室）

緊張しましたが、今まで調べてきたものを学会という場で発表できてよかったです。とても良い経験となりました。ありがとうございました。

助言者コメント

園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・昨年でしたでしょうか、東京都市大学の学生達が「公園の魅力を考える」というテーマでの研究発表をされていました。公園が自分にとって身近にあり、友達との交流を期待する場所として感じている学生が多く、相互交流の時間を公園で過ごす中で感じていたかと思います。それが時代とともに変わり、公園で遊ぶことや公園の遊具もどんどん少なくなってきています。公園の遊具での遊び方もいろいろと変わりました。確かに遊具に対する事故の考え方として、まず安全管理は大事です。ただ危ないから、すべて無くしていくのではなく、やはりそこで「どう気を付けて使っていくのか」を考える、工夫する、自分で危なくないように遊び方を学んでいくということが大事なことであると思います。リスクとハザードを理解し、把握しつつ、子どもの発達を考えていくことが必要です。

・人間関係やコミュニケーションに繋がる遊びができる遊具、公園の魅力をこれからも伝えていってほしいです。どんな公園がいいか、どんな遊具で、どんな遊びが良いのか、学生達が継続して研究し、そしてどんどん啓発していってほしいと思います。

コロナ禍における主体性を育むための保育について

社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園
滝本 美花、大島 美喜、佐藤 尚武、坂田 朗

（コロナ禍　主体性を育む　乳児保育）

目的

私たち鎌田のびやか園分園では、子どもの主体性を重要視した保育を行っており、子ども達が保育園での生活を通して、様々な経験を得る中、自分で感じ・考え・選択できる保育を行うことが主体性の育みへと繋がるのではないかと考えている。特に乳児期においては自発的に行動できるよう関わっている。しかし、ここ数年の新型コロナウイルス感染症が拡大した影響で家庭や保育の生活環境が大きく変化し、今までの関わり方ではうまくいかないことも増え、主体性を育むことの困難さを感じるようになった。特に問題視したのは、もともと鎌田のびやか園分園は企業ビル内にあり園庭がなく、主な戸外活動は近隣の公園へ行くことであった。しかしその公園では他の保育所や子育て家庭等、様々な方が集まる場所であった為、コロナ禍で戸外に出る機会が減ってしまった。さらには戸外活動が減ったことで子ども達が靴や靴下の着脱、手洗い等の身の回りの習慣を経験する回数が少なくなり、身の回りのことに興味を持ち自分でやってみようとする、自発性もあまり見られなくなってしまった。今回、ここ数年で大きく変化した環境の中でどのような工夫を行えば、主体性の育みに繋げていけるのか検討し、私たちが展開する保育内容・活動の向上の一助にすることを目的とする。

質疑応答

Q：分園と本園での交流はあるのでしょうか。

A：鎌田のびやか園分園では、送迎保育ステーション事業（※）を行っており、分園の子どもが本園の園庭で遊んだりすることもあります。また、コロナ禍で、複数の職員が体調不良となることもあり、職員も本園・分園の両方で勤務する体制をとっています。

※ 鎌田のびやか園分園内において行っている世田谷区初となる送迎保育事業。鎌田のびやか園分園の一室を送迎の拠点とし、連携する同法人内の宇奈根なごやか園・鎌田のびやか園に専用のバスで子どもたちを送迎しています。

発表を終えて　　滝本　美花（社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園）

コロナ禍で様々な問題が起きている実情や、その中でどのようにしたら主体性を育む保育ができるかを、日頃の保育の工夫や経験を踏まえて、学会を通して伝えることができて良かったです。ご意見にあったように、同じ保育に携わる方や他の子育て世代の方にもこの発表内容を周知し、より良い保育ができる環境づくりのきっかけになれば良いのではないかと思いました。

助言者コメント　　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・コロナ禍は、保育の重要なテーマである「子どもの主体性を育む」取り組みに対して、大きな弊害をもたらしています。そのような環境下で今できることは何かを真剣に考えながら具体的実践に繋げていることは、大いに評価すべき点であると考えられます。特に、経験不足から生じる課題を綿密に洗い出し、その解決のために 5 領域に基づいた方法論を全職員参加のもと開発していることに感銘を受けました。鎌田のびやか園の保育の質の高さを髣髴とさせる発表内容であったと思います。

・コロナ禍において、本当によく実践されており、敬意を表します。コロナ禍での子どもへの影響は、まだまだ社会に理解されていない状況ですので、今後も発信を続けて頂ければと思います。

・非常にレベルの高い発表でした。まず一つ目として、発達過程を踏まえて、年齢に応じた様々な取り組みが行われていました。次に、子どもへの観察力が鋭く、課題の抽出からどのような手法でその課題に取り組むかということが、スタッフの協力体制の下で自然に行われていました。最後に、子どもの興味関心をいかに育むかということが、よく考えられていました。今後の取り組みに期待します。

地域とともに自立支援を

―福音寮からのたびだち―

社会福祉法人　福音寮

上田 若奈、山中 あすか、岡田 真未子

（児童養護施設　自立支援　地域）

目的

児童養護施設福音寮では、現在 3 歳から 19 歳までの子どもたちが生活しています。近年では生活している子どもたちのうち中高校生が占める割合が増加しており、高校卒業後に退所する子どもたちの自立支援の重要性が増しています。今回の発表では、子どもたちが自立支援で抱える困難さを整理しながら、地域と共同でできる自立支援の形を地域の皆様と検討することを目的としております。

質疑応答

Q：地域の中に居場所づくりをされているとのことですが、退所して自立した子どもが相談に来ることは多いのでしょうか。

A：自立がうまくいくよう、退所したあとで暮らす先と職員とともに話し合い、準備を進めています。いつでも帰ってこられる雰囲気はあり、また、帰って来た時に宿泊できるスペースもあります。

発表を終えて　　上田　若奈（社会福祉法人 福音寮）

大きなミスもなく発表を終えられて良かったです。質問には時間の都合上ひとつのみの応答でしたが、具体的エピソードを取り入れながら、もう少し丁寧に伝えられたのではないかと反省しております。

助言者からも聴講者からも励ましのお言葉をいただき、大変有難かったです。これからも地域の皆様に、ご支援のご協力をお伝えする活動を続ける励みになりました。施設職員にも頂いたお言葉を、周知いたします。

助言者コメント　　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・事情を抱えて入所されている子ども達に、日頃より向き合いながら丁寧に支援をされていることのご苦労を感じさせられます。支援においては、家庭的であり、かつ専門的なサポートが必要であると思います。生活面だけでなく、精神的な支援も重要になってきます。

人はいくつになっても、自分を理解し、受け入れてくれる、自分に適切にアドバイスをしてくれる人が傍にいることが大事です。それが生きる力にもなっていきます。

・お話を伺う中で、制度はありながらも制度を利用する前に困難さを経験する子どもが少なくないとのお話がありました。失敗が怖い、あせり、不安な気持ちを抱えている子どもが一歩進むことを見守り、また少し背中を押すなどの役割は、職員だけでなく、地域の様々な方たち、皆で協働しながら担っていくことは重要なことかと思います。

子ども達を、皆さんで育てている、地域で育てている、そんな中で、子ども達にとって地域が「いつでも帰ってきていいよ」と実家のような存在になってほしいと思いました。

演劇で知る！地域の頼れる仕組みのアレコレ！？

－演劇を通じて地域のつながりを取り戻す！学生、劇場、福祉の連携プロジェクト－

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　玉川地域社会福祉協議会事務所

佐藤 里紗、宮野 友美袈

（地域　つながり　人材育成）

問題の所在と取り組みの目的

新型コロナウイルス感染症の拡大により、この２年で住民の生活は大きく変わった。感染症を恐れて自宅に閉じこもることによる孤立や、生活困窮に陥る世帯の増大など、地域の福祉課題が深刻化している。また、顔の見える関係を活かした地域の集いの場、見守り活動など住民主体の取り組み等も休止や自粛を余儀なくされ、地域のつながりが切れかかっていた。

このような状況を少しでも改善していきたいと、玉川地域社会福祉協議会事務所と世田谷パブリックシアターが協力して以下の取り組みを行った。

質疑応答

Ｑ：今後は、どのように活動を展開していく予定でしょうか。

Ａ：これまで２回、演劇発表を行いました。参加者の方から、自分の住んでいる地区でも公演してほしいなどという声が多く寄せられています。その声を聞き、学生演劇ボランティアもいろんな場所で演じたいという気持ちが湧いています。

今後も学生演劇ボランティアの力を借りて、地域の取り組みをわかりやすく伝える演劇を通し、多世代の地域交流を行っていきたいと思います。

発表を終えて

佐藤　里紗（社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
玉川地域社会福祉協議会事務所）

発表を終え、改めて今回の取り組みについて振り返ることができました。社会福祉協議会で行っている事業「あんしん事業」や「私のノート」、「ふれあい・いきいきサロン」について、若い世代の方が学び、自身で演じることで理解がより深まること、そしてそれらがただの仕組みではなく、地域を知るきっかけになり、地域課題「自分事」として捉えるようになり、今回の取り組みが血の通ったものになったというご意見をいただき、改めてこの取り組みの価値を感じました。

今後についてのご質問もいただきましたが、継続して実施していく意味があると感じ、持続可能な実施の方法について検討し、来年度以降も今回のような身近な地域での繋がりを絶やさない取り組みを開催していきたいと思います。

助言者コメント

園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

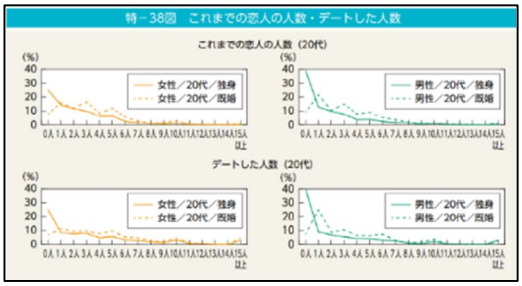
・急激に希薄化する地域のつながりを活性化するための取り組みとして、演劇という表現活動に着目したことに感心しました。しかも、学生演劇ボランティアの積極的関与による異世代間交流の視点や個人のライフストーリーに着目した「私のノート」の取り組みは、地域課題の共有化や個別的ニーズの把握及びその充足に大いに寄与していると考えられます。まさに幅広い視点からの多角的な取り組みであると言え、胸に響く発表であるとともに強く印象に残りました。

・いろいろな学びが沢山ありました。各種事業によって支援の仕組みを作っただけでなく、各自の人生に落とし込んで演劇を観ることができるので誰もが共感できますし、強く引きつけられもします。また、困った方に来てもらうのではなく、こちらから出向いて行くこともとても良いことだと思います。更に、学生の人材育成にも効果がある取り組みで、地域のなかの多様性にふれる機会を積極的に創出することはとても大切な視点であると思います。

女子大学生を対象としたマッチングアプリの実態調査

東京都市大学人間科学部児童学科　３年
平井 美範、横田 菜桜、渡邊 丈琉、クーパー 耀子
（マッチングアプリ）

目的



MMD 研究所の「2021 年マッチングサービス・アプリの利用実態調査」の「マッチングサービス・アプリの利用経験」によると 78.3%の男女がマッチングサービス・アプリを利用したことがあると回答している。このように男女の出会いの場がある一方で、男女共同参画白書における「これまでデートしてきた人数」について「0 人」と答えた 20 代女性の割合が 25%であった。このことからマッチングアプリの全体の利用者数は増加している一方で、20 代女性の利用者数は少ないのではないかと仮説を立てた。

そのため、女子大学生を対象としたマッチングアプリの実態調査を行うことでマッチングアプリが持つメリット、デメリットを明らかにして考察を行った。

質疑応答

Q：マッチングアプリにマイナスな印象がありましたが、発表を聞いて、印象が変わりました。学校や地域によっても捉え方が異なると思いますが、今回の調査の対象はどのような方達だったのでしょうか。

A：東京都市大学児童学科の学生がアンケートの対象でした。同学科には男子学生が少ない環境下にあるため、女子学生を中心に調査を行いました。

発表を終えて　　クーパー　耀子（東京都市大学人間科学部児童学科 3 年）

発表を終えて、私たち女子大学生が恋愛やマッチングアプリに対しての考えをどのように持っているか、その実態を明らかにすることができました。その一方で、質問にあった通り、環境によってマッチングアプリの利用率が変化する可能性があることに、新しく気づきを得ることができました。

今後の研究課題として、女子大学生それぞれの環境調査や、恋愛に対するさらなる意識調査も含めてこの研究を深めていきたいと考えます。

助言者コメント

園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・今回、このようなマッチングアプリの実態調査に注目したのは、本当に今の時代ならではで、社会にあったものだと興味深く感じました。私自身は実はあまりアプリのことを知りませんでしたので、この発表を機に、マッチングアプリについてインターネットで調べると、良いマッチングアプリ、プロが選ぶマッチングアプリなど色々出てきました。本当に多様性があります。今の皆さんの生活自体が多様であり、例えば、効率的に、簡単に、時間をかけずにということが多くなり、それが良いこともありますが、時間と手間がかかることの中にも、また大切さを感じる、大事にしたいこともあるように思います。

・今回、この大会も三年ぶりに直接顔をみながらの開催でした。やはりその中で感じる関わりや繋がりもあるのだと感じます。今回の、このマッチングアプリの研究は、新しい繋がり方でもあります。自分らしく、自分の生活を豊かにしていくために、もっともっといろいろな方向から追求していってほしいと思いました。そして学生達が、今後出会いの場として大学内での交流の機会を設けるなど、いろいろと考えているようですので、それもまた継続していく中でどのようなことを感じるのか教えてほしいと思いました。

世田谷区若者支援と福祉社会フィールドワークの連携からの学生の学び

－中高生の居場所「たからばこ」での経験から－

日本大学文理学部社会福祉学科　２年

新垣 陽大、大槻 麻実、尾崎 悠人、西山 博務、羽川 夏音、本多 幸四郎、宮田 麻由

（若者支援　地域連携　フィールドワーク）

目的

地域でのボランティア活動や社会貢献活動について、フィールドワークを通して理解することを目的として、福祉社会フィールドワークの授業で運営や企画についての知識を深め、実際に企画し活動に参加・運営すること、さらに世田谷区の担当者やユースワーカーとの交流から、大学の学びと実践のつながりを経験し、社会人基礎力をつけることが最終的な目的である。

質疑応答

Ｑ：「たからばこ」に参加している中高生はどのような方たちなのでしょうか。また、学部２年生が取り組んでいる理由と、今後の取り組みはどのようにお考えなのでしょうか。

Ａ：参加している中高生の詳しい情報は聞いていません。あえて聞かないようにしています。また、小学生が参加することもあります。

「たからばこ」での活動は継続性のある取り組みで、２年生の授業で４年前から取り組んでいます。２年生時で取り組みますが、進級してからもスタッフやアルバイトという形で４年生時まで続ける学生もいます。また、イベントごとに参加する学生もいます。日本大学文理学部に在籍する ４ 年間で、世田谷区内の様々な方と交流してほしいと考えています（担当教員より回答）。

発表を終えて　　鴨澤　小織（日本大学文理学部社会福祉学科担当教員）

発表者全員が 2 年生で初めての学会発表をさせていただきました。発表した学生の声として、「とても緊張した」「助言者からいただいたコメントから気が付くことがあった」「新しい経験ができて楽しかった」など、多くを学ぶ機会をいただきました。世田谷地域の方たちとの交流の場ともなり、今後の活動に活かしていきたいと思います。

助言者コメント　　園田　巌　　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

・フィールドワークでは、そこで生活している人の思いや願いに直接触れることになりますから、現実社会の事象を実感として捉えることができます。その意味では居場所支援を通して、リアリティに満ちた中高生の姿を肌で感じることができたのではないでしょうか。社会福祉では、当事者性を念頭に置きながら支援を行うことが何よりも大切です。今回の発表では、学生の皆さんの当事者に寄り添う姿勢が垣間見え、とても有意義な活動であったことが伝わってきました。これからのご活躍を期待しています。

・地域に飛び込むことはとても良い経験です。何気ない会話から感じること、受け取ることがあります。おいしいものを食べながらというのが、とても良いと思います。主体性を尊重しつつ、支援者が何をすべきかということが大切です。みんなで一緒に協同作業をしたということが今後、対人サービスの仕事やチームアプローチを行う上で活きてくるのではないでしょうか。

口頭発表　第２分科会

【3-２１１教室】

進行役・助言者

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル
1	名倉　壮郎 小島　雄一郎 浅村　訓子 瓜生　律子	砧地域ご近所フォーラム 2023 実行委員会	砧地域ご近所フォーラム 2022 よってらっしゃい♪みてらっしゃい♪新しい手も繋がっている手も離さない！ －すべての世代を砧地域でつなげるために－
2	田口　信彦 川﨑　千枝	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 地区サポーターの会 「なんじゃもんじゃの会」 社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 上馬地区事務局	「なんじゃもんじゃの会」手ぶらで参加できるボラ活のススメ －住民による地域福祉ボランティア活動の一つのモデル－
3	真下　美弥子 辻　清哉	社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園	コロナ禍での新設小規模多機能型介護施設の地域交流 －地域を「ことば」とアートでつなぐ－
4	河田　祐子 片岡　沙織 小笠原　英毅	田辺薬局 三軒茶屋店	薬局カフェを通した地域へのアプローチ －ファーストアクセスの場を目指して－
5	吉田　和弘	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	社会福祉施設「まもりやま工房」における 地域交流に関する実践 －自主生産品を使った地域交流について－
6	小林　正明	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 連携推進課	世田谷区社会福祉協議会の食支援の取り組み
7	竪山　順子 上原　明子 小澤　智佳子	一般社団法人 つながりラボ世田谷	MAPS CAFÉ の目指すもの －親なきあとの障害者のみまもり－

進行役・助言者

神田　裕子

（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

長岡　光春

（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

砧地域ご近所フォーラム 2022
よってらっしゃい♪みてらっしゃい♪新しい手も繋がっている手も離さない！
ーすべての世代を砧地域でつなげるためにー

砧地域ご近所フォーラム 2023 実行委員会
名倉 壮郎、小島 雄一郎、浅村 訓子、瓜生 律子
（安心して暮らせる砧地域　顔の見える関係づくり）

はじめに

砧地域ご近所フォーラムは、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指して顔の見える関係づくりを進めることを目的に平成 22 年に始まった。医師・歯科医師・薬剤師などの医療関係者、高齢・障害・子育ての支援者、大学、行政、その他砧地域で活動している多彩な人材で構成された実行委員会が、地域を支える各種団体や住民の協力を得て発信し続ける形は、砧地域ご近所フォーラムならではの特色である。砧地域ご近所フォーラムは新型コロナウイルスを乗り越え、子どもから高齢者、障害者など幅広い分野を通じて繋がりをより強固に、そして新しい繋がりも創造していく。

質疑応答

Q：お話を聞いて、地域が活性化されて顔の見える関係づくりができていると思いました。一方で引きこもりや不登校の子どもとの隔たりが、さらに広がってしまう恐れがあるのではないかと疑問にも感じました。そういう方たちが参加しやすい雰囲気づくりのために、意識していることなどがあれば教えてください。

A：ご近所フォーラムでは、ひきこもり、不登校や若い世代に対しては、例えば、児童福祉の分野の実行委員としての参加やテーマの共有理論として、これまで活動させていただいておりました。ただ、ご指摘のあった引き込もりの方や不登校の方が数多くいる中、地域の中に出ていくために、我々フォーラムとしてどんなことができるのかということに関しては、率直に申し上げて、これまであまりテーマとして取り上げることを考えてきませんでした。今回いただいた意見を基に、来年度以降のフォーラムに生かしていけるようにしていきたいです。

発表を終えて　　名倉　壮郎（砧地域ご近所フォーラム 2023 実行委員会）

助言者の発言を受け、本フォーラムが地域作りの中で重要な役割を担っていることを再認識しました。また砧地域に留まらず、区内全体に本フォーラムのような取り組みを広げていく重要性を感じました。

ご質問いただいた、ひきこもりや不登校の方へのアプローチは、これまで本フォーラムでは行ってきませんでした。課題解決に対し、フォーラムとして個人へのアプローチは難しいかもしれませんが、地域の中での受け皿づくりなど、フォーラムとしてできることは何なのかを考える必要性を感じました。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

・コロナ禍でありながらも、その活動を止めることなく、パワーアップして開催されました。YouTube で公開されている「砧地域ご近所フォーラム 2022」をとても興味深く拝見しました。地域共生社会のより強固な実現に向け、縦割り、支え手、受け手という関係を超えた、地域の多様な主体が「私のこと」として受け止められながら、参画されている様子が伝わります。

・人と人、人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」繋がることで、地域住民一人ひとりの暮らしと、生きがい、地域を共に創っていく社会、地域における人と資源の循環（地域社会の持続的発展の実現）が感じられる、素晴らしい取組みだと思います。

・感染予防と両立させ、YouTube 等で配信されることは、世田谷区だけにとどまらず、同じような課題を抱えている全国の地方自治体等でも役に立つ実践となることでしょう。

・地域住民同士の顔の見える関係性の育成支援、相談支援、参加支援、地域づくりに向けた支援、これら様々な支援を一体的に取組むことで、「相互作用」が生まれ、より多くの支援の輪が広がり、効果が高まることに結びついているのだと思います。

今後も新たな発想や挑戦を試みながら、寄与していただくことを大いに期待しています。

「なんじゃもんじゃの会」 手ぶらで参加できるボラ活のススメ

－住民による地域福祉ボランティア活動の一つのモデル－

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　地区サポーターの会「なんじゃもんじゃの会」田口 信彦
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　上馬地区事務局 川﨑 千枝

（手ぶら参加型　つながり　新しい支え合い）

はじめに

なんじゃもんじゃの会は、世田谷区社会福祉協議会に登録する地区サポーターのうち、上馬地区在住の有志を中心に構成されている。地域福祉の活動は住民主体の「地域団体」が担っているが、運営負担の偏在、幹部の高齢化、後継者確保、活動拠点確保等の課題を抱えている団体も多い。しかし、当会にはそのような課題がなく活動が成り立っていることから、これまでの実践を振り返るなかでその理由を探り、住民による地域福祉ボランティア活動の一つのモデルとして当会の活動形態を紹介したい。

質疑応答

Q：なんじゃもんじゃの会として活動する前のメンバーの関係はどのようなものでしたか。
A：当初、当会の現メンバーは、社協上馬地区事務局からの個々のボランティア募集にそれぞれ応じるだけであり、知り合いではありませんでした。現在のようなつながりを意識するようになったのは、社協上馬地区事務局の声掛けに応じて上馬まちづくりセンターの打合せ室で毎月１回集まり、ボランティア情報などを共有するようになってからだったと思います。

Q：このような手ぶら参加型は他の地区でもありますか。
A：私が知る限りでは存じ上げません。当初は私自身もこのような形で活動が継続するのかは予測ができませんでしたが、なんじゃもんじゃの会の皆さんが実際に証明してくださったので、他の地区でも参考にしていただけたらと思います。

発表を終えて

田口　信彦（社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
地区サポーターの会「なんじゃもんじゃの会」）
川﨑　千枝（社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
上馬地区事務局）

地域住民の主体的な地域福祉の推進は大切なことですが、私は、これからも少子化と高齢化にまっしぐらに進んでいくと予測される日本社会において、現状のままではその実現は困難ではないかと思います。私は定年退職後、社会福祉協議会や災害ボランティア協会の活動に参加し、民生児童委員や町会に関わっていますが、「ボランティア活動には参加したいけど、役員などは勘弁してほしい」という人が多いと感じています。社会福祉協議会上馬地区事務局の川﨑さんから当会のあり方について任意団体的な運営を提案された時、私は経験から「一から十まで直営型」より「手ぶら参加型」の方が参加者の確保と活動継続の可能性が高いのではないかと逆提案しました。その後、試行錯誤を重ね、現在のなんじゃもんじゃの会に至りました。

世田谷区では、地域でまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター及び社会福祉協議会が同居する環境が整いました。浅慮かもしれませんが、地域福祉推進の一方策として「手ぶら参加型」の「なんじゃもんじゃの会」方式をほかの地域でも展開していただければと希望します。

社会福祉協議会の上馬地区担当としてなんじゃもんじゃの会に一から関わらせていただき、会の皆さんが社協のバックアップのおかげと言ってくださり大変光栄に思っております。

きっかけは、落ち葉拾いのボランティアに参加された地区サポーターが「みんなと一緒なら堂々とまちをキレイにできて、心もキレイになれて楽しい」の一言でした。地区サポーターはこのようなつながりを求めていると思い、任意団体での活動を提案しましたが、なんじゃもんじゃの会の皆さんはそれを選択されませんでした。その代わりに、定例会と役割分担という形で活動を続けられ、これが長続きの秘訣であり、新しいモデルだと思います。また、コロナ禍に先んじて始めたLINEがつながりをより実感するものとなり、地域包括ケアの新しい支え合いを実践してくださっています。

なんじゃもんじゃの会の素晴らしいところは、仲間のつながりを地域のつながりへと広げているところです。存続が危ぶまれる団体も多いなか、なんじゃもんじゃの会は歩みを止めず、若い世代も巻き込みながら、これからも進化していかれると私は確信しております。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

多くの地域住民福祉ボランティア活動が直面するであろう、後継者や活動拠点確保等の課題がなく、活動が成り立っておられるとのことで、とても興味深く拝聴しました。コロナ禍でありながら、ボランティア活動を止めないで実践されていることは、大変立派なことだと感心しました。これも、みなさんの結束力の強さの表れだと思います。また、御会活動について理解・賛同して、多くの支援してくださる団体が多いことも成功要因の一つとなっています。今後も地域福祉ボランティア活動のユニークで新たなモデルとして、世田谷区から情報発信を広げてほしいと思います。

コロナ禍での新設小規模多機能型介護施設の地域交流

ー地域を「ことば」とアートでつなぐー

社会福祉法人聖救主福祉会　砧愛の園

真下 美弥子、辻 清哉

（コロナ禍　「ことば」とアート）

目的

本年４月に砧３丁目に開所した砧愛の園は、グループホームと小規模多機能型が併設された介護施設で、建物の一角にテラス部分に特徴のある地域交流スペース（きぬたんテラス）が配置されている。私たちは開所前から「地域あっての施設」を念頭に、スペースの活用を構想してきた。

質疑応答

Ｑ：発表の中でありました「きぬたんこどもまつり」を、9 月 25 日から月 1 回程度開催していらっしゃるということと、「こだぬき広場」も 10 月から毎週 1 回ぐらい開催しているということでしたが、この２つは、お話にありました砧愛の園の地域交流スペースを使って開催しているということでよろしいでしょうか。

Ａ：その通りです。

発表を終えて　　真下　美弥子（社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園）

私どもは本年４月に砧に開所した施設で、せたがや福祉区民学会は今年初めて知り、早速入会して発表させていただきました。初参加でまず驚かされたのは、学会の規模の大きさと参加された皆様の熱意でした。人口の多い区であるとはいえ、一つの区でこれだけの学会を開け、かつどの発表も水準が高く充実していることは、区民の皆様と行政の熱意のたまものと感服いたしました。

発表時には参加者からの質問はいただけませんでしたが、今後の目標となるアドバイスをいただくことができました。厚く感謝申し上げます。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

・小規模多機能型介護施設（特に通所介護）は、コロナ禍で、利用者が減少し、地域で高齢者が孤独・孤立の状況になっていると思われます。

そのような中、地域交流スペースを活用して、「きぬたんこどもまつり」や、「こだぬき広場」などを、対面で、子ども、高齢者など、多世代の方々が集まり、交流されているのは、大変素晴らしいことだと思います。

コロナ禍の中、今後も、感染防止対策等、工夫しながら、継続していってもらいたいと思います。

・ぜひカルタを通して、子どもたちに小さい時からきれいな日本語というものを伝えていっていただけたらと思います。

薬局カフェを通した地域へのアプローチ

－ファーストアクセスの場を目指して－

田辺薬局　三軒茶屋店

河田 祐子、片岡 沙織、小笠原 英毅

（薬局カフェ　地域　つながり）

目的

調剤薬局は、老若男女が訪れる場。実は地域医療のナマの情報の宝庫で、そこに勤務する薬剤師は、医療・介護などの多職種とのつながりを持っています。そんな場だからこそ、地域高齢者の定期的な外出・おしゃべりの機会を設け、同年代の参加者同士のつながりを作ったり、多職種を通じて適切な「つなぐ先」を紹介したりする目的で、2017 年より薬局カフェ「さんこみゅ。」を開催しています。

質疑応答

Q：この活動は週に 1 回ですか。

A：月に 1 回、第 3 土曜日に行っています。薬局もいろいろ懐事情が年々厳しく、運営するスタッフをどう確保するか、企画をどうするか、毎週やるのは結構大変です。でも薬局はどこでも開かれた場所であったらいいなと思っています。月に 4 回土曜日があるので、持ち回りで例えば 3 薬局さんと一緒に、「今週はここの薬局でカフェがある」というのができたらいいなと地域包括支援センターの方と話しているところです。

発表を終えて　　片岡　沙織（田辺薬局 三軒茶屋店）

調剤薬局である田辺薬局三軒茶屋店。薬が出来上がるまでの待ち時間の間に、例えば待合室にリーフレットやチラシ等で栄養に関する物を置き、触れられるようになると良いとアドバイスを頂きました。栄養士や医師、作業療法士、理学療法士ではない、薬局・薬剤師という別の視点から、栄養面のアプローチが今後更に行われていってほしいという声を聞けたのは、大きい事でした。

調剤薬局という立場ではありますが、「さんこみゅ。」にも通ずる部分があると思いました。「さんこみゅ。」に参加されている方は、普段当薬局を利用されていない方がほとんどです。ご参加下さっている方の現病歴・既往歴、ご年齢、生活環境といった、普段薬局の業務を行う上で知り得る部分は、ほぼ不明です。そのため、糖尿病、高血圧症を含む心臓病、腎臓病等、各疾患に特化した形でのアプローチは難しいかもしれません。様々な方にご利用いただける薬局だからこそ、また、常連のいる「さんこみゅ。」参加者の方に、発信していけたらと思います。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

・「薬局カフェ」は、名前も聞かず、ゆるい繋がりの会ですが、そのような居場所を求めて来る方が、一定数いらっしゃるとのことです。毎回のテーマも、介護家族の悩み、ACP、認知症アクション講座等、タイムリーで、私も個人的には行ってみたい場所であり、大変興味深くお話を聴かせていただきました。コロナ禍の中、会場と Zoom のハイブリッド方式で、工夫して開催されており、今後は、是非、回数を増やしていって欲しいと思います。

・「薬局カフェ」ネーミングに、とても惹かれました。薬局には疾患別栄養療法のパンフレットがあり、待ち時間によく見られています。薬のこと等聞きたくても、薬剤師さんは多忙です。このような時、薬局カフェで気軽に教えてもらえるといいですね。同じ医療従事者として、多職種を繋げる新たなモデルと拠点になってくれることを期待します。高齢の方は、ポリファーマシーが多く、薬のプロである薬剤師に相談できる機会があれば、地域に暮らす人達にとっても、心強いです。来年もこの続きをご発表ください。

社会福祉施設「まもりやま工房」における地域交流に関する実践

－自主生産品を使った地域交流について－

社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房

吉田 和弘

（障害福祉　自主生産品　地域交流）

はじめに

「まもりやま工房」は、世田谷区の北沢エリアにあり、新代田地区の統廃合で閉校した守山小学校の跡地の 3F にある就労継続支援Ｂ型事業所である。現在、小学校の跡地は 1F が守山保育園、2F が守山地区会館であり、3 つの施設が入っている複合施設となっている。

2016 年の社会福祉法の改正により、社会福祉法人には「地域における公益的な取組」が義務化された。これからは社会福祉施設を起点として、施設が地域社会にどのような関わりができるかが重要である。今回の発表では「まもりやま工房」で行われている地域交流の実践を紹介する。

質疑応答

Ｑ：用途変換で小学校から新しい機能を持った建物に変わったと話にありました。特に１階のカフェ部分が素晴らしいつくりですが、当初あまり利用できていなかったようですが、どのように利用を拡大していかれたのでしょうか。

Ａ：あまり頻繁に使うことができなくて、使い道について施設長たちと一緒に話をしながら拡大してきました。

発表を終えて　　吉田　和弘（社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房）

今年度のまもりやま工房での活動をまとめて、区民の皆様に発表できる機会を頂きましてありがとうございました。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

・私ごとですが、「まもりやま工房」が入っている守山複合施設の整備（平成 31 年 4 月開設）に関わるとともに、地域の方々と施設の職員による自主的な運営のための準備をしてきましたが、開設後の状況は知りませんでしたので、今日、「まもりやま工房」の地域交流のお話を聴くことができ、非常に素晴らしい活動になってきていることに感動しました。

・自主製品のクッキーやコーヒーを活かしたカフェの開催、地元のお茶屋さんとの商品開発、ボランティアや大学生の受け入れ、大学との共同授業など、多世代の方たちとの多様な地域交流を行っており、障害理解や居場所づくり、福祉人材の育成などにつながる素晴らしい活動だと思います。
今後も、地域共生社会の実現に向けて、地域交流の輪を広げていってください。

・自家焙煎珈琲の機械があるのを見ましたが、すごい機械ですよね。あれが今も使われ、そのコーヒーとクッキーを介して、地域の人たちとのつながりをぜひこれからも続けて、拡大していっていただければと思います。

世田谷区社会福祉協議会の食支援の取り組み

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　連携推進課
小林 正明

（生活支援　資源開発　地域づくり）

はじめに

世田谷区社会福祉協議会では、フードドライブ、フードバンク、フードパントリー、子ども食堂支援など、『食』に関する様々な事業や活動を行っている。

長引くコロナ禍により、生活困窮等の様々な地域生活課題が顕在化する中、社会福祉協議会の強みを活かし、地域の多様な資源と連携した包括的な食支援体制づくりに取り組んでいる。

令和４年度からは食支援担当を配置し、食を通じた新しいつながり、地域のチカラを開拓しながら、生活支援の体制整備を進めている。

食支援担当

質疑応答

Q：地域には目の届かない一人暮らしや引きこもりぎみの若者がいます。その方たちに食料などを届けるととても喜ばれると思います。必要な方にどう気づき、発見していくのか、また個別支援や地域づくりで取り組んでいることがあれば教えてください。

A：今後、必要となるのが地域地区単位での資源開発とネットワークだと思います。社協の組織体制を生かし地区担当と協力し、支援団体と情報交換をしながら、個別に情報をキャッチしたいと思います。孤立孤独問題の解決には、食支援は大いに可能性があり、困った時に地域の中にそのような場があるという情報を継続して発信し、社協だけでなく、地域の団体や住民とも協力して、キャッチの機能を高めていきたいと思います。

Q：フードドライブは一般の家庭から食品が提供されます。保管やマンパワーなどが大変なことを別の市町村から聞きますが、世田谷区の社協の場合はいかがでしょうか。

A：食品の確保と保管場所の確保は同時並行で進めています。食品の仕分けや賞味期限の確認、運搬等では地区サポーターの協力や区内の社会福祉法人等と連携を図りながら、食支援の体制を充実させています。

発表を終えて　　小林　正明（社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会 連携推進課）

食の支援は、生活困窮支援のほか、食を通じたつながりによる孤立孤独を解消する取り組みとしても期待されます。区全域、地域、地区の３層構造による食のネットワークを構築しながら、それぞれの必要な資源やサービスの充実を図っていきます。そのためにも「食のつながり」をテーマとして、多くの住民や多様な主体に参画してもらいながら、継続して支えあいによる地域づくりに取り組みます。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

世田谷区内の食支援活動を推進する「せ☆たべる」も拝見しました。誰もが分かりやすく、利用しやすいよう情報掲載されています。

食料品アクセス問題は、食料品の購入や飲食に当たり、何らかの理由で苦労や不便がある方々が存在されている等の問題で、昨今、社会的にも大きな問題となっています。この取り組みには、食品流通や商業施設、交通、介護・福祉など、様々な分野が関係し、行政・民間企業、NPO・地域住民などの多様な関係者が連携し、かつ継続的な取り組みが重要ですが、御会は、地域特性を考慮しながら、食を中心とした総合生活支援の視点をもって、地域全体ですすめておられます。限られたマンパワーで業務をこなされている様子を伺い、ご苦労も多いことだと思いました。御会活動に心から敬意を表します。

今後も、長期的視野に立った対策を検討いただけることを願います。また、食教育の観点からも重要な実践活動です。連携の輪を広げ、食品ロスも減少し、地域の豊かな食が支えられることを大いに期待しています。

MAPS CAFÉ の目指すもの

― 親なきあとの障害者のみまもり ―

一般社団法人　つながりラボ世田谷

竪山 順子、上原 明子、小澤 智佳子

（障害のある人　みまもり　地域）

目的

「つながりラボ世田谷」を設立して６年目となり、弁護士や相談員と共に進めてきた「親なきあとを深める」活動が徐々に軌道に乗ってきている。障害のある人が親なきあとも住み慣れた地域で理解者やサポーターにみまもられながら、楽しく安心な生活を続けていける仕組みづくりを模索したいと考え、MAPS CAFÉ を企画した。みまもり安心パートナーズ（MAPS）の最初の集まりである。

質疑応答

Ｑ：MAPS CAFÉ は年３回開催となっており、７月２日、11 月５日と２回開催し、今年度もう１回開催するとのことですが、どのような内容となりますか。

Ａ：今後も第８波でこれからコロナの感染者が増えていく可能性が高いと思いますが、気をつけながら対面で実際、顔を合わせてボッチャやインタビューでいろいろなことを聞き、みんなで話し合いを行う予定です。

発表を終えて　　竪山　順子（一般社団法人 つながりラボ世田谷）

対面方式でのせたがや福祉区民学会の参加は初めてでしたので大変緊張致しました。時間が余ってしまったのでもう少し説明を加えても良かったかと感じています。

それでも知的障害のある方々と地域の様々な人とつながる大切さを、少しはお伝えできたのではないかと思います。昨年の発表をきっかけに“うめとぴあ”のカフェスペースの貸出しをしていただけることになり、MAPS CAFÉ は年 3 回開催予定ですので、今年度中にもう一回開催致します。

うめとぴあのカフェスペースは、参加者にとって集いやすい場所であり、地域の方にも入りやすい場所だと感じています。

回数を重ねて継続することが重要だと考えているので、場所の提供は大変ありがたく思います。

活動の中で気づきがあれば、成年後見センターやあんしん事業などに相談させていただきます。

また、分科会終了後に、ぷらっとホーム世田谷にも障害者のひとり暮らしで困っている方がいたらつないでほしいとお声掛けいただきました。

多方面の方とつなぐ機会をいただき、感謝しております。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

・「MAPS CAFÉ」の取り組みとして、コロナ禍の中、7 月と 11 月に、ボッチャのほか、インタビュー形式も取り入れながら、対面で、本人、家族、弁護士や福祉関係者等の集まりを開催されており、大変すばらしい取り組みで、参加者の交流が深まったと思います。

・今後も、感染防止対策に留意されながら、3 回目を対面で開催して欲しいと思います。

親なき後の住み慣れた地域で、楽しく元気に暮らしていくというのは非常に重要なことであり、地域共生社会の実現に向けて引き続き「MAPS CAFÉ」を中心として進めていただければと思います。

また、「MAPS CAFÉ」の活動で、必要に応じて、社協の成年後見センターにつないでいらっしゃるとのことですので、社協としても、これからも連携させていただきたいと思います。

口頭発表　第３分科会

【3-２０５教室】

進行役・助言者

川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル
1	小林　ゆかり 後藤　愛	ＮＰＯ法人 せたがや子育てネット	地域で暮らす/育つ －コロナ禍での子育て支援の現場と地域のつながり－
2	市村　和行 秋森　かつ枝 伊藤　潤一 浅倉　信次	ＮＰＯ法人せたがや移動ケア 世田谷区福祉移動支援センター おでかけサポーターズ	玉川おでかけバスの市民によるテスト運行の報告 －おでかけバスでコミュニティつくりを目指します－
3	鈴木　祐輔 磯﨑　寿之	三茶にサンタがやってくる実行委員会	三茶にサンタ電車を走らせて子どもたちにプレゼントを －経済困窮家庭支援を地域共創をもって－
4	西沢　晴斗 武田　郁子	慶応義塾大学総合政策学部 4 年 （「たまごの家」） 世田谷区介護予防・日常生活支援総合事業住民主体型デイサービス 「たまごの家」	地域における介護予防のための「通いの場」を運営するボランティアスタッフの参加と継続に至る要因とプロセスの探索
5	木原　正昭 泉谷　一美 服部　里絵 鬼塚　正徳	ＮＰＯ法人せたがや移動ケア 世田谷区福祉移動支援センター そとでる	コロナ感染の影響下における「そとでる」の福祉輸送の活動報告 －コロナ禍における「そとでる」と事業者の奮闘について－
6	長原　來未 平敷　柚喜 村田　美優 谷戸　そら	東京都市大学 人間科学部児童学科 3 年 社会福祉・精神保健研究室	メンズメイクに対する意識調査
7	鈴木　真衣 竹澤　奏 神田　裕子	東京医療保健大学 医療保健学部医療栄養学科	せたがや福祉区民学会活動を通して、学んだこと、これから自分たちができること －福祉の仕事に就いている方々の話を伺って－

進行役・助言者

川﨑　愛
（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

徳永　宣行
（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

地域で暮らす/育つ

―コロナ禍での子育て支援の現場と地域のつながり―

ＮＰＯ法人　せたがや子育てネット
小林 ゆかり、後藤 愛

（子育て　居場所　連携）

目的

NPO 法人せたがや子育てネットの運営する子育て支援拠点のひとつ：瀬田 2 丁目の「おでかけひろば まーぶる」は 2017 年春に開室して以来、主に乳幼児家庭の親子の居場所として月～金：10:00-15:00 で運営している。コロナ禍で「おでかけひろば」の利用者も激減したが、地道に地域に情報発信し続けていることで、今まで繋がってきた人以外にも繋がるきっかけとなった。

フードパントリー・こども食堂などの事業を通じて、地域の人が関わるきっかけができ、地域の中での「おでかけひろば　まーぶる」の存在をさらに知ってもらえるようになった。地域で乳幼児親子を見守る人を増やすことを目的とした。

質疑応答

Q：どの地域の利用者が多いですか。
A：二子玉川、用賀、上用賀、上野毛、駒沢、鎌田からも自転車で来てくれています。

Q：妊婦さんへのアプローチの方法はありますか。
A：法人が委託を受けている「産前、産後のセルフケア講座」や地域マップ、ホームページを活用し、プレママやプレパパが参加しやすい日に設定しています。

Q：普通のお家で実施されていますが、どうやって場所を決められたのでしょうか。
A：子育て支援で何かできないかとのお声がけや家主さんの事業へのご理解、ご紹介で、子育て支援に利用して欲しいという大家さんの想いをありがたく頂き、お借りしています。

Q：コロナ禍の中、オンラインでおでかけひろばの開催はされましたか。
A：オンラインでも開催しましたが、赤ちゃんや子どものいる暮らしではオンラインより対面で話す繋がりを望む声が多かったです。

発表を終えて　　小林　ゆかり（ＮＰＯ法人 せたがや子育てネット）

発表資料を作成するため、実施してきた内容を見返したことで、意義や実施事業などの全体を振り返ることができ、地域との関わりを改めて実感できました。

コロナ禍で当たり前の生活から一転、どのようにして乳幼児親子が孤立しないようにするかという点に苦慮してきましたが、これからも地域での関わりを継続し、「おでかけひろば まーぶる」の存在を知ってもらい、地域で乳幼児親子を見守る人を増やしていきたいと思います。

発表の機会をいただきありがとうございました。

助言者コメント　　川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

子育て中の親子に対して、対面や支援者のゆるやかなネットワーク、オンラインを使い分けながら地域の居場所づくりをされていらっしゃいました。

特にコロナ禍で夫が在宅リモートで妻と子どものニーズに対応された取り組みに感銘を受けました。

玉川おでかけバスの市民によるテスト運行の報告

－おでかけバスでコミュニティつくりを目指します－

ＮＰＯ法人せたがや移動ケア　世田谷区福祉移動支援センター　おでかけサポーターズ
市村 和行、秋森 かつ枝、伊藤 潤一、浅倉 信次
（くらしの足を守り育てる市民活動）

目的

おでかけサポーターズは、世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）を事務所として、日頃、外出機会の少ない方々のおでかけの支援を考え活動しているシニアのボランティアグループです。

世田谷区内にも買い物などのおでかけに困難を抱える地域が広がっていることから、市民の手でおでかけバス（買い物バス）を走らせることを目指し、社会福祉協議会の協力を頂いて、活動を始めました。この活動の主目的は、おでかけによる健康寿命の延伸や地域コミュニティを活性化し、災害時の地域対応力などを強化することを目指すものです。コロナ感染が発生し思うように進められませんでしたが、いくつかの勉強会と検討会を経て、玉川おでかけバスのテスト運行を実施しました。まだ本格的な運行にはほど遠く、課題は山済みですが、ここまでの歩みを報告します。

質疑応答

Ｑ：登録された方は、どのような目的で利用されるのでしょうか。
Ａ：現在登録されている方は４名です。買い物で利用される方が多いですが他に、二子玉川で散策された方もいました。

Ｑ：停留所はどの様に決めましたか。
Ａ：スーパーやクリーニング店などのお店の前が、利用者にわかりやすいので決めました。

Ｑ：バスの運行について、今後どのくらいのニーズを見込んでいるのでしょうか。また、車いすの方の利用はどの様にされているのでしょうか。
Ａ：口コミで拡げている状況ですが、地域の状況もあるので 100 人程度考えています。バスは福祉車両になっています。車いすの方も利用可能です。
現在はリスク回避のため対応していませんが、将来的には考えています。

Ｑ：実際の運用までに苦労されたことはどの様なことでしょうか。
Ａ：地域住民の方に理解していただき、参加していただけるかという点です。

発表を終えて

市村　和行（ＮＰＯ法人せたがや移動ケア
世田谷区福祉移動支援センター おでかけサポーターズ）

おでかけサポーターズが市民活動として取り組んでいる「玉川おでかけバス」の運行も、ボランティアをやれる者がやれる時に行っている大切な活動だと思います。本日は、発表の機会を頂き、ありがとうございました。

助言者コメント

川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

住民による、無理をしないボランティア活動という点にとても感銘を受けました。

新しい事業を立ち上げることはとても大変だと思いますが、本当の意味で地域力の発展が見える発表でした。今後も期待します。

三茶にサンタ電車を走らせて子どもたちにプレゼントを

－経済困窮家庭支援を地域共創をもって－

三茶にサンタがやってくる実行委員会

鈴木 祐輔、磯﨑 寿之

（地域共創　社会協業　支援共助）

目的

コロナ禍により経済困窮がより浮き彫りになった。フードパントリーなどで、家庭の状況を知る中でクリスマスのことが気になった。サンタクロースが子どもたちのところへやってきてプレゼントをくれるのか。子どもにとって親の経済事情は関係のない楽しみなイベント。だが実際には親の経済事情は大きく影響し、プレゼントを渡せない親、プレゼントが届かない子どもの精神的なつらさをなんとかできないかと、世田谷の子どもたちのサンタクロースになろうと立ち上がった。

その趣旨のもと地域のあらゆる人たちが集い、サンタ電車を走らせるプロジェクトです。

質疑応答

Q：お礼のメッセージカード等で、目頭が熱くなる想いでしたとのお話ですが、実行委員会からも送ったりしているのでしょうか。
A：実行委員からメッセージは送っておらず、メッセージを受け取っている状態です。

Q：サンタ電車が走ることは、お近くの方はご存知なのでしょうか。
A：ホームページで告知しているのですが、近隣の方へチラシを配るなどはしていないので、びっくりされるということがあります。

Q：先天的な障害のある方に電車に乗っていただくことについて、開催までの準備が数多く必要だと思いますが、それはどのようにされたのでしょうか。
A：医療職も関わっているので、コロナ禍でも安全に来場して電車に乗れるように、皆で話し合いました。当然、親御さんもいて、子どもの状況は把握できていますから、その中で子どもたちが喜ぶ方法を準備しました。

Q：先天的な障害のある方は、特定の病院等にいらっしゃるのでしょうか。
A：ほぼ在宅で生活されている方です。

Q：世田谷区外の方でも参加できるのでしょうか。
A：基本的にはそうです。状況が許す限り参加できます。

発表を終えて　　磯﨑　寿之（三茶にサンタがやってくる実行委員会）

「地域連携の一つの在り方を示すため、任意の市民活動が多くの寄付を得て、多くの人たちに気持ちを伝えあう」その実践を示せればとの思いや、どう伝わったのかは不安もありますが、そもそものキッカケはコロナ禍です。その中でできる事は何かの一つを示せたのではないでしょうか。

大切なのは、市民連携で協働され、地域包括的支援の一つであることの大切さでした。それを楽しく運営する実行委員会として成しえている。そこをお伝え出来ればと、発表しました。すぐにその場で助言者から寄付をいただくという嬉しい結果もありました。

勿論、開催はクリスマスイブまで続き、支援の継続は途切れません。サンタがサンタ電車を走らせるという誰もが楽しくなるイベントを通して、地域社会福祉としての大きなアドバンテージを担えたらと、あらゆる媒体を通して発信しています。

その大きな節目となるせたがや福祉区民学会で好評を得られたことは、関わる全ての者が嬉しくなる結果であったと思います。これをさらなる地域社会福祉の発展にと思うばかりです。拙い発表を支えて下さる方たちに、多くのご支援をいただく方たちに、感謝をもって発表させて頂きました。

助言者コメント　　川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

とても心温まる発表でした。

楽しいイベント（光）の裏にある影に目を向けて、誰にでも明るい光を届けようとする活動に感動しました。ぜひ毎年、続けていくことができるよう協力者、賛同者が増えるといいと思います。

私は賛同いたします！！

地域における介護予防のための「通いの場」を運営する ボランティアスタッフの参加と継続に至る要因とプロセスの探索

慶応義塾大学総合政策学部　４年（「たまごの家」）西沢 晴斗
世田谷区介護予防・日常生活支援総合事業住民主体型デイサービス「たまごの家」武田 郁子
（介護予防　住民主体型福祉　通いの場）

目的

我が国の介護保険を取り巻く環境は、2005 年の介護保険法改正によって大きく変わり、介護予防の役割が今までより重視されるようになった。そしてその後、2015 年に実施された介護予防・日常生活支援総合事業では、この介護予防の担い手が多様なものになり、とりわけ期待されたのが、地域住民が主体となって介護予防のための「通いの場」を運営する通所型の住民主体型サービスであった。しかしながら、住民主体型のサービスは、担い手の不足や住民の関心の薄さなどから、必ずしも潤沢にサービス提供されていないのが現状である。そこで今回は、「通いの場」が継続して運営されていくための考察を行うため、住民主体型の地域の「通いの場」のスタッフに対してインタビュー調査をし、ボランティアスタッフの参加や継続における要因やプロセスを探索した。

質疑応答

Q：イベントを行うと、100 人程度のシニアの方が集まりますが、その方々が地域活動側に入ってくることは、難しい状況です。また、昼間に動けるのはシニアの方々ですが、シニアの方に参加していただける仕組みづくりを進めたいと思います。何かヒントがあれば教えてください。

A：すごく難しい問題だと思いますが、イメージを取り払い、どういう活動が展開されているかを知ってもらうことで、高齢者の集まりというイメージではなく、強い目的があって開催されている活動であることをアピールできればと思いますので、情報発信は大切だと思います。

Q：ボランティアが参加不継続になる、活動から離れる要因で多いのはどのようなことでしょうか。

A：やはり親の介護など自分の家族のことが理由であることが、多いと思います。

発表を終えて　　西沢　晴斗（慶応義塾大学総合政策学部 4 年）

今回は貴重な機会を下さり、ありがとうございました。

今まで、こういった自分の研究を発表する場は経験したことがなく、まず自分の研究を要旨にまとめてスライドにまとめるという作業自体が内省的な働きを持ち、自分の研究を自分が理解するという点で大いに役立ちました。

また、会場での質疑応答や助言者の方の意見も、自分にはなかった知識や知見を知ることができ、緊張はしましたが、よい経験になったと感じています。

なお、始めに行われた基調講演も地域のネットワークについてのものであり、参考になると共に、自分たちが居住している地域においても、実践が必要だと感じました。地域のネットワークはすべての基盤があるからこそ、保健、医療、福祉、防災、教育、環境すべてにつながってくると感じ、今回の分科会ではそのエキスが少しずつにじみ出ていた気がしました。

助言者コメント　　川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

「たまごの家」がスタッフにとって「仲間の存在」や「時間と気持ち」が参加促進となり、継続されていることが分かりました。世代間交流など新たな展開も興味深いものでした。

発表者は 1 年間参与観察を実施して、参加者との関係を形成してきたことが伺えた発表でした。

コロナ感染の影響下における「そとでる」の福祉輸送の活動報告

－コロナ禍における「そとでる」と事業者の奮闘について－

ＮＰＯ法人せたがや移動ケア　世田谷区福祉移動支援センター　そとでる
木原 正昭、泉谷 一美、服部 里絵、鬼塚 正徳
（くらしの足を守り育てる市民活動）

目的

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）は現在、登録利用者が 9,000 人を超え、300 件/月を超す福祉車両の配車手配をおこなっている。2020 年からのコロナ感染拡大により、福祉輸送の現場も大きく影響を受け、感染対策や発熱者の送迎対応など、従来とは異なる多くの経験をすることとなった。その様子を報告する。

質疑応答

Ｑ：NPO 法人を立ち上げる際に、スタッフはどのように集めたのでしょうか。

Ａ：もともと世田谷区には、ボランティア組織として、移動サービスがあり、私は、40 年ぐらいボランティアで運転をしており、そういった仲間がいました。2002 年の規制緩和で介護タクシーができ始め、その方たちが仲間となり、この様なセンターを立ち上げようという機運がありました。介護タクシーや福祉運送にしても、ネットワークを作らないと商売や活動もできませんので、必然的に集まる前提があったと思います。

Ｑ：サブタイトルにある「奮闘」ですが、一番奮闘されたことを教えてください。

Ａ：それぞれの事業者で違うと思いますが、初めは利用者の方を乗せることに怖がっていました。いつも利用している方だといいのですが「そとでる」は、月 80 名の新規登録があり、まだ状態を把握しきれていない方々を受け入れることが怖かったのです。

この怖いコロナ感染の状況での配車をなんとかやれたのは、日頃から「そとでる」と運行事業者が、お互いに「頼むよ」「頼まれるよ」という関係になっていたからだと思います。

発表を終えて

鬼塚　正徳（ＮＰＯ法人せたがや移動ケア
世田谷区福祉移動支援センター そとでる）

今回「そとでる」と世田谷で福祉輸送に携わるメンバーが、コロナ感染拡大の中で、様々な事情を抱える利用者から送迎の依頼を受け、対応に奮戦した様子を報告させていただきました。この報告の場をいただいたことに感謝します。ありがとうございました。

助言者コメント

川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

福祉タクシーの事業者連携のハブとして、コロナ禍においてもとても重要な役割を果たされたと思います。これからも地域住民の大切な移動手段として活躍してもらいたいと思います。

メンズメイクに対する意識調査

東京都市大学人間科学部児童学科　３年　社会福祉・精神保健研究室
長原 來未、平敷 柚喜、村田 美優、谷戸 そら

（多様性　メンズメイク）

目的

近年、化粧品コーナーでメンズコスメが並んでいることや、化粧品のプロモーションに男性芸能人が起用されていること、メイクをして登校している男子学生がいることから、私たち学生にとっては当たり前になりつつあるメンズメイクだが、私たちの親世代とは捉え方が異なるのではないかという仮説を立てた。

私たちは、メンズメイクに対する意識調査を世代別に行い、どうすればメンズメイクへの理解度を向上させることができるのかについて考察を行った。

質疑応答

Q：メイクのデモをされましたが、実際にメイクをしてみていかがですか？

A：青髭の悩みや、顔の血色を変えられたらというところがありましたので、この様なところをメイクで変えられる情報を女性から伝えられるということが多いと思いますが、男性の方も自分で調べてみると、すごく面白いなと感じると思います。私も実際、そう感じました。

感想

大変良い視点だと思いました。この研究を高齢者の方に絞っても面白いと思いました。
実際に化粧を中心にしたデイサービスがあります。高齢者になって、福祉の世界では、女性は身なりを整えて生き生きとした生活ができることに着目されていたのですが、男性が身なりを整えることで生き生きとした高齢生活を迎えられるということは、あまり視点にはなかったことです。
そういうことでもこの研究を広げて、脈々と受け継いでいっていただけたら、高齢者の世界でも役に立つ情報の一つになると思いました。

発表を終えて

平敷　柚喜（東京都市大学人間科学部児童学科 3 年
社会福祉・精神保健研究室）

今回、メンズメイクに対する意識調査を行う中で、メイク自体に偏見を持つ人は少ないが身近な人を想定すると否定的になる傾向が見られました。質疑応答の際に、発表でメイクをした自分自身を見てメイクに興味を持ちますかと聞かれました。この時メイクをしてみたいと答えましたが、家族に知られると考えると気恥ずかしさを覚えました。発表によって新しい考えに気付き、実践に繋げたいと思いました。

地域差について質問がありました。世田谷のある福祉施設では 1 名の男性利用者がコスメアイテムを購入していると伺いました。どこで需要が高まっているのかを知ることで、メンズメイクがより身近なものとなりそうだと感じました。

おじさんメイクが広まるのは先になりそうですが、施設利用者へのアンケートを行うことで更に需要を探っていきたいと思います。

助言者コメント

川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

メイク後に鏡を見て自分が思い描いていた通り、あるいは思い描いていた以上だと感じると、さらに嬉しくなり美しくなると思います。そういう効果があるため、フロアからのご発言があったとおり、高齢者のメイクやメイクセラピーがあるわけです。最後に SDGs に関連した話や自分に対して自信が持てることなどご説明がありましたが、本当に様々な力があるのだと思います。

メイクには、流行りがありますので、そういう時代の最先端にいる方々が発表してくださることは、非常に良いと思いました。その意味でも、今回非常に面白く伺いましたし、フロアからの質問も研究の広がりを促すものでした。

せたがや福祉区民学会活動を通して、学んだこと、これから自分たちができること

－福祉の仕事に就いている方々の話を伺って－

東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科

鈴木 真衣、竹澤 奏、神田 裕子

（地域と共働した貢献　自分たちができること　生きた学び）

目的

昨年行われた、「せたがや福祉区民学会」に参加させていただいた際に学んだこと、また、これまで私たち東京医療保健大学手話ボランティアサークルのメンバーが取り組んできたことを紹介するとともに、地域（世田谷区）にある大学の学生として、医療栄養学を学ぶ学生の立場から、学んだことを活かしながら、今後も継続的に世田谷区の方々と協働・連携させていただけることがないかなどを考え発表します。

質疑応答

Q：障害のある方と触れ合う機会がないことに驚きました。今の学生はそのような機会に恵まれていると思っていましたが、なぜ少ないのでしょうか。世田谷区では、けやき学級などに関わる機会が多くあります。長く関わりたいのか、イベントとして１回参加したいのかで学生に紹介する仕方が変わりますので、どのような体験をしたいのかを教えていただければと思いました。

A：高齢の方や障害のある方と関わる機会は、以前よりは確かに多いと思います。しかし、大学にもよりますが、そのような機会は少ないように感じます。期間が限られていたり、世代が限られていたりということはあると思います。今の学生たちは、戸惑うことがあると、立ち止まってしまうというところがあります。だからそこを次にうまく繋がるようにサポートし、障害のある方たちと関わることがどういうことなのか、仕事に就いた際に役立つような体験を学生にさせたいと個人的には思っています。

学校からは個人情報の取り扱いに慎重さを求められているので、学生との連絡もなかなか難しい面があります。ただ、このままでは進まないので、何か方法を考えたいと思います。

発表を終えて

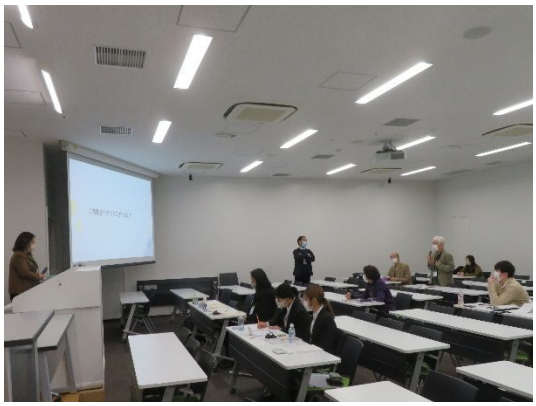
鈴木　真衣、竹澤　奏、神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部
医療栄養学科）

会場に参加くださっていた施設代表の方、助言者のみなさまから、温かいコメントとアドバイスをいただき、ありがとうございました。せたがや福祉区民学会を通して、様々な方々との関わりと繋がりが、新たな一歩に結びつく大事なことだと改めて実感しています。今後も学生だからこそできる社会貢献の実践に向け、学び続けます。引き続き、情報提供やアドバイスをくださるよう、ご指導の程よろしくお願いいたします。

助言者コメント

川﨑　愛　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

最後のご説明で、他大学や普段は関わらない方々との出会いがあり、多角的な視点を得られたということですが、せたがや福祉区民学会の会員で栄養管理の勉強されている方は、少ないことを考えると貴重です。この分科会の第一発表は子育てネットワークで、子ども食堂との関連がありますので、福祉区民学会に栄養管理面から参加いただくことは、広がりを持つことができ大変貴重だと思います。



口頭発表　第４分科会

【3-２０２教室】

進行役・助言者

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）

荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

	発表者	所属	タイトル
1	寺尾　洋介 磯野　かおり 落合　美夏 保坂　和美 酒井　恵 藤原　ふさ子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	特養ホームにおけるチームアプローチで取り組む褥瘡ケア －ラップ療法を用いたケアの実践－
2	西田　正 直井　史之	社会福祉法人東京有隣会 特別養護老人ホーム 有隣ホーム	終末期ケアへの私たちの想い －わがまま言ってもいいんです－
3	三浦　綾華	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム 久我山園	介護施設における新型コロナウイルス感染症まん延防止対策を実践して
4	細井　佑哉	東京リハビリテーションセンター世田谷 障害者支援施設梅ヶ丘	移行先で適切な支援（ケア）を受けるために －動画を用いた情報共有－
5	康　徳龍 渡辺　重人	東京リハビリテーションセンター世田谷 介護老人保健施設梅ヶ丘	介護老人保健施設利用者の自主リハビリの有効性
6	瓜生　律子 上之園　佳子	世田谷区福祉人材育成･研修センター 日本大学文理学部社会福祉学科 特任教授	安心して在宅生活を送るために －世田谷区福祉事業所調査の結果を踏まえより良いケアの実現－
7	栃倉　勝 石原　しのぶ 髙橋　福太郎	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所	認知症があってもこの街で暮らす　行方不明者を救え！

進行役・助言者

大熊　由紀子
（国際医療福祉大学大学院教授）

荒井　浩道
（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

特養ホームにおけるチームアプローチで取り組む褥瘡ケア

－ラップ療法を用いたケアの実践－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム　上北沢ホーム

寺尾 洋介、磯野 かおり、落合 美夏、保坂 和美、酒井 恵、藤原 ふさ子

（褥瘡ケア　ラップ療法　チームアプローチ）

目的

褥瘡ケアは近年、湿潤療法が主流となり、高齢者介護施設においても褥瘡予防から改善まで、チームケアによる、ケアの質保証が求められている。上北沢ホームでもラップ療法を用いた湿潤療法による褥瘡ケアに取り組んでいる。今回、70 歳代女性のご利用者への褥瘡ケアに、介護職・看護師・理学療法士・管理栄養士・医師によるチームアプローチで取り組んだ結果、約半年で褥瘡改善に至った。その経過を振り返り、今後のより良いケアを実践していくために本報告を行う。

質疑応答

Q：ラップ療法とは何ですか。具体的な実施方法を教えてください。

A：湿潤療法の一つで、穴あきポリエチレン袋に吸水パッドを入れたものを患部に当て、適度に湿潤させ、創部を治療するものです。

Q：褥瘡の改善はわかりましたが、施設での褥瘡発生率を教えてください。

A：発生率は手元にデータがない為、不明ですが、現状では褥瘡で治療が必要な方はいません。ただ、看取り介護の方で、栄養状態の低下にともなって、褥瘡が出来てしまうことがありますし、病院から入所される方にあるように思います。

Q：利用者様が寝ている写真が多いが、離床時間はどれくらいですか。

A：１日２回離床し、１回２時間の離床時間となっています。

発表を終えて

寺尾　洋介（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム 上北沢ホーム）

発表を終えて、チームアプローチで褥瘡ケアを実践していくことの必要性を改めて感じました。また、ラップ療法を使用せずに、予防的な取り組みが重要である、といった助言も頂き、さらに、施設での褥瘡予防の取り組みも充実させていく必要性を強く感じました。

今後も上北沢ホームのスタンダードケアに沿って、予防ケアも引き続き力を入れていきたいと思います。

助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・褥瘡ケアにおいてラップ療法を継続的に行っていくためには、介護職、看護師、理学療法士、管理栄養士、医師等による多職種による連携・協働（チームアプローチ）を行っていく重要性が具体的に示されました。連携・協働は、施設内に留まらず、他機関、さらには地域のボランティアとも図っていく必要があるということがわかりやすく説明されました。

・32 年前に『「寝たきり老人」のいる国いない国』という本を書きました。「寝たきり老人」という言葉のない国には褥瘡というのは発生しないのです。寝かせきり状態をいかに少なくするかということが大事だと思います。今年、この本の 32 刷りがでたということは、日本がデンマークの 30 年前にまだ追いついていない残念な状況を示しています。

このラップ療法を使わないで済むように、寝かせきりをつくっている病院に発信するということも、皆さんのとても大事な使命だと思います。

終末期ケアへの私たちの想い

ーわがまま言ってもいいんですー

社会福祉法人東京有隣会　特別養護老人ホーム　有隣ホーム

西田 正、直井 史之

（コロナ禍での情報発信　その人らしく）

目的

新型コロナウイルス感染対策の為、医療機関や福祉施設では様々な感染予防対策が取られてきた。それまでは自由に出来ていた面会の制限も対策の一つであるが、その結果、ご家族様との関りが少なくなってしまった。有隣ホームでは生活のご様子や健康状態などの情報提供を施設側から積極的に行う必要があると考え、LINE を利用したテレビ面会・動画や写真の送信・体調不良時の特別面会等、いろいろな方法でご家族様への情報提供を続けて来ました。終末期ケアを開始する際も、普段から情報共有が出来ており、そこに至る経緯も十分にご理解を頂けているのでスムーズに移行することできるようになった。今回はその取り組みを実例に基づいて報告します。

質疑応答

Q：ご家族のご意向はとても多く聞き取ってくださっていますが、第一にご本人のご希望を教えてください。また、ご本人の希望や意向など、ご本人との話し合いはどうだったのか、お聞かせください。

A：ご本人は甘いものがお好きで、美空ひばりさんの歌が大変お好きな方でおられました。
ひばりさんのテープや CD をお持ちで、お部屋で音楽を流したり、食堂で食事をしている時には、コンサートのビデオを流したりもしました。

発表を終えて　　西田　正（社会福祉法人東京有隣会 特別養護老人ホーム 有隣ホーム）

今回は貴重な経験をさせていただきありがとうございました。
十分な準備を行い発表に臨む予定でしたが、施設内でのクラスターが発生し、感染対応で準備不足のまま当日の発表を迎えてしまい、申し訳なく思っております。
助言者の大熊先生よりご助言いただきました「終末期ケア」の表現につきましては、施設内で検討し、終末期を「おもてなしケア」と致しました。
また、ご本人の望まれる「おもてなしケア」について、お元気な頃に日常の雑談の中で出ていたことを職員皆で話し合い、ご家族の方にも伺いながら、悔いの残らないお手伝いができる様に今後も取り組んでいきたいと思います。

助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・終末期という言葉が、何度も繰り返されていることが気になりました。本人の立場に立って考え、もし言われたらどうか考えていただきたいと思います。終末期という言葉を乱発しないようにお願いしたいと思います。

・コロナ禍で対面接触が制限されるなか、LINE を利用したオンライン面談、動画・写真の共有などの積極的な情報発信をしていく必要性について具体的に説明いただきました。

・「家族」の視点が強調されすぎているのでないかという指摘があり、「本人」の視点も尊重されていることを発表のなかでも提示しておく必要があると思います。

・厚生労働省は、「終末期ケア」という言葉を「人生最終段階のケア」という言葉に変えました。滋賀県の永源寺地区の花戸貴司 doctor は「人生最終章」という言葉をつかっておられ、いま広がっています。

介護施設における新型コロナウイルス感染症まん延防止対策を実践して

社会福祉法人康和会　特別養護老人ホーム　久我山園
三浦 綾華

（コロナ　感染対応　陰圧装置）

目的

新型コロナウイルス感染症(以下コロナとする)が日本でまん延して３年が経過した。その間、当施設では看護師が主体となり感染防止対策の教育を各職種に実践してきた。今年の８月に職員の無症状感染発生により、利用者１名、職員２名の感染を経験した。13 日間で他利用者、職員に感染拡大をすることなく収束することが出来た。従来型の施設で感染防止対策教育を実践することになり、その取り組み内容と今後の課題について報告する。

質疑応答

Q：感染防止対策の教育は、どのくらいの時期にどのくらいの期間で実施されたのですか。
A：2021 年１月 26 日から感染対策の教育を開始し、2022 年 10 月末には全員できるようにしました。

Q：陰圧装置があるということでしたが、一般病室の換気はどのようにしていますか。
また陰圧テントで過ごした方は、何日間いらして、何か配慮されたことはありますか。
A：一般病棟の換気は、普段から２時間毎に実施しています。陰圧テントの療養は、10 日間でした。家族や親せきの方々から手紙やハガキをお渡しして、読んでいただきました。

Q：同一法人にコロナ受け入れ病棟があり感染症の対策の専門の医師がいらっしゃり、研修環境が整っていると思われます。医療機関を併設しない単体の特養ホームやグループホームでは、なかなか医療機関とコラボできないので、こうした取り組みを広く発表して欲しいと思います。
A：ありがとうございます。

発表を終えて　　三浦　綾華（社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム 久我山園）

今回、せたがや福祉区民学会に報告できる機会を頂きありがとうございました。

他の施設の発表を傾聴させていただき、それぞれの施設の取り組みが自施設に導入できるヒントやきっかけとなる貴重な学会であることがわかりました。

当施設の発表も、コロナ禍で中々他の施設との交流も難しい状況で、試行錯誤しながら取り組んだ結果でした。当施設の取り組みが、他の施設のお役に立つことが出来れば幸いです。

私自身、初のせたがや福祉区民学会での発表で緊張してしまいました。発表を聞いてくださった方々には、貴重なご感想、ご意見を頂き本当に感謝しています。

助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・特別養護老人ホームにおける新型コロナウイルス感染症まん延防止対策についての具体的な報告がありました。施設内に感染者が発生した場合に必要となるN95マスクの正しい付け方、ガウンの正しい着脱、陰圧テントの適切な設営には、一定のスキルが必要となります。平時からこうしたことに関する研修を行っていく必要性について示唆された発表でした。その際には、感染症専門医との連携や医療職である看護師の役割が重要となります。

・陰圧装置のテント内で孤独に過ごした方へ、ご家族や親せきからの手紙やハガキを渡して読んでいただいたり、いろんな心配りがあることに感動いたしました。

移行先で適切な支援（ケア）を受けるために

－動画を用いた情報共有－

東京リハビリテーションセンター世田谷　障害者支援施設梅ヶ丘

細井 佑哉

（地域移行　動画　情報共有）

目的

地域移行型の施設として当施設は様々な障害のある方を受け入れ、利用者の地域への移行を支援している。近年、コロナウイルスの拡大により、移行先の施設職員に利用者の様子を直接見てもらう機会が減ってきている。当施設では、利用者が移行先での適切な支援を受けるためには、文章（言葉）では伝えきれない利用者の様子や支援者の声掛け、施設環境などの伝達が必須と考え、動画を共有する試みをしている。

今回は、障害を持つ方が新しい施設（環境）へ移行するにあたり、移行先への情報提供としての動画の有用性をまとめ、動画では伝えきれない情報をどう伝えるかについて考察する。

質疑応答

Q：利用者情報シートには、どのようなことが書かれているのか教えてください。

A：その方の成育歴やご家族との関係、日常生活に関する介助内容について書いてあります。このシートをもとに、施設に入所するかどうかの判定にも用いますので、その方の多くの情報が書かれているシートとなっています。

Q：今回は排泄介助場面の撮影でしたが、他にも日常生活動作を撮影されるのでしょうか。
また、日常生活動作以外の場面で動画の撮影をされることがあれば教えてください。

A：トイレ介助以外に入浴介助なども撮影することありますが、今回、入浴介助は水着等の準備が必要なので撮影しておりません。
日常生活動作以外では、この方は右麻痺の影響で装具をつけているので、装具の着脱の仕方を動画撮影させていただき、手順がわかるようにしました。

発表を終えて

細井　佑哉（東京リハビリテーションセンター世田谷
障害者支援施設梅ヶ丘）

発表内容に関して肯定的な意見がでてよかったです。

今回は動画を利用するという提案の形で発表させていただきましたが、質問があったようにどのような場面を撮影すればよいかを具体的に伝える発表もできればよかったと思います。

どうしてその動画を共有したのか、共有方法はどうやったかもスライドに入れる必要があったと感じました。

助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・利用者の地域移行支援において、移行先の施設職員との情報共有をする際に「動画」を活用するという先駆的取り組みについて紹介されました。文字情報だけでは伝えきれない情報（時間の流れ、動き）を動画で共有し、動画だけでは伝えきれない情報は、文字情報で補足する必要性が示されました。

・障害のある方が、専門施設から地域の施設に移行を目指すために、皆さんが文字情報だけでなく「動画」をいくつか作成して、情報を共有するために一緒に送り出すというのは、とても素晴らしいことだと思います。

介護老人保健施設利用者の自主リハビリの有効性

東京リハビリテーションセンター世田谷　介護老人保健施設梅ヶ丘
康 徳龍、渡辺 重人

（介護老人保健施設　自主リハビリ　身体機能）

はじめに

日本は世界第一の長寿国であり、これからも高齢者人口は増え続ける。超高齢社会に合わせて医療制度や利用者のニーズも多様化している。介護老人保健施設での利用者のリハビリサポートは制限があるため、入所期間の延長によりリハビリを受ける日数が急激に減少する。そこで、リハビリが受けられない日または余暇時間に自主リハビリを実施してもらい、利用者の身体機能や QOL（生活の質）の維持・向上について検証した。

質疑応答

Q：自主リハビリの大切さを報告されていましたが、モチベーションや動機付け等、やる気づくりのための工夫などありましたら教えてください。

A：工夫としては、自主リハビリに限らずリハビリを行ううえで、モチベーション、動機付けは非常に重要で、利用者の好きなことや趣味などを取り入れて行いました。ご利用者は、書道の先生をされていたので、実際に書を書いていただいたりしました。また私が好きな音楽をかけながら一緒に歩いてリハビリを行っています。

発表を終えて

康　徳龍（東京リハビリテーションセンター世田谷
介護老人保健施設梅ヶ丘）

今回の発表は介護老人保健施設利用者の自主リハビリであるが、ご利用者の身体能力が高く、ほぼADLは自立であったのでインターバル歩行ができ、循環機能や筋力の向上がありました。しかしながら、ご利用者の身体機能が低い場合のインターバル歩行が出来るか、今後はご利用者の選択を幅広く検証していきたいと思います。

助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・自主リハビリは、利用者の身体機能や生活の質を向上させるうえで有益であることを示唆されました。自主リハビリを利用者にしていただくうえで、利用者のモチベーション、動機付けが重要となります。好きなこと（音楽）をストレングス（強み）として、モチベーションをあげていく工夫をされていました。

・自主リハビリの工夫で、利用者の職業や好きなことをもとに、書を書いてもらったり、一緒に好きな歌を歌いながら実施した話がありました。工夫した際のご苦労やコツ等、たくさん入れていただくとさらに良かったと思います。

安心して在宅生活を送るために

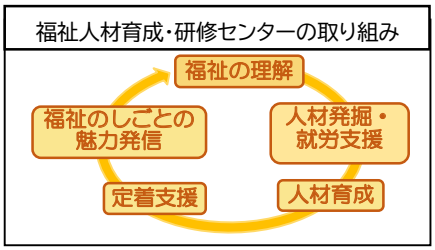
―世田谷区福祉事業所調査の結果を踏まえ　より良いケアの実現―

世田谷区福祉人材育成・研修センター　瓜生　律子
日本大学文理学部社会福祉学科特任教授　上之園　佳子

（福祉人材　定着支援　腰痛防止）

背景と目的

世田谷区福祉人材育成・研修センターは、福祉人材の確保、育成、定着支援を目指し、平成 19 年に世田谷区が設置し、世田谷区社会福祉事業団が運営している。少子高齢社会の進展、生産年齢人口の減少、要介護者の増加で、福祉人材不足は今後、益々、厳しい状況となる。研修センターは、令和元年度から福祉事業所調査等を実施し課題把握に努め、その改善に取り組んでいる。福祉人材の確保・育成に加え何よりも定着支援が重要なため、定着支援策の一つとして福祉現場の腰痛予防策について報告する。



質疑応答

Q：腰痛予防策として、リフトやスライディングボードを活用するという話ですが、活用するには、技術が必要で、繰り返しの訓練が必要だと思います。その点を配慮して進めていただきたいです。

A：リーフレットにはスライディングボードなどについて取り扱い方法等を動画で説明を入れてまいります。また、研修センターでは介護技術の研修も実施しています。いただいたご意見を活かし、引き続き丁寧に取り組んでいきたいと思います。

Q：介護ロボットやリフトを作っているエンジニアの方々とのつながりが福祉系にも必要だと思いますが、どのようにされていますか。

A：エンジニアの方との直接のやりとりはありませんが、今回ご質問をいただき、作り手に使い手の意見を伝えていくことも大切だと思いました。

Q：介護ロボットのなかで、特にコミュニケーションロボットには、セラピー効果もあり、大切だと言われながら導入が進んでいないようですが、何かヒントがあれば教えてください。

A：確かにまだまだ少ないようですが、デイサービスや在宅でも活用されていますので、癒しの効果などを伝えていきたいと思います。

発表を終えて　　瓜生　律子（世田谷区福祉人材育成・研修センター）

世田谷区福祉人材育成・研修センターでは、福祉人材対策に総合的に取組み、調査・研究事業の一環として、福祉事業者調査を実施しています。介護職の離職理由として「腰痛」が大きな要因といわれていますが、その対策が進んでいないため、作成中のリーフレット「腰痛対策　福祉用具活用のススメ」について紹介させていただきました。会場から様々な視点で、ご質問・ご意見をいただき、新たな気づきにつながりました。いただいたご意見を参考に、誰もが働きやすい職場環境整備に向けて、引き続き取組んでまいります。

助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・世田谷区福祉人材育成・研修センターの設置経緯等についての説明があり、人材確保、育成、定着支援の観点から、「腰痛予防対策」の重要性が指摘されました。さまざまな取り組みが紹介され、スライディングボード、介護ロボットなどの福祉用具の活用が推進されることの必要性について提言がなされました。

・リフトは腰痛をふせぐのに大切なのに、面倒におもって、つかわないのはもったいないことです。継続的な研修システムが必要です。また、福祉職場と開発の技術者とのコラボレーションがとても大切です。

・「介護ロボット」という言葉は、注意深く使われた方が良いと思います。ロボットと言うと、日本人は鉄腕アトムのようなものを想像します。現実施設で使われているのは、体調を監視する装置です。言葉は大切ですのでよろしくお願いします。

認知症があってもこの街で暮らす　行方不明者を救え！

社会福祉法人奉優会　奥沢居宅介護支援事業所
栃倉 勝、石原 しのぶ、髙橋 福太郎

（認知症　行方不明　地域で暮らす）

目的

事業所内で立て続けに起きた認知症の行方不明者の対応。増え続ける認知症高齢者と行方不明者や認知症高齢者による事故に対して、居宅介護支援事業所のケアマネジャーは緊急時に何ができるのか。

行方不明者の対応とその振り返り、今後の対策をまとめて再発を防ぎたい。

質疑応答

Q：地域の商店街等とつながったことは、とても良かったと思いました。ネットワークへの登録、GPSの利用につなげる際に、なぜ嫌がられるのか、拒否されるのか、ケアマネジャーの方も苦慮されていると思いますが、引き続き事業所でも検討してほしいと思います。

A：嫌がられる点として考えられるのは、まわりに迷惑をかけたくない、GPS は大げさすぎてしまうなど、ご家族様のおもいもあるかと思います。引き続き事業所で検討していきます。

Q：資料で気になった点があり、認知症の当事者の方は、徘徊という言葉はやめて欲しいと思っておられます。これから資料を作成する際は、言葉の使い方に気をつけていただきたいと思います。

A：言葉は確かに本当に大切なので、今後は気をつけていきたいと思います。

発表を終えて　　栃倉　勝（社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所）

無事発表を終えることができ、一安心しております。

助言者より、「徘徊」という言葉を使用する事でご利用者様本人が傷ついてしまうため、使わないで欲しいとも言われました。もっともかと感じました。一部スライドに「はいかいネットワーク」と出た為、本文では「徘徊」という言葉は使っていませんでしたが、説明不足により誤解を招いてしまいました。いずれにしても、言葉の使い方や時代に合わせた支援や対応ができるようにしていきたいと深く考えるきっかけとなり、とても参考になりました。発表の機会をいただき、ありがとうございました。

助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・行方不明となる認知症高齢者への対応について、ケアマネジャーには何ができるかということについて、事例をもとに具体的な報告でした。認知症高齢者と暮らす家族に対して、行方不明や事故のリスクについて理解していただくように働きかける必要性があります。また、ネットワークへの登録、GPS の利用、地域での見守りの重要性が指摘されました。

・最近では当事者の意見を踏まえ、社会福祉協議会も「徘徊」という言葉を使用しなくなっており、パンフレットも変更されています。大事なことは、認知症当事者の方が、納得したうえで、GPS の利用をされることが重要です。ご配慮いただければと思います。

・夜間はあんすこも、社協も閉まっています。夜間も含め警察はとても頼りになると思います。幸い、世田谷の警察の方たちは、世田谷区認知症とともに生きる希望条例についても勉強されています。それぞれの持ち味を活かしながら、連携をとっていただきたいと思います。皆さまのあたたかいお気持ち、よくわかりました。

口頭発表　第５分科会

【3-２０３教室】

進行役・助言者

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

	発表者	所属	タイトル
1	傳田　智也 五十嵐　泰起 石政　吾朗	日本大学文理学部 社会福祉学科 4 年	せたがやゼミナールのコロナ禍での実践
2	黒野　大希	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	右膝骨折後、保存治療で清拭対応となっていた利用者の入浴再開までの報告
3	比嘉　政美	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	アロマセラピーで認知症ケア －芳香療法で穏やかな日々を－
4	水内　寿美子 葭原　華陽 根本　一弥	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	お一人お一人の居場所を守ります
5	高橋　政道	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷	地域で支える「重度失語症者」へのコミュニケーション支援 －デイ・ホーム世田谷「ことばの教室」の実践より－
6	白石　哲也	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	”その人らしさ”と向き合うことで主体性を引き出すことの出来た一症例 －YouTube による自撮り機能活用による社会参加の促進－
7	長谷川　裕和 小川　知子 設楽　希	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	つながりながら自分らしく生きる －小規模多機能ホーム三宿が支える生活－

進行役・助言者

諏訪　徹
（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

中原　ひとみ
（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

せたがやゼミナールのコロナ禍での実践

日本大学文理学部社会福祉学科　４年
傳田 智也、五十嵐 泰起、石政 吾朗
（居場所　学習・生活支援　学生ボランティア）

目的

世田谷区生活困窮者自立相談支援センター「ぷらっとホーム世田谷」（以下、「ぷらっと」）では、子どもの学習・生活支援事業「せたがやゼミナール」（以下、「せたゼミ」）を区内５拠点において実施しており、そのうち２拠点で日大文理の学生が活動をしている。

新型コロナウイルスの感染予防の観点から、活動時間の短縮、参加する子どもに合わせた学生ボランティアの人数調整、食育の中止など活動の制限を余儀なくされた。そうしたコロナ禍の特殊な活動環境で学生が子ども達一人ひとりに向き合う中で悩み、解決方法を模索することにより得た学び・成長について発表をする。

質疑応答

Q：コロナ禍で工夫したことに声かけを増やすとありましたが、どのような声かけをされましたか。

A：「活動に来てくれると嬉しい」「次の活動までの間で何があったか教えてね」など、学校の運動会や音楽会のイベントなどの話題を交えながら、学生からどのような声かけをしたら、子ども達にとって活動に参加するのが負担にならずに参加しやすくなるのかを考え、子ども達が気軽に話せるような声かけをしました。

Q：特定の学生に依存することは悪いことではないと思いますが、お子さんの特性を皆で理解するための改善点の方向性や考えがあれば、お聞かせ下さい。

A：今はまだ具体的な解決方法は見つけることが出来ていません。学生側から様々なアプローチを行いましたが、特定の学生が活動に来ないなら行かないとなってしまい、その子のことを知っている学生が４年生のみになってしまいました。学生同士の話し合いのみではなく、その子の実情などを理解している「ぷらっと」の職員の方を交えての話し合いを重ねながら、その子が１ヶ月に１回でも良いので来てくれるような環境づくりを学生側からも積極的に提案し、今後実践していきたいと思います。

Q：小学生から高校生の子ども達のなかでどの年齢層が多く通っていますか。

A：どの年齢層が多いということはないと思います。ただ、多くの子ども達が一貫して続けて参加しているという印象があります。最近では、高校生の頃まで通っていた子どもが社会人となり、月に1～2回程度、ボランティアとして関わってくれています。

発表を終えて

傳田　智也(日本大学文理学部社会福祉学科 4年)

聴講して頂いた方から、学生という立場から支援を行うことに大きなメリットがあるとお褒めの言葉を頂けたことがとても嬉しかったです。

今回、発表させて頂くにあたって自分たちが行ってきた活動の振り返りをすることができました。コロナ禍での実践を通して、学生という立場で関わることは、多くのメリットがあり、継続して関わることは、子ども達にとっても学生にとっても大きな意義があると改めて考えさせられました。今後、子ども達と関わる際には、学生という立場をしっかりと理解した上で関わっていきたいと思います。

「せたゼミ」に参加している子ども達の中には、特定の学生に依存をしてしまっている子どももいます。今回の発表でもその部分に関して、ご意見を頂きました。これまでは、多くの学生と触れ合う機会を子どもたちに対して作ることが良いと考えていましたが、無理にそうするのではなく、子ども一人ひとりに合わせた支援が必要であることを学ぶことが出来ました。

今回の発表を通して、「せたゼミ」の価値や今後の課題を明確にすることが出来ました。「せたゼミ」は、子どもの学習や居場所支援の場としてなくてはならないものだと思います。後輩たちにこの価値や課題を伝えて、今まで以上により良い活動を行なっていきたいと思います。

助言者コメント

諏訪　徹　　(日本大学文理学部社会福祉学科教授)
中原　ひとみ(世田谷区特別養護老人ホーム施設長会)

・コロナ禍でも工夫しながら、子どもへの関わりを続け、活動を継続したことが素晴らしい。またコロナのなか、自分たちの活動の意義を見つめることができたので良かったと思います。

・コロナが流行って今までのスタイルと違った形で継続していくということがとても大変だと感じました。特定の方に依存するというお話が出ましたが、寄り添い型ということを挙げられていて、こちらから強制的ではなく、お子さん達が悩んでいること等をゼミナールから帰っていくときに、自然に言葉に出せるという関係性がとても良いと思いました。

右膝骨折後、保存治療で清拭対応となっていた利用者の入浴再開までの報告

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム　芦花ホーム
黒野 大希

（高齢者　ニーブレース　入浴）

背景と目的

本年６月末日、移乗介助時の転倒により当施設入居者の 90 歳代女性 A 氏が右大腿骨顆部を骨折した。ご家族は手術負担や認知症状進行への懸念から保存治療を希望され、A 氏も同意された。ニーブレース（以下、装具）で右膝を外固定した状態での療養となり、当初の清拭はベッド上での対応となっていた。しかし、気温上昇に伴い装具着用箇所が蒸れて掻痒感が生じやすかったことに加えて、A 氏が清潔好きであったこともあり早期から入浴の希望があった。一般的に保存治療では不十分な固定による骨折の癒合不全や、装具の過度な圧迫による褥瘡に注意を払う必要がある。それらのリスク管理と並行して入浴再開することを目的に対応を検討した。

質疑応答

Q：長期間のケアをするにあたり、多職種でどのように連携を進めていったのでしょうか。その工夫について教えて下さい。

A：基本的には利用者担当（看護師、介護士１名ずつ）を決めています。利用者担当と機能訓練指導員が連携し、利用者担当から出た意見を看護主任、介護主任に報告し、意見を仰ぐという形をとっています。毎日出勤している機能訓練指導員に情報を集約し、看護主任、介護主任へ伝え、各フロア内で伝えるという形で情報共有を行っています。

発表を終えて

黒野　大希（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム 芦花ホーム）

貴重な発表の場を設けていただきありがとうございました。今回はスタンダードな症例報告であったことに加えて、職場の上司や同僚が多く聴講に参加してくださり、肩の力を抜いて発表することができ、とても楽しい時間を過ごさせてもらえました。

総会でも触れられていましたが、区民学会は医療、児童、発達障がい、地域コミュニティと多様なフィールドからの情報の発信、意見交換がなされる稀有な場であり、普段は触れることのない価値観や環境を知ることができ、一参加者としても興味深く他参加者の発表を拝聴させていただきました。

こういった場で発表する経験は、準備を含めて自身の仕事内容と改めて向き合う良い機会になると感じており、今後も継続的に発表者として参加できればと思います。

助言者コメント

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

・利用者のデマンドを受け止め、リスク管理と両立させるため、密な多職種連携が行われていた。このような実践がコロナの第 7 波のピーク時にも行われてことに敬意を表したいと思います。

・私も施設におりまして、多職種でというところで、介護職員や看護師がローテーションで仕事を行なっている特別養護老人ホームは、次に伝えていくということが難しいと感じています。そのような環境の中、機能訓練指導員が核となり同じ情報を共有して次に伝達していくというスタイルをとることで同じ作業、同じ目線で評価し、次につなげていくという素晴らしい形が取れたと思いました。 私たちもこのような事例を参考にして、施設で役立てていきたいと思います。

アロマセラピーで認知症ケア

―芳香療法で穏やかな日々を―

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム　上北沢ホーム

比嘉 政美

（認知症ケア　アロマセラピー　日本版BPSD ケアプログラム）

目的～アロマセラピーが認知症の BPSD にどのような効果を現すか

鳥取大学で、アロマオイルなどを用いた嗅覚からのアプローチが、認知症の予防や症状改善に効果があることを研究発表している。そのアロマセラピーが、入所されているご利用者に対して効果があるのか、ご利用者が安心して穏やかに過ごせることを目的に実践した。

質疑応答

Q：認知症の方の中には新しい装飾品などを着用することを気にされてしまう方がいらっしゃるかと思うのですが、今回ご利用対象者となったＡさんはアロマのネックレスの着用を、気にされているご様子はありませんでしたか。

Ａ：いい匂いと感じているご様子で喜んでおられるようでした。

Q：経費が今後の課題として挙がっておりましたが、効果としては夜間を中心として非常によかったと思います。例えば、ご家族に消耗品として購入してもらう方法もあると思うのですが、いかがでしょうか。

Ａ：非常に大きな課題です。高価な物もあり、ご家族に請求するのは心苦しい点もあります。研究として成功し、今は安定していらっしゃいますが請求はしておりません。アルツハイマーのエビデンスしか出ておりませんので今後工夫が必要かと思いますが、ご自身で体感していただくのが良いと思います。

Q：利用者の方により、それぞれ好きな香りがあると思うので、その点、難しくなると思いますが、今後どのように進めていかれるのでしょうか。

Ａ：調べてみたところ香りに対する効能がそれぞれ違いますが好みがあるので、好きな香りを選んでいただけるようにしていきたいと思います。

発表を終えて

比嘉　政美（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム 上北沢ホーム）

認知症の BPSD の改善に絶大な効果を発揮したのは、この研究をやってみたいと思った私を始め、施設の職員も一様に驚きをかくせません。

同じように私の発表を聞いた方々にも、半信半疑ではなかったのかと思います。そして、もともとアロマに興味のあった方は「やはり！！」という表情をされていました。

今後、この研究を更に深堀りし、データを収集できたら面白いと思いました。

助言者コメント

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

・意欲的なチャレンジで大きな効果をあげられたことに大変興味深く思いました。介護職のスタッフの評価の工夫も関心しました。是非、ケースを積み重ねていただきたいです。

・とても新たな取り組みかと思います。現段階ではお一人のみの研究なので、経費や手間など施設の負担も大きいと思いました。今後、いくつか事例を積み重ねながら広がっていけば良いと思いました。

お一人お一人の居場所を守ります

社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
水内 寿美子、葭原 華陽、根本 一弥

（不安　安心　その方らしさ）

はじめに

A 様、70 代、男性、平成 27 年 60 代でレビー小体型認知症と診断。会話が繋がらず、時折、奥様に対して暴力的なことがあり、指示命令も入りにくい。地域の体操教室にも奥様と通われていたが、症状が進むにつれ難しくなってきた。ご自宅にいる時間が増え、常に奥様と行動を共にされていた。昨年 11 月から、奥様の気分転換、ご本人の気晴らしになることをさせたいと、デイホーム奥沢をご利用される。初日は１時間で帰宅することに。徐々に滞在時間が伸びた背景について考察する。

質疑応答

Q：落ち着かれた一番の要因としてどういうことがあるのでしょうか。
A：顔なじみの職員がいるので関係性ができ、安心されていったという実感はあります。

Q：周りのご利用者との関係についてどのように配慮されたのでしょうか。
A：A 様が暴れたりした時に職員が止めても抑えきれない様子を見て、恐怖を感じられるご利用者もいらしたと思います。他のご利用者と接触しないよう対応しましたが、だんだん A 様も慣れ、周りのご利用者も静かに見守ってくださるようになってきたので、ご理解いただけていると感じています。

発表を終えて　　水内　寿美子（社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢）

A 様の滞在時間が延びた背景には、内服薬の調整のみならず、A 様の生活歴から好きなことや苦手なことを職員が創意工夫しながら行った結果だと思っています。また、奥様以外の方と顔なじみの関係性になりつつあると思っています。今後も、良好な関係を気づきながら、A 様に居場所だと思っていただける場所を提供していきたいと考えています。

助言者コメント　　諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

多くの問題行動に対して一つひとつ職員間で話し合い改善方法を考え、どうしたら通所できるか対応を行っており、本人や家族の負担が減って良かったと思います。問題行動が多いと、他の利用者の事もあり、通所が困難になり、終了となることが多いが医療とも連携し、うまくいったケース、今後も穏やかに過ごせることを希望します。個別対応も大切だが、毎回、同じ顔がみえて、顔なじみの関係性がつくられたのは大きな成果となったと思います。

地域で支える「重度失語症者」へのコミュニケーション支援

－デイ・ホーム世田谷「ことばの教室」の実践より－

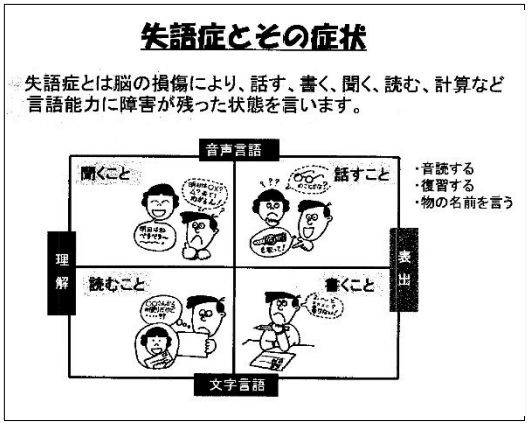
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷

高橋 政道

（重度失語症者　コミュニケーション支援　仲間づくり）

目的

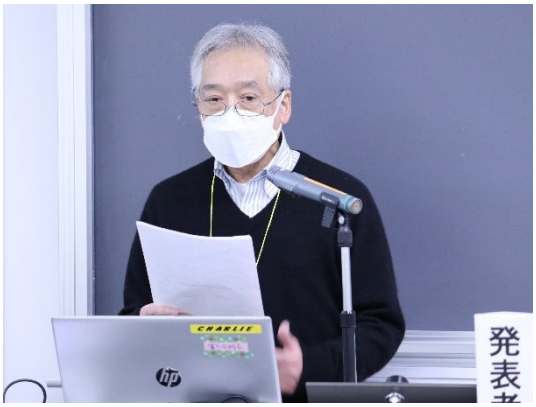
デイ・ホーム世田谷では、平成 26 年から「失語症コース」（通称「ことばの教室」）を開設し、失語症者のコミュニケーション支援と仲間づくりを目的にグループ訓練を実施してきた。特に、重度失語症者へのケアにおいては、コミュニケーション支援と共に心理・社会的側面への支援も重要である。重度失語症者が実用的なコミュニケーション手段を使い、他者と交流出来る場の提供を目的とした。



質疑応答

Q：「ことばの教室」に来て、いろいろなコミュニケーションの可能性を発見され、ご家族や関わっていらっしゃるいろいろな所と共有して、「ことばの教室」の外側で自信を回復していくことやコミュニケーションを広げていくことはとても大事だと思います。その点で、デイ・ホーム世田谷で取り組まれていること等があれば是非教えてください。

A：最近のことですが、家族会を開かせていただきました。ご家庭の様子やご家族の想いを知る必要があると思ったからです。そこからご家族も大変な状況を抱えているということがわかりました。それからケアマネジャーと情報共有することが大事で、他の機関とのつなぎ役も行ってもらえたことが良かったと思います。今後も取り組んでいきたいと思います。



発表を終えて

高橋　政道（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
デイ・ホーム世田谷）

今回は、特に重度失語症者の方々に対しての「ことばの教室」の取り組みを紹介させていただきましたが、重度失語症の方にとって「教室」は居場所としても交流の場としても大切なところと思っています。

ご家族をはじめ、当事者をとりまく方々にも「失語症」を知って頂き、良き、コミュニケーション相手となって頂けるよう、連携、発信をしていきたいと思っています。

助言者コメント

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

個々の能力に合わせて取り組む事の大切さが理解できました。能力を評価するのに、様々なツールを使っているのが興味深く感じました。押しつけではなく、本人からの表出を持つ・・・根気が必要ですね。「親しみと信頼」は大事です。

”その人らしさ”と向き合うことで主体性を引き出すことの出来た一症例

－YouTube による自撮り機能活用による社会参加の促進－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋

白石 哲也

（COVID-19　主体性　リハビリテーション）

目的

訪問現場における理学療法士の役割はリハビリテーションの理念を踏まえ、「心身機能」「活動」「参加」それぞれの要素に対し働きかけることが重要であるが、未だ「心身機能」に対する機能訓練が継続して提供されているという現状がある。今回、訪問の関わりの中で、動画講義の撮影やプレゼンテーション体験を通して、行動のきっかけとなる内発的動機付けを引き出すことで、ケアの質の向上を図ることを目的とした。

質疑応答

Q：男性の利用者は身なりを気にしなくなることや内発的な動機がでてこないことが多いと思うのですが、利用者の意欲を引き出す上で気を付けた点や工夫した点を教えてください。

A：服装はとても大事だと思っています。この頃、認知症の症状も進んでいることもあり、訪問時はパジャマのような服装で、ひげも伸びているご様子がありました。撮影日はきれいな服装をされ、本人のモチベーションにつながるイベントを提供することが大切だと思いました。内発的動機を引き出すために工夫したことは、男性は人前で話すことが好きな場合が多いので、お話をしたくなるように職場の雰囲気を出すことなどを意識しています。

Q：他に試された方はいらっしゃいますか。

A：他にはいません。普段やっていることとして、YouTube とか、運動している動画を自撮りしていただいたりしています。

発表を終えて

白石　哲也（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

動画講義の撮影やプレゼンテーション体験といった通常のリハビリテーションの現場では見かけないアプローチに関心を示してくださった方が多いように感じました。

今回のアプローチでは効果検証が乏しく主観的な変化のみに留まってしまった為、今後いかに客観的な指標を示していけるかが課題だと思いました。

助言者コメント

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

・他動的な運動療法が中心に思われてしまうリハビリテーションが、多角的な方向から関われる事で本人の自発的な興味を持ったリハビリテーションは、身体全体の機能を向上させるものだと感じました。

・私も人前で話す仕事を行っているので、私もこうなった時にやってほしいといいますか、誰もコメントしてくれないかもしれませんが、絶対私も自撮りをするだろうと思いました。また、「男にはこの手があったか」と思いました。地域福祉でもよくあるのですが、「私の自慢」という形で発表すると、色々なことが出てきます。地域福祉と今回の発表が繋がり、大変興味深く思いました。

つながりながら自分らしく生きる

－小規模多機能ホーム三宿が支える生活－

社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
長谷川 裕和、小川 知子、設楽 希
（自立支援　認知症ケア　小規模多機能）

目的

小規模多機能型居宅介護における、利用者との関わりの中で、地域、社会、人とつながりながら、安心・安全で自立した日常生活を営む為に、どの様な支援ができるかを検討し、それを実践することを目的とした。

質疑応答

Ｑ：A さんに対して、試行錯誤しながら全体を受けとめている力がすごいと思いました。伺う時に福祉職に見えないように、格好を工夫され、相手との距離感をどのように持っていけばいいかという工夫を端々に感じました。本当に素晴らしい発表でした。ちなみにどのような格好でいらしたのですか。

Ａ：介護を受けたくないとお聞きしていたので、福祉職に見えないように工夫しました。ご近所の主婦が、買い物の途中のように手さげを持って行ったり、いろいろな格好を試しています。

発表を終えて

長谷川　裕和（社会福祉法人こうれいきょう
小規模多機能ホーム三宿）

想像以上にたくさんの方が、私たちの発表を聞いてくださり、非常に嬉しく思いました。

「介護職に見えない服装」について、ご質問を頂き、近所の方との交流がお好きな方であった為、ご近所の主婦をイメージした服装で訪問することで、少しずつ良い関係ができているのかと思います。

小規模多機能型居宅介護だからこそ、いつまでも過ごしてきたご自宅での生活を支えることができるという自信を持ってこれからも、お一人おひとり向き合っていきたいと思います。

助言者コメント

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
中原　ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

・小規模多機能型居宅介護は認知症の方にとっては、在宅でも通所でも顔なじみの人がおり、安心できるサービスであることが理解できました。

・介護保険サービスは、ホームヘルプ、デイサービス、ショートステイなど、色々なサービス事業者があり、点と点になっているため、ケアマネジャーが中心となり、マネジメントを行っています。そのため、各サービスが繋がらない部分が多いことから、サービス担当者会議を開いております。今回の発表で小規模多機能型居宅介護は、線でつながっているという意味で顔なじみの関係を作ることが認知症の方にはとても大切だと感じました。

・小規模多機能型居宅介護が多機能的に支える可能性があると思いました。この方とこれから作っていく生活が楽しみだと話され、そういうところにサービスをしてもらえることはすごく良いことだと思います。この方は地域との関係も深かった方なので地域との関係が再構築され、その方たちも自然にケアに関わっていただけるとすごく嬉しく、色々な可能性があると思いました。

口頭発表　第６分科会

【3-２０６教室】

進行役・助言者

助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）

佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

	発表者	所属	タイトル
1	木畑　実麻 手塚　由美	一般社団法人 輝水会	小・中・高校生夏休み福祉体験を経て －コロナ禍におけるオンライン開催の実践－
2	東内　郁美	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	A ちゃんとのトイレトレーニングでの関わり
3	浜川　真海	社会福祉法人たちばな福祉会 RISSHOKID'S きらり代沢	非認知能力を育む乳児保育の実践
4	石丸　拓也	社会福祉法人嬉泉 おおらか学園	I さんの現状における支援と取り組み
5	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房	「受容」のなかで求められることを考える
6	斉藤　由子	社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房	A さんとの対話の積み重ねから学んだこと
7	長見　亮太	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立下馬福祉工房	仲間の場から外れがちな A さんへの誘いかけ支援 －クローズアップ場面を通して A さんが表した 心情への気付き－

進行役・助言者

助友　裕子

（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）

佐藤　光正

（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

小・中・高校生夏休み福祉体験を経て

－コロナ禍におけるオンライン開催の実践－

一般社団法人　輝水会

木畑 実麻、手塚 由美

（福祉体験　リハ・スポーツ　共生社会）

目的

世田谷区福祉人材育成・研修センターでは毎年、次世代を担う小・中・高校生に向けて、福祉体験を通して、福祉の仕事や高齢者・障害のある方への理解促進を図る目的で夏休みの福祉体験を実施している。当初、車いすや介護用ベッドの体験やボッチャ体験を研修センターで開催予定だったが、新型コロナウイルス感染者数の急拡大を受け、ZOOM を利用したオンライン開催に急遽変更した。オンライン開催の取り組み内容を報告するとともに参加者のアンケートより見えた成果や課題を考察する。

質疑応答

Ｑ：Zoom にもかかわらず、参加者が 200 人を超えるということですが、工夫など、どのようにしてうまくいったのか教えてください。

Ａ：区内の小中高校生へ直接、ご案内を世田谷区福祉人材育成・研修センターから行った結果だと思います。

実際の体験には、もっと申し込みがあったそうで、Zoom に変わったことで減ってしまったそうなんですが、毎年かなりの申し込みがあるとのことです。私たちが関わらせていただいたのが 2 年前からですので、そこから残念ながらコロナの関係で実際の体験はできない状況です。

発表を終えて　　手塚　由美（一般社団法人 輝水会）

福祉体験を通じ小学生・中高校生が思いの外、多くの気付きや発見をしていることを伝えることができ、子どもの頃から高齢者や障害のある人に対する福祉の在り方を、知ってもらう機会の重要性をあらためて感じました。

映像を通じて障害のある人でも工夫さえすれば、誰もが一緒にスポーツを楽しむことができる環境を作ることができることや、世代を超え、福祉に対する理解を深めていくことの大切さをご助言いただき、今後も幼少期からの福祉体験を続けることの意義を感じました。

助言者コメント　　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・日本人のスポーツ実施率、特に障害のある方の実施率は非常に低く、場所がないことは課題だとされており、このような身近な生活圏での実践は非常に重要だと思いました。

子どもの教育の場で福祉の話題に触れた教育をすることは本当に重要だと思っております。

・中央教育審議会は今、子どもたちを育てる際の重要な 3 つの資質能力の柱を謳っています。
1. 知識と技能、2. 思考力・判断力・表現力、3. 学びに向かう力・人間性です。これらの 3 つの資質能力にみられるように、知識を与え、そして考えさせられるような動画を子どもたちに見せて、その後は人間性を育てていく。学んだことをもとに感想をさらに身近な人に伝えようと思うなど、実際にアクションに及ぶところが、今後、非常に楽しみだなと思いました。イノベーション普及理論に基づくと‘16%の壁’というものがあるそうですが、この壁を乗り越えて、福祉のすばらしさを普及していきましょう。

Ａちゃんとのトイレトレーニングでの関わり

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園
東内 郁美

（気持ちを考える　寄り添う　挑戦）

はじめに

Ａちゃんは、自閉症スペクトラムの診断がある５歳女児である。言語については、発語は殆どみられず、要求表現や意志表示の際は頷く、首を振る、指を指すなどのジェスチャーが主である。また身辺自立については、排泄以外の食事や着脱などは年齢相応である。その他、環境の変化に対応することが苦手といった特性がみられる。

今回の事例では、Ａちゃんとのトイレトレーニングでの関わりの経過について報告する。

質疑応答

Ｑ：トイレトレーニングで排尿よりも排便で困っている、難しいという声も聞きますが、何か取り組みがあればお聞かせください。

Ａ：かかわり方としては、排尿する時と同じようにお子さんのペースを見ながら、進めています。

Ｑ：言語でのやり取りが難しい子と接する機会があるが、ノンバーバルコミュニケーションなど、工夫が必要だと感じています。そのような際の支援のポイントや配慮などがあれば教えてください。

Ａ：行動だけを見るのではなく、「どうしてそのような行動になったのか？」など、表に出てこない、裏にある気持ちを考えながら接しています。また、支援者も楽しみながら関わることを大切にしています。

Ｑ：トイレの前に「オムツとトイレの個室の写真」が並んでいますが、どのような取り組みなのか教えてください。

Ａ：言葉だけではなく、視覚的に「どこか、何をするのか」を示しています。視覚的に伝えたほうがわかりやすい子もいるので工夫してサポートしています。

発表を終えて　　東内　郁美（社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園）

緊張でいっぱいでしたが、スタッフの方が温かく声をかけて下さり、緊張がほぐれました。
発表の準備を進めることは、自分の関わりを振り返る貴重な機会であり、お子さんの心の動きや、成長を実感できる時間でもありました。日々の業務の中ではこのような一番大切なことが、置き去りにされがちだったと反省をしました。他の方の発表を聴き、“自分たちだけではないんだ”と関わりを大切にされている支援者の思いと苦労に共感をし、“また明日から頑張っていこう”という気持ちになりました。
進行役の方、助言者の方、スタッフの方々が温かく発表を聴いてくださり、ありがとうございました。

助言者コメント　　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・丁寧にコミュニケーションを取ってらっしゃることがよくわかるご報告でした。コミュニケーションの基本に立ち返らせていただいたと思います。
コミュニケーションはメッセージを送る側と受け取る側がいて、初めて双方向の矢印になります。オムツが取れるよう一生懸命メッセージを送っても、なかなかできない。けれども、メッセージの送り手はフィードバックしてもらう相手の様子・行動や、裏にある気持ちを一生懸命読み取ろうとしており、よいコミュニケーションをされているなと思いました。

・人間はコミュニケーションをとる際、どのような手段でメッセージを送るかという、チャネルと言われるものが非常に多様です。例えば、定型発達のお子さんであれば、言語という形で言葉になりますが、そこがうまくできないときは写真やキャラクター、図示するなどをうまく取り入れられていることがわかりました。さらに、ご家庭と情報交換するなど、生活全般にわたって総合的に、どのチャネルがこの子とのメッセージのやりとりに一番良いのだろうかということを模索しているご発表だと思いました。このチャネルについては色々な可能性があると思いますので、今後もメッセージの送り手として、どのようなチャネルが開発されたのか、その結果として受け手である対象者からどのようなフィードバックが得られたのか、さらなる分析結果が提示されることを楽しみにしております。

非認知能力を育む乳児保育の実践

社会福祉法人たちばな福祉会　RISSHOKID'S きらり代沢
浜川 真海

（愛着形成　信頼関係　孤育て）

目的

乳児期の子どもは集団ではなく、個を尊重した関わりが愛着形成において重要であると考える。そうした保育の実践を通して、子ども、保護者共に信頼関係を築き、安心できる子育ての環境を整えて発信していくことで、子どもにとってより良い育ちの保障を促す。また、様々な保護者との関係を築いていき、孤育てを予防していく。

質疑応答

Q：保育者が保護者同士をつないでいくことが虐待を防止する上で大切だと考え、実際に行事で保護者同士をつなぐなどの実践をされていたかと思いますが、それに対して、保護者から何かリアクションがあれば教えてください。

A：実際にそのような場面で、悩みなどを共有する場を設けることによって、お子さんの送迎時や普段の保育の場面で気軽に保育者に相談できることに繋がっているのではないかと感じています。

発表を終えて

浜川　真海（社会福祉法人たちばな福祉会
RISSHOKID'S きらり代沢）

コロナ禍における”保護者同士を繋ぐ場“をどう保障していくかについて改めて考えていきたいと感じました。

保育者の離職率について、保育者同士のコミュニケーションの大切さも関係していると発見しました。自身が現場で保育者とどのようにコミュニケーションを図っているか、意識していきたいと感じました。

助言者コメント

助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

・自分の子どもの保育園時代を思い出しながら伺いました。こんな若い先生がいる保育園はすごく頼もしいなという思いです。コロナ禍により、例えば、保護者同士をつなぎ合わせることが非常に難しくなっています。横のつながりがとても大事ですが、オンラインでみられるように、個人個人は色々情報共有して力をつけても、コミュニティ全体としては課題があることを感じました。このご発表では、この部分の課題解決に一生懸命ご尽力されていると感じました。それと同時に保育士同士のコミュニケーション構築も努力されていないと、そもそもこのような場で発表できないなと思います。

・札幌市内で保育士を対象として行われている離職コホート研究でも離職の要因として、同僚のつながりが関連していることが明らかになりつつあります。次回はぜひ同僚のつながりに焦点を当てたご発表を期待しています。

Ｉさんの現状における支援と取り組み

社会福祉法人嬉泉　おおらか学園
石丸 拓也

（生活基盤）

背景・目的

知的障害を伴う自閉症の２０代の男性。

家庭の事情により、他県から世田谷区に引っ越してきました。引っ越し当初は、新しい施設で過ごすことや今までの生活とは大きく変わった状況の中での生活となり、本人の状態も落ち着かないことが続いていました。その為、施設通所先では噛みつきや引掻き等の他害が頻繁に見られ、不安定な状態も続きました。また、送迎中の車内においてパニックになった際には、対応が難しく警察が介入する事態にもなり、その結果、施設への通所が難しくなり在宅で過ごすことになりました。

しかし、在宅で過ごしている中でも、本人の状態に変化が見られず、ご家庭での生活も徐々に限界を感じるようになり、生活基盤や状態の安定を図る為におおらか学園に転入することになりました。おおらか学園入園当初も、本人にとって不快な刺激や、見通しが持てない様子に、不快感を受け、噛みつき引っ掻き等の他害や、失禁などをする様子が見られていました。その為、まず初めに登園してから降園まで安心して過ごせる状況の生活基盤を作れるように支援する事を目的としました。

質疑応答

Ｑ：Ｉさん自身が他の利用者との関わりはとても難しいと思いますが、学園の中で、実際に他の利用者の方と関わりがありますか。

Ａ：特性もありますが、関わりの中でご本人が、他の方が行っている作業や唐突なきっかけが刺激となってしまい、ご本人の納得いく答えが見つからず、他害などにつながりかねないということもあるので、職員がご本人の様子を見ながら対応しています。

Ｑ：私たちも支援の際、同様に、本人への刺激を遮断することで、安心につなげる場面はありますが次の一歩を進むことの難しさを感じています。それぞれの方で異なるとは思いますが、例えば具体的に、タイミングやきっかけ、どのようなやり取りから始めるかなど、ありましたら教えてください。

Ａ：次のタイミングというところは、現在自分たちも難しく悩んでいるところではありますが、関係性ややり取りができているという状態がなかなか見えにくく、割と肌感覚的になってしまうことがあるのが現状です。本人の受け答えの様子などを頼りに次のステップとして作業等の声かけなどを行いながら、本人のリアクションに対して、さらに対応しています。

発表を終えて　　石丸　拓也（社会福祉法人嬉泉 おおらか学園）

今回の発表により改めて現在担当している利用者について整理して考えることが出来ました。またご意見をいただく事で自分でも気付かない事や支援において、次のステップに入る難しさや課題について、より考え向き合う事が出来ました。

今後の支援においても目標の見直しやアセスメントをしながら支援に取り組めればと思います。

助言者コメント　　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

たとえば、「絵を描くことが好き」という強みを生かすという、ストレングス視点を大事にするとともに、「折り合いをつけるのが苦手、見通しをつけるのが上手ではない」ということを理解し、リフレーミングを行うことで支援を推進することが大事です。

トライアンド・エラーの連続かと思いますが、ストレングス視点に着目しながら、本人の主体性を考えながら適切な枠組みを提供することは、本人にとって必要なことで、支援者ではなく本人が安心できる支援が大事です。

さらに取り組みにチャレンジし、また発表していただけるとうれしいです。

「受容」のなかで求められることを考える

社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房
田島 和美

（障害理解　受容）

はじめに

私たちが、知的障害の方の支援で大事にしているのは、受容、心情理解、肯定的解釈、その方の障害と特性の理解、関係論である。受容の視点を基本にして、日々の関わりを進めている中で、時々「受容」に対して悩ましく思うことがある。その時の心情を探って、気持ちを受けとめることが「受容」だと思っているが、気持ちを受けとめるということは、それぞれの持ち味や個性だから、その行動が、その方の興味のあること＝やりたいことだからと、すべてを受け入れ、それで OK として、すべてを認めることなのだろうか。持ち味を発揮しながら、充実感や「こんな自分が好き」と感じられるよう、その方の行動の整理や「こうあってほしい」という是非を伝える役割も含めて「受容」なのではないかと思っている。

このバランスや見極めには難しさをとても感じる。自分自身、考えがブレてしまうことや、分からなくなることも多々あるため、エピソードを通して、改めて「受容」することを考える機会にする。

質疑応答

Q：物事や行動の是非の伝えが指摘や非難にならない配慮について、ヒントなどお聞きしたいです。

A：大人として、それぞれのこれまでの背景なども理解した上で、接しています。その方の言葉の理解力によって、受け止め方もそれぞれだと思いますので、あまりマイナスな感情が残らないような配慮や、「ダメです」というような表現ではなく、「こうした方がいい」ということが伝わるような言葉選びに加え、自分たちの表情やトーンに気を配ることが配慮なのかと思っています。また、「私ことば」でお伝えることも大事にしています。

発表を終えて　　田島　和美（社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房）

今日の発表で本人主体よりも対象者主体になっているように皆さんには伝わってしまったかなと思いました。こちらとしてはそのようなつもりはありませんでしたが、先生からの講評でそのように感じたため、伝え方の至らなさだったかもしれません。または、このような視点は支援者主体と捉えられやすい内容なんだとも感じました。

だからこそ、先生のおっしゃるような“沼”“深い”ものなのかもしれません。

私たちの、その方にこうあってほしい、こうあったらその方らしい過ごし方になる、という思いが強すぎてもいけず、目指すところはその方の思いを叶えること、だからこそ、その方の見えない心情に目を向けられるようにすることが必要だと、改めて勉強になりました。また、立ち止まって考えて、を繰り返していきたいと思います。ありがとうございました。

助言者コメント　　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

「受容」ということに関して真面目に深く取り組んだ発表だと思います。「受容」には支援者側の受容や、利用者側の受容があります。利用者側の受容は「リカバリー」という考え方のほうがわかりやすいと思います。リカバリーは、本人が自分の存在、ありのままを受け止めて、それを肯定し生きていくような受け止め方を言います。哲学的な話かもしれませんが、人はそれぞれ、自分という感覚受容器を使って、「のぞき窓」から見ている。その世界は、それぞれ違った景色です。常にかかわりを「問う」ことが大事なことだと思います。

A さんとの対話の積み重ねから学んだこと

社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房
斉藤 由子

（関係発達）

はじめに

A さん（愛の手帳２度の知的障害、自閉症）は、人への信頼感があり、上手に人を頼ることができる男性。DVD や動画視聴、外出、食事等、好きなことをしっかりと持ち、欲しいものや気になる事柄を人に伝えられたり、マイペースながら、周囲の動きに合わせ、活動に参加されたりする。一方、いつもとは違うプログラムで見通しが立たなくなったり、気になることが解消されない際、急な他者の泣き声等に、頭を叩く自傷や泣き、走り出し、物を投げる、壊すといった行為になったりすることもある。そんな A さんが、安心して力を発揮できるよう取り組んだ７年間の歩みを振り返り、学んだことを考察する。

質疑応答

Q：最初の２年間、そして担当が変わられた当初、大変だったのではないかと思いますが、手応えを感じられるようになった時期やきっかけがありましたら教えてください。

A：もともと人に信頼感を持てているというか、愛着形成が上手にできている方だなという印象がありました。ただ、なぜか反発心やちょっと顕示的なところが出ると、その思いや衝動性をコントロールできないのを、どのようにしたら支えられるか、気になる事は確認されるのに、本当に辛い時にあまり頼ってもらうことができない中で、関係構築をどうしたらよいかなど、考えられたのは、もともと人を頼れる力があるという思いがあったからかもしれません。

発表を終えて　　斉藤　由子（社会福祉法人せたがや樫の木会 上町工房）

日々のでこぼこや大変さはもちろんまだありながらも、トータルで見てこれだけ順調に成長を感じられる事例というのはあまりない、貴重な“成功事例”といえるような発表です。A さんが辛そうなご様子の際の行為は、周囲への影響も大きく“課題”ではあったものの、元々、人を上手に頼ることができる、甘えてこられるという素直さ、強みがあり、それを活かす関わりを軸にしたことが良かったのだと思います。言葉での確認をしていくことは、一見“しつこさ”を引き出すようにも見えますが、だからと言って、言葉でのやりとりを安易に『おしまい』と切るのではなく、統一したぶれない答えを用意して、しっかりと腰を据えて向き合うことで、A さんの不安は解消され、こちらに安心感を持ってくれるようになりました。

ご本人への分かりやすい伝え方をすることが権利擁護の基本という助言者のコメントを頂き、そこを大切にしながら、また関係を大切にする関わり、共に成長していく実践を重ねたいと思います。

助言者コメント　　助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

当初「大変だなぁ」と思ったことが「本当に大変なのは本人なんだなぁ」とシフトしていく過程での丁寧な関わりをした報告だと思います。

工夫のなかでわかりやすいコミュニケーションをすることは障害者に対する権利擁護の第一歩です。

発達をめぐって育てる者と育てられる者の相互のやりとりで両者が変容していく過程が素敵な発表だったと思います。

仲間の場から外れがちなＡさんへの誘いかけ支援

－クローズアップ場面を通してＡさんが表した心情への気付き－

社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立下馬福祉工房
長見 亮太

（仲間づくり　自己表現　主体性の発揮）

１．はじめに

Ａさん（20代、男性、自閉症、愛の手帳２度）は気さくに来客などにあいさつし、人懐こさを感じさせる青年だが、人が多く集まる場所では少し参加しては離れたり、参加するものの段々と苛立ったりすることがある。仲間の中で気楽に過ごせるように誘いかけるものの、なかなか糸口をつかめないでいる中、少しずつＡさんの気持ちが伝わってくるようなやりとりが生まれてきた。Ａさんへの誘いかけ支援から生まれたエピソードを通して、「自閉症の方は集団参加が苦手」といった画一的な考えをせず、本人の心情を汲みながらのアプローチや場面作り、仲間関係を深めていく支援について考察する。

質疑応答

Ｑ：会話や支援の幅を広げるために、仲間との働きかけや肯定的視点の他に特に具体的に意識して接している部分があれば教えてください。

Ａ：一番困難に思えるところから解決しようとしても難しいのが実際のところです。
一度、違うところに視点を置いて、場面を作れるとよいと思っています。そこから楽しさを見つけたり、余裕が生まれたりして、いつの間にか困難に思えていたところが気にならなくなったという経過があるので、コミュニケーションの際、意識しています。

Ｑ：お一人おひとり違うと思いますが、コミュニケーションが図れるようになった場合の情報などを蓄積されているのか、また勉強会を実施したりしているのでしょうか。

Ａ：変化が数か月という単位で図れず、数年で少し変化が見られた、ということもあります。現実的にはその間に職員が入れ替わることもあり、やはりその方の過去を踏まえた経過は伝え続けていかなくてはと思っています。記録を読み返すとか、ケース会議の際に現在だけでなく、過去の姿も引き合いに出すことは意識しています。

発表を終えて

長見　亮太（社会福祉法人せたがや樫の木会
世田谷区立下馬福祉工房）

助言者から発表の内容について「利用者さんの株を上げる、ということはとても大事なこと」と講評を頂き、とても納得しやすい表現だと思いました。

毎年発表で参加していますが、今回は特に障害分野での発表と参加者がとても少なく、高齢分野、学生の取り組みなどと比べてもとても寂しく残念な思いがしました。コロナ禍での施設運営の難しさも一因だと思いますが、それだけではなく、障害分野の取り組みと発信力が衰退化している危機感を感じます。そのことが人材確保、育成に大きなブレーキとなっているようにも思います。自法人も含め、限られた法人の発表が多く、発表者はいつも同じということで参加者の興味が薄れているのでは、という思いも否めず、しかしながら私たちが発表を辞めてしまっては、障害分野は誰が参加するのか、という責任感もあります。

私たち現場の職員が率先して自施設での取り組みを多彩化し、地域に発信していくことが大事と思いますが、それだけではなく学会の運営や決定に参画する障害分野の方々には、この分野の啓発につながる、幅広い参加を積極的に呼びかけていただくことが必要ではないかと思います。

助言者コメント

助友　裕子（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）
佐藤　光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

やはり支援は、本人の株をどう上げるか、ということが大事だと思います。

長い関わりの中で本人の「とまどい」に寄り添いながら支援をしていった報告だと思います。「とまどい」は、本人から見れば「何か解決策を模索」している状態で、その模索に付き合い、色々な負荷を考え、様々な工夫をされていると思いました。

ワークショップ

ワークショップまとめ

進行・佐藤／皆さま、こんにちは。ワークショップの進行を務めます､昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 4 年 佐藤 貴緒です。よろしくお願いします。本日のワークショップは、学生理事 2 名、ワークショップ実行委員として駒澤大学、昭和女子大学、日本大学文理学部、東京都市大学、日本体育大学、東京農業大学、日本女子体育大学より 13 名が、参加されている皆さまと楽しく活発な意見交換が行われるようにグループワークを進めて参ります。

それでは、本日の全体会Ⅰで行われました、駒澤大学文学部 川上 富雄教授の基調講演「いのちとくらしを守る～地域防災と地域福祉の融合～」をふまえグループセッションを行わせていただきます。

グループセッションについてご説明いたします。グループセッションの司会・進行・まとめは、学生実行委員、学生理事が担当します。ワークショップのテーマ「みんなで守るいのちとくらし」について「日ごろ考えていること、取り組んでいること」「自分はどうありたいか」「地域の中で取り組みたいこと」などを各グループに分かれて楽しく話しあいたいと思います。

それでは、14 時 35 分まで 30 分間グループセッションを始めます。

～グループセッション～

佐藤／皆さま、30 分間のグループセッションありがとうございました。それでは、グループセッションのまとめに入らせていただきます。各グループ、2 分ほどでご報告お願いいたします。

佐藤／1 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 4 年 成嶋 セルジオ正章さんお願いします。

成嶋／私たちのグループでは普段取り組んでいることの共有を行いました。

私は静岡県御殿場市の出身で防災が盛んな地域で、小学生のころから予告なしの防災訓練や家庭内で防災計画を作り、近所とつながりのある地域であったことをお話しし、メンバーからは都内だと、近所の方や引っ越してきた方とのつながりが少ないことなど共有しました。また、近所のつながりは防災だけではなく防犯にもつながり、役立つという意見がでました。

これから自分たちができることとして、家庭内でどのような事が必要かを共有し、防災の準備、心の準備、物の準備、行動の準備をするという意見となりました。またペットを飼っている家庭もあり、ペットの防災については、ペットフードやペットシート等の備蓄も必要であると共有ができました。また、福祉施設の防災については、しっかり防災準備を行えているか、まれに防火扉の前に多くの荷物が積んであり、防災訓練の前だけ片づけていることがあると聞きます。私が就労支援系の施設に行った時、物が高く積まれてあり、職員さん 1 人に対して利用者さん 6 人位を対応されている状況の中で、何かあった時に対応できるのか、物が倒れてきたら避難経路がなくなるのではと思うことがありました。児童系の施設に行った学生からは、子ども達がパニックになった時などの対応はどの様になっているのかについて話がでました。今後、実習や見学などに行った時、話し合いの経験をみんなで共有し、防災につなげていこうということになりました。

佐藤／成嶋さんありがとうございました。

佐藤／2 グループ 東京農業大学国際農業開発学科 2 年 仲村 美咲さんお願いします。

仲村／地域とどの様につながり係わるかの話し合いの中で、大学では授業などを通して地域とつながることもあるが、自分が住んでいる地域の防災については、あまり理解できていないことに気づきました。自身の住んでいる地域の情報を得ることや訓練に参加するなど住民として考えていく必要があることを確認しました。つながりをつくるために、学校で防災について地域の方より講演をしてもらう、高齢になった時に自分から地域と係わりを持つことが必要であるという話になりました。また、小・中・高校生に伝える必要があるのではないかと意見になりました。

佐藤／仲村さんありがとうございました。

佐藤／3 グループ 東京都市大学人間科学部児童学科 1 年 笛木 優太さんお願いします。

笛木／防災についてどう伝えるか、何が一番大切かを話した中で、つながりが一番大切という意見が多く出ました。

対策としては、学生の力を使い情報発信を行う、学校の授業を通して行う、デイサービス等で行うなど自分たちが今いる状況の中で何ができるのかを常に考え、その場でどの様に伝えるかが大切ではないかという意見になりました。

情報を伝えるためには、今行っている活動やイベントなどに積極的に参加する。意識が高い人がまず動かないと、何も始まらないと思います。自分自身がまずは動いて活動し、つながりを大切にしながら伝えていく事が一番良いという意見にまとまりました。

佐藤／笛木さんありがとうございました。

佐藤／4 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 2 年 小澤 保菜美さんお願いします。

小澤／川上先生の講演を受けて、何が問題なのかその対策について考えました。

問題は、孤立の増加と防災訓練の参加率が少ないということにまとまりました。孤立の増加をなくすには、住民主体のサロン活動やお祭りなどを行い、難しい場合には、行政に関わってもらうという意見がでました。また挨拶を心がけて日頃から顔見知りを増やすことで、自助、共助、公助だけでなく、近所の方とも助け合うという話をしました。

防災訓練の参加率が少ないことへの対策としては、環境づくりが大事という意見がありました。学校から地域の方に発信し、学校と関わりながら、地域の方と一緒に防災訓練ができたら、参加率が高まるのではないかという意見となりました。

佐藤／小澤さんありがとうございました。

佐藤／5 グループ 東京都市大学人間科学部児童学科 4 年 吉田 ゆみさんお願いします。

吉田／基調講演を聞いた感想として支援計画を考える時に、ひとり 7,000 円かかるという話があり、お金で人を動かそうとすると地域に差が出て、その時点で問題が出てくる。お金ではなく、近隣の方と信頼関係という部分から行動ができる社会のしくみをつくることが一番大事ではないかという結論になりました。話の中で出た事は避難についてです。行政などから出ている避難

グッズ一覧などで準備することも大事ですが、例えば海辺に住んでいる方であれば津波の心配がある、斜面に近いところに住んでいると土砂崩れの心配、高台に住んでいると津波の心配はないが避難する時に交通手段がないなど、自分達の住んでいるところに潜んでいる災害や避難について、近隣の方と話し合うことなどが良いという意見がでました。
佐藤／吉田さんありがとうございました。

佐藤／6 グループ 東京都市大学人間科学部児童学科 1 年 蛭間 晃雅さんお願いします。

蛭間／一番大切にしたいことは、つながりと言う意見でまとまり、話を進めました。
つながりと言っても、社会で多様性を認める時代・尊重する時代だと思います。障害や性別の違いを尊重して動けるかはその状況にならないとわからないと思います。多様性を認めずに自分たちの命を第一優先に動くことがあるかもしれない。だからこそ、つながりが大切だと思います。日ごろから地域の方に挨拶をしたり、地域のゴミ拾いやお祭りなどに積極的に参加し、自分たちでつながりを広げ、助けたり助けてもらえる関係をつくることが大切ではないかという意見でまとまりました。
佐藤／蛭間さんありがとうございました。

佐藤／いずれのグループも、大変活発な交流が行われた様子が伝わってきました。ありがとうございました。ワークショップの振り返りとして、駒澤大学文学部　川上教授お願いいたします。

川上／皆さんのお話そのもの、私が講演で伝えたかったことは、地域のつながりが大切ということです。各グループでつながりが大切だと話され、また自分たちが地域づくりや意識の高い人が率先して住民を引っ張っていく、呼びかけて大きな動きを作っていく必要があるという報告も出ていました。私が伝えたい気持ちを良くくんでいただけたと思います。
防災訓練の話が出ていました。講演の中でも、お父さんの参加だけではなく、女性や子ども、お年寄りは訓練しなくて良いのかと話しました。防災訓練も、毎年決まった時期、曜日や時間に中学校のグラウンドで行いますという形で実施されています。静岡県の様に抜き打ちに訓練を行わないといけないと思ったりもします。また、ある自治体の防災訓練に参加した際、訓練日が大雨となり災害が起こりそうだから防災訓練が中止となりました。お年寄りが多く無理をさせたくないと運営の方たちの判断でした。中止ではなく、むしろやらなくてはいけないとも思います。外見的に行ったことにする訓練では、災害が来た時にどれだけ命を守ることにつながるのかと思います。訓練だけではな

く、個別避難計画や地区の防災計画などの冊子の作成も同じことが言えると思います。これでいいのかなぁと思いながら色々な所の防災活動に係わらせてもらっています。

1グループの報告で、地域のつながりは防災だけでなく、防犯にも役立つだろうと話されていました。講演のなかで、福祉にも防災にも役立つと伝えましたが、ほかにも色々なことに地域のつながりは役立ってくると思います。孤立死や孤独死の減少などにも役立ってくると思います。この地域のつながりをどうやって取り戻すのか、回復させるのかということを皆さん一生懸命に考えてくれました。これからも自分に出来ることは何かを考えながら取り組んでもらえたらと思います。

佐藤／川上教授、ありがとうございました。
ワークショップの締めくくりとして、せたがや福祉区民学会 長谷川 幹会長より、一言お願いいたします。

長谷川／一人ひとりの意見やグループの意見をよくまとめてくれたという印象です。皆さんは集中力があり、普段考えていることが色濃く出ていたと感じました。どう実行するか、一歩をどう踏み出すかなんですよね。私は、障害をお持ちの方と色々な形で関わることが多くあり、一歩を踏み出す時に、できるかなぁ、周りは何を思うかなぁと悩むんですね。

その中でもキーワードは「挨拶」でした。挨拶ってちょっとしたことですが、私もですが全然知らない人に挨拶をするって勇気いりますね。小さいこととしては挨拶かと思いました。実行していく先々には防災など色々とあると思いますが、日ごろの小さいことの行動を半歩・一歩をどう踏み出すかについて、これからもお互い考えていければと思います。とても有意義な会をありがとうございました。

佐藤／長谷川会長、ありがとうございました。
本日のワークショップでは、ご参加の皆さまに協力をいただき楽しく交流することができました。ありがとうございました。おかげをもちまして、ワークショップを無事、実施できました。心から感謝申し上げます。

全体会Ⅱ

大会総括

司会／せたがや福祉区民学会第 14 回大会実行委員長
長尾　譲治（駒澤大学文学部社会学科）

司会／ご参加いただきました皆様、発表者、進行役･助言者の皆様、また、学生実行委員、学生ボランティア、スタッフの皆様、お疲れさまです。実行委員長の長尾です。

コロナ禍で 3 年ぶりに対面で大学での開催となりましたが、皆様のお力添えにより無事、開催できましたことをお礼申し上げます。本日は、およそ 350 人の方にご参加いただきました。コロナウイルス第 8 波の中で、皆さんにご来場いただきましたことを改めてお礼申し上げます。本日の大会には、学生ボランティアをはじめ、多くの方に協力をいただきました。おかげをもちまして、この大会を無事に開催することができました。心から感謝申し上げます。本日は、基調講演に続き、42 本の口頭発表、4 本のポスター発表、学生によるワークショップが行われました。また、区内障害者施設の手作り品の販売が行われました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの様々な会場の様子について、皆様からのご感想をお聞きしたいと思います。

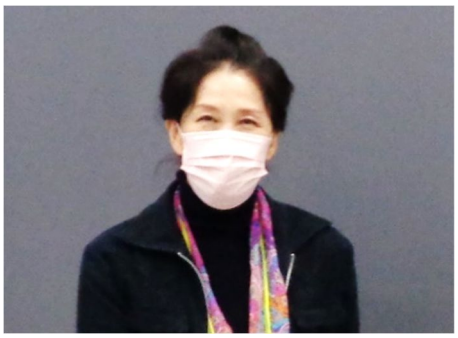
まず、口頭発表をされた方より、発表をされてのご感想をお願いできればと思います。それでは、第 6 分科会で発表いただいた、RISSHOKID'S きらり代沢の浜川様、お願いします。

浜川／本日はありがとうございました。私は子どもと保護者の支援や保育の援助について発表をしました。これまでの自分の保育を振り返るいい機会になりました。子どもの保育環境や保護者への援助の実践を発表した際に、助言者より環境や援助ができるのは保育者同士のコミュニケーションも大事だという話をいただきました。改めて保育者同士の連携やコミュニケーションに目を向けていけたらと思いました。本日はありがとうございました。

司会／もう一方、一般社団法人輝水会の手塚様、ご感想をお願いします。

手塚／本日はありがとうございました。3 年ぶりの対面での開催で、皆さんの前で発表する

緊張感を改めて感じました。私たちは福祉人材育成・研修センターに協力する形で、夏休みに小・中・高校生に対して、福祉教育の Zoom 開催に対して、どのような感想を持ったかを発表しました。



もちろん、小･中･高校生の頃から、そして今日は、たくさんの大学生ボランティアの方が参加しています。小さなころから、世田谷区では、このように福祉に対して、興味を持ったり関わりを持つことができる、素晴らしい区だと、改めて感じました。ありがとうございました。

司会／ポスター発表は、本日、ロビーで行いました。大変、ありがとうございました。口頭発表、ポスター発表の進行役･助言者、14 名の方々にご協力いただきました。進行役･助言者の方からも一言ご感想をいただきたいと思います。代表して、大熊先生に、感想をお願いします。

大熊／本当は、相棒の荒井先生が素晴らしかったので、話していただいたほうがいいのですが、ご指名いただきましたので発言いたします。まずは学生ボランティアが素晴らしくて、この建物に入ったときから、82 歳のおばあさんだからか、とても親切にしてくださり、感動しました。この学会には学生理事がいるのも、他の学会にない素晴らしさ、これは長谷川先生のご発案だと思います。

始まりの防災の話、私は医療と福祉をやってきたのですが、防災から絆が生まれるというとても大きな学びをいただきました。私が司会をした第 4 分科会は、いずれも温かい気持ちで行っている実践を報告にまとめられ、素晴らしいものでした。長谷川先生とも、今年の水準はすごいよねと話していました。後ほど、ご本人からもお話があると思います。

内容も深く、よくある学会での「それで、どうなの？」ではなく、本当に世田谷区民に役立つ発表ばかりでした。下馬に住んでいる私にとっても、非常に安心した学会でした。ありがとうございました。

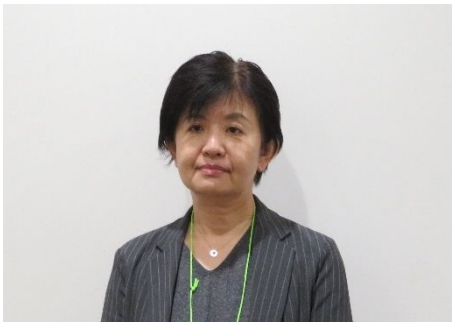
司会／ありがとうございました。続いて、進行役･助言者としてご協力いただきました諏訪先生、お願いします。

諏訪／日本大学の諏訪です。私の分科会は、最初に学生の発表があり、その後、ケアの専門

職の発表が続きました。どの発表も非常に素晴らしいものでした。例えば、アロマセラピーでBPSDが改善するなど、そんなの知らなかったといった発見もありました。非常に丁寧にケアをされている小規模多機能ホームの報告もありました。何より、ごちゃまぜの福祉区民学会。学生、専門職、区民の発表もあり、こんなに珍しい学会は他にないと思います。

この空気を3年ぶりに吸えて大変、元気になりました。それが何よりうれしく、幸せな気持ちになりました。私の大学のことになりますが、せたがや福祉区民学会のボランティアで関わってきたOBの子たちも、今日、来てくれました。私の大学だけでなく、この福祉区民学会には学生を育ててもらう、とてもいい機会になっていることも改めて感謝です。また、コロナが収まらない中、対面でやることで、開催校の駒澤大学にもご苦労があったと思います。何より、事務局もたくさんの配慮をされながら、行われたと思います。幸せな場を3年ぶりに復活していただき、ありがとうございました。

司会／諏訪先生、ありがとうございました。では、ポスター発表での進行役･助言者をされた、世田谷区高齢福祉部長の山戸様、お願いします。



山戸／本日はありがとうございました。私は、今回、はじめて学会に参加しました。学生ボランティアの皆さんが丁寧な仕事をしていて、日頃、若い世代の方たちに、もっと福祉のことを広めなさいと言われていますが、心強い思いをしました。ポスター発表では、4つの発表がありました。それぞれ現場の活動の中で、コロナ禍で陽性者にどのようにサービスを行うか、臨場感のあるものだったり、実際に家族を介護している方が、それぞれの癒やしの場を助け合いながら、長い間、介護保険制度前から実施していること。「歩く」をコンセプトにしたリハビリ。もう1つ、障害者支援の名のもとに行われるリハビリで、その方の生活をまるごと支援している発表がありました。リハビリという言葉だけでは表現できないような、目からうろこが落ちたような発表を見ました。コロナ禍でいろいろあると思いますが、こうした素敵な場が来年も開催されると、高齢福祉部長としてもありがたいです。本日はありがとうございました。

司会／本日、いろいろな分科会で、先生方のお話にありましたように、子ども、障害者、高齢分野、川上先生の講演にもありました地域防災分野。様々な実践発表がありました。私もいろいろな分科会を拝見して、いろいろな取り組みが興味深く感じました。

今回のテーマ、「心（ハート）でつなぐ　未来につなぐ」で、学生の皆様方も、いろいろな感想を持たれたと思います。ここで、今回、参加した学生を代表して、ひと言ご感想をいただきたいと思います。

日本女子体育大学の古屋敷様にご感想をいただきたいと思います。

古屋敷／今回、初めて学会に参加しました。

学会というと、研究者のためのものというイメージがあって、敷居が高いイメージでしたが、こちらの学会は、研究者から専門職、地域の方まで開かれた、いい学会だと思っています。そこで得た知識や研究成果を共有したり、そこで繋がったご縁を大事にしていきたいと思います。

また、基調講演で川上先生から、防災と福祉の連携ではなくて融合だという話が印象的でした。私自身、岩手県久慈市の出身で、東日本大震災を経験しましたが、そのときは小学生で、自分の身を守るので精一杯でした。今、この立場になって、非常事態でも冷静に、余裕を持って行動するためには、日頃の行いや、防災に対する意識や地域とのつながりを意識した行動を、自分の中でも意識していかなければならないと思いました。今回、学会に参加できて、とてもよかったです。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。「素晴らしい」と会長もうなずいていました。ご自分の経験とか、まさに未来につなぐということで、ぜひ今後に生かしていただければと思います。

学生ワークショップを今年度も開催しました。川上先生の基調講演を踏まえて、「みんなで守る いのちとくらし」として、26 名の学生や大人の皆さんが参加され、活発な意見交換が行われました。

進行を務めた学生理事、学生実行委員の皆様、教壇に上がっていただき、ワークショップの報告、感想を頂戴したく思います。

学生理事、学生実行委員の皆様、お願いします。

成嶋／学生理事の日本大学文理学部社会福祉学科 4 年の成嶋 セルジオ正章です。今年で 2 年目の学生理事を務めました。私は大学で福祉を学び始めるまで、あまり福祉は好きではなかったというか。僕の地元では、型にはまった支援をするところが多く散見されたので、福祉はなんじゃいと思い、4 年間福祉について学ぼうと日大に入りました。3 年、4 年と理事

として学会に関わり、多くの方が、特に世田谷区は先進的な福祉を行っており、その人に合わせた支援をしていると学ぶことができ、この 2 年間で、今まで思っていた福祉とは 180 度変わるような体験ができました。僕は 1 年生の時、ボランティアで参加して、3 年ぶりのリアルでの学会で、多くの学生と関われ、多くの福祉に関わる方の事例を聞けて、有意義な時間だったと思います。
ここまで運営をされた事務局の方々をはじめ、事例の準備をしてきた皆さんに、心から感謝します。ありがとうございました。

佐藤／昭和女子大学 4 年の佐藤です。昨年より、理事を務めています。本日の感想です。この場を貸してくださった駒澤大学さん、発表を準備した発表者の皆様、参加してくださった皆様、運営に携わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。私は、今回の学会のテーマであるつながりに関して、ワークショップに参加させていただいたり、空いた時間に学生同士で話したり。一つひとつの経験から、まさにつながりを体現する時間だったと感じました。また、人とのつながりだけでなく、こうした経験一つひとつもつなげていけるものだと感じています。本日いただいたこの経験をこの先の学びにつなげて、社会に貢献できるようにしていきたいと思います。今後とも、よろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

石川／東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科 3 年の石川 歩佳です。農業大学なので、福祉に関する知識もあまりないので、この学会に参加して、福祉について学べ、福祉についての価値観を変えることができて、良かったです。また、普段関わらないようなたくさんの大学の学生と交流する中で、いろいろな視点からの意見を聞くことが出来たのも、貴重な経験だと思います。東京農業大学は、来年度の学会開催校になるので、今年の学会のような素晴らしいものにできるように、大学に帰ったら今日学んだことを共有していきたいと思います。今日はありがとうございました。

渕上／東京都市大学人間科学部児童学科 4 年の渕上 凛花です。本日は貴重な経験をさせていただきました。4 月から世田谷区ではありませんが、幼稚園の教員になることが決まっています。本日学ばせていただいた、本日のテーマ、「未来につなぐ」について幼稚園児や地域の方に今日の学びを伝えていきながら、「未来につなぐ」というテーマに沿って自分の中で出来ていくようにしていきたいと思います。本日はありがとうございました。

仲村／東京農業大学 2 年の仲村 美咲です。今回は地域とのつながりの重要性について、ワークショップでたくさん意見交換を行いました。各大学が地域で取り組む活動を共有できて、良かったです。私は農業分野で学んでいますが、福祉や教育といった他分野で学ぶ学生と交流や意見交換ができたことが、すごく良かったです。本日はありがとうございました。

苗木／東京都市大学 1 年の笛木です。今回参加して、自分たちの持っている知識を共有できたと同時に、自分の知識を蓄えてすごく成長できたと自分でも思っています。今回参加して、自分の最後の務めとして、今日、学んだことを、今日、参加していない近隣住民など、情報を知らない方に共有するまでが、自分の務めだと思います。ここにいる皆さんもそうだと思いますが、今日得た知識を他の人に伝えていくことを、頑張りましょう。

久保／日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学専攻の久保 涼夏です。昨年も学会に参加し、昨年は Zoom でのオンライン開催で、今年は初めて対面で行い、こんなにも白熱した話し合いができて、とても楽しいというのが率直な感想です。私は大学生なので、地域包括という点を考えたときに、大学と地域が関われば、もっと地域が活性化すると考えさせられた日でした。私ごとになりますが、来年度からは新社会人として、また新たな視点で、自分の中で何ができるかを模索しながら、地域貢献につなげていきたいと思います。ありがとうございました。

橋爪／駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻 3 年の橋爪です。ご覧のとおり、唯一私服です。時代が違えば、打ち首だとか切腹で殺されるのではと思います。以前、「福祉は人である」と教えられました。別のところでは、「人に歴史有り」と耳にします。福祉とは、人であり歴史であると感じています。今回、ワークショップでは、人とのつながり、防災について、それぞれ経験してきた歴史を交流しあい、別のブースでは口頭発表、ポスター発表で、福祉の先輩方がこれまで積み上げてきた現時点での集大成を交流し合う場になったと思います。第 14 回区民学会が第 15 回へとつながるように、今後の福祉の歴史の礎の一端になったこの学会に参加させていただき、本当にありがとうございました。

小澤／日本大学文理学部社会福祉学科 2 年の小澤 保菜美です。本日は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。私は、昨年のワークショップに参加しました。今年、ちゃんと務められるか不安だったのですが、他の実行委員と仲良くなったり、いろんな方と話せて楽しかったです。今回の学会で、学校内だけでなく、外の方とつながって、学んでいくことがすごく大事だと気づいたので、今後、実行できるようにしていきたいと思います。ありがとうございました。

原田／日本体育大学体育学部健康学科 3 年の原田 豊望佳です。今回ワークショップに初めて参加し、貴重な経験ができました。今回「はじめまして」で会う方々と意見交換できて、改めて今の社会には何が必要かを実感しました。今回、このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

山地／日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科の山地 里奈です。今回は初めての参加です。福祉について学ぶ機会がなかったので、今回の実行委員も何をやったらいいのかと思っていました。福祉について、私の知らないところで、福祉のことを考えている方が、こんなにも多いのだと知ることができました。その場に立ち会えたことで、いい経験ができたと思います。そして、私は教職を目指していますが、川上先生の話を聞いて、教育と福祉をつなげられる教員になりたいと目標ができて、良かったと思います。第 15 回もできたら、参加したいと思います。ありがとうございました。

吉田／東京都市大学人間科学部児童学科 4 年の吉田 ゆみです。本日のワークショップの経験から、コロナ禍で他の大学の方と関わったり話したり、意見交換する機会があまりなかったのですが、いろんな方の考えや視点を、今日、間近で体感できて新鮮な体験ができました。私ごとになりますが、来年の 4 月から世田谷区の福祉職員として働くことになっています。この経験を生かして、私自身が世田谷区の住民や職員同士をつなげられる人になりたいと考えました。本日は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

浅井／本日はありがとうございました。日本体育大学体育学部健康学科の 3 年、浅井 舞香です。ワークショップに参加して、普段、大学では違うことを学んでいる方や実際に福祉の現場で働く方々と意見交換やディスカッションをする中で、いろんな角度から問題を捉えることができて、とても深い理解につながったと思います。今回のテーマ「つながり」で、横のつながりを大切にしていこうという話がありましたが、とてもいい関係を作っていく機会になったと思います。本日はありがとうございました。

後藤／本日は、貴重な機会に参加させていただき、ありがとうございました。昭和女子大学3 年の後藤 郁泉です。率直な感想としては、自分の意見や質問がこんなにも優しく、ちゃんと向き合ってくれる方がいるんだということが、すごく楽しい、と言うことが率直な意見です。社会を見ても福祉に携わったり、社会問題を語っている人、携わっている人に対して、いい人という印象、意識高い系というイメージがあるのが現状です。その中で、今回、生き生きと自分の意見や、やってきたことを発表している方々を見て、この様な事が当たり前になればもっとみんなが過ごしやすく、一人ひとりが個性を持てるのだと実感しました。現状に対して、うまく言葉では言えませんが、不満を嘆くのではなく、そういう人に対して、どうしたらその人の心を動かせるかなどを、もっと考えながら楽しく生きたい。大げさなのですが、そう思いました。本日は、本当にありがとうございました。

蛭間／東京都市大学人間科学部児童学科 1 年の蛭間 晃雅です。本日は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。ワークショップのような 1 つのテーマについて、いろんな年齢層の人と話し合ったり、突き詰めることを、あまりしてきませんでした。自分と異なった視点の意見をたくさんもらえて、知識を吸収しつつ、自分の意見もしっかり言えたので、とても楽しく、かつ貴重な経験ができました。その知識を生かしながら、今後の進路や学業に生かしたいと思います。本日はありがとうございました。

司会／ありがとうございました。それでは、学生理事･実行委員の皆様、ありがとうございました。では、ワークショップの助言者をされた、川上先生から感想をお願いします。

川上／皆さん、お疲れさまでした。学生の皆さんの発表を聞いていて、僕が学生時代にあれだけものを見ずに、考えていることを、こんなに多くの人たちの前で壇上から伝えられただろうかと思って聞いていました。年を取ってくると、「今の若けえもんは」と思いがちですが、若い人、捨てたもんじゃないな、すごいなと思いました。その感覚は、ワークショップの助言者として同席して、皆さんの話を聞く中でも感じました。私の講演時間が 35 分しかなかったので、私の中では意を尽くさない、不全感があり、魂に訴えられているのか、伝わっているのかと思っていました。ワークショップで皆さんの話を聞いていると、私が語った 1 以上、10 や 100 くらいのことを議論している。地域のつながりをしっかりとしておけば、防災にも役立つと、僕は話しました。ワークショップでは、地域のつながりがしっかりしていれば、防災だけじゃなくて、防犯にも役立つ、と議論していました。こちらが「はっ」とさせられる気づきを持ちながら聞いてくれたのだと、感動しました。ぜひ、若い人たちが地域に入っていって、地域活動の担い手の中軸になってもらえたらありがたいと思います。

おそらく、もう 5 年、10 年で地域を担っている、プライム世代と言われる団塊の世代の

方たちが、体力的、年齢的に活動できなくなって、リタイアしていくと思われます。次の世代の担い手が育っていない課題もあります。皆さんのように問題意識を強く持ち、地域のつながりが大切で、自分たちに何ができるかを考えてくださる方々がぜひお住まいの地元の地域で、町内会に入るところからでも、自主防災組織、消防団でもいいです。地区社協の活動でも、ぜひ、何かしらで関わって担っていただければ、大きく変わっていく期待が持てます。学生さん、お疲れさまでした。素晴らしいと感動しました。私の助言･コメントは以上となります。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。今、お話しいただきましたように学生実行委員の皆様のそれぞれのつながりも、心に響きました。先ほど、指名させていただいた古屋敷様も学会のテーマに沿って、いろいろ感じられていたことに、大変感銘を受けました。今回、学生実行委員以外にも、学生ボランティアとして、非常に多数の方に学会の運営に携わっていただきました。学生ボランティアの皆様に感謝を込めまして、恐縮ですが、その場でご起立いただけますでしょうか。様々な会場設営、それから各分科会での進行に関することなどですね。各大学の、学生ボランティアの代表の方、こちらに来ていただき、一言いただければと思います。よろしくお願いいたします。

トウ／私は日本大学文理学部 4 年のトウ ギョクショウです。中国の留学生です。1 年のときに、区民学会のボランティアに参加していました。コロナで 2 年間、日本に戻れなかったので、区民学会と同じで 3 年ぶりに参加しました。今日はカメラマンの仕事をして、みんなの笑顔を見て写真を撮り、緊張するコロナ時代が終わったと感じました。しかし正常の生活に戻ってきましたが、この世の中に様々な社会問題があります。これからも人々が幸せに生活できる社会を目標として頑張ります。

松村／本日、せたがや福祉区民学会に参加した駒澤大学文学部社会学科社会福祉専攻 3 年の松村 侑馬です。同じ大学の橋爪くんのコメントが秀逸すぎて、とてもプレッシャーに感じています。ここで発表することが決まり、内容をメモしましたが、置いてきたので飛ぶか

もしれませんが、ご了承ください。本日、参加し大きく 2 つのことを経験しました。

1 つ目に他大学の方と交流し、多くのことを学べました。同じボランティア担当の方と話す機会があり、その方とのつながりで、日本体育大学の 3 人と学食で一緒に食べました。学食の丸亀やパン屋さんなど、メニューの多さを誉めてくれました。他の大学のメニューがどんなかと話をして、自分の大学は、改めて食の多さを感じることができて、楽しかったです。

2 つ目に、各分科会に参加して、自分の研究活動に多く刺激を受けました。自分は 3 年生で、これからゼミで研究活動を行うので参考になりました。物事を捉える視点、考え方や調査方法があるという所です。特に印象的だったのは、マッチングアプリの発表です。この 2 つを経験できたのは、すごく良かったと思います。本日は、ありがとうございました。

植松／東京都市大学人間科学部児童学科 3 年の植松 祐香です。本日のワークショップに参加する形で、ボランティアをさせていただきました。災害の準備に対する各自の意見を交換したり、地域のつながりの大切さを話し合いの中で理解できたとともに、防災への考えを深めることができました。私自身、将来、保育の現場に立つ身として、1 人で複数の子どもをどのように円滑に避難させるかということや、実習が 5 回中 3 回終わって、次が 4 回目です。そのときに、子どもの生活や保育者の子どもへの対応は見ていますが、防犯対策がどのようになっているか、防火扉の前に物が置かれてないかを、意識して見たことがなかったことをワークショップの中で気付くことが出来ました。今後の実習で、そういう面も見ることができたらいいなと思いました。また、自分たちの身を守るための考えを深めることができたと、今回参加して思いました。ありがとうございました。

太田／日本体育大学体育学部体育学科 3 年の太田 壮亮です。若造の話にお付き合いください。日本体育大学の学生は体育のことも学びますが、健康学科もあって、福祉のことを学ぶ機会も多くあります。先日、オリンピックがありました。本日のテーマ、人とのつながりという面で、オリンピックにボランティアとして、多くの日体大生が参加していました。今日の発表でも、人とのつながりが大事だと感じました。形は違えども、オリンピックの現場でも福祉の現場でも、人とのつながりを大切にしなければいけないと感じました。さっき話題にも挙がったマッチングアプリも、一種の人とのつながりの面で、新しい形として、違う視点から見ることができると思いました。もう 1 つ、私が感じたことがあります。言葉の言い方の違いです。今日、分科会に参加して、「終末期ケア」という言葉がありました。終末期ケアを、利用者の方々に「終末期ケアだよ」というと、ちょっと違うと感じていた部分があります。分科会担当の先生のお話で、「人生最終章」という言葉が出てきました。終末期ケアというより、人生最終章と言われる方が、人生の最後の部分なので、最後まで楽しくとい

う方が、言葉1つで考え方が変わると思いました。また、私たち大学生もこれからたくさんの人とつながり、言葉を交わす機会があります。言葉の一つひとつを大切にして、これから就活もありますが、頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

清田／東京農業大学2年の清田です。今回、私はせたがや福祉区民学会に初めて参加しました。また、こういう学会も去年はコロナ禍で参加する機会を失ったので、学会というもの自体が初めてでしたが、学生ボランティアという形で参加して、どのような形で学会が行われているのかも知ることが出来ました。また、ボランティアが終わったあとに、少し時間が空いたので、いろいろな発表を見ました。どれも興味深いものが多く、ボランティアとしてではなく、参加者として様々な発表を、もっと長い時間、見たいと思いました。来年は、僕の所属している東京農業大学で開催されますので、学生ボランティアではなく、実行委員として携われればいいと思いました。本日はありがとうございました。

中川／日本女子体育大学の中川です。本日は、手話をしてくださる方やリアルタイムで字幕を打つ方がいて、さすが福祉学会だなというところから始まりました。その後、ワークショップに参加しましたが、違う大学や違う分野の方とお話ができて、とても新鮮な気持ちで学べました。口頭発表では、薬剤師や大学2年生の実践報告、訪問介護の方の高齢者への向き合い方など、多方面による地域との関わりについて学べました。私自身、中学生と地域社会との関わりについて研究しています。今後の研究に生かせるものが多く、参加してよかったと思いました。改めて学校の中だけでなく、学校の外で学ぶことの大切さを感じました。本日はありがとうございました。

司会／皆さん、ありがとうございました。本日、ボランティアとしてご参加いただき、誠にありがとうございました。改めてお礼申し上げます。大学での開催ということで、若い皆様のエネルギーを強く感じました。
また、未来につながるという点でも、改めて強く感じるところがありました。ありがとうございました。最後に、長谷川 幹会長から、本日の感想をいただければと思います。
長谷川／皆様、お疲れさまでした。学生の皆さんの発表を聞いて、逆に私がドキドキしながら、メモを見ざるを得ない状況です。「心（ハート）でつなぐ 未来につなぐ」ことを体現したと思いました。実感として、テーマがまさしく会場に広がっていると思いました。感想として、川上先生の講演に関して、僕も医療や福祉系のボランティア活動も非常にたくさんやってきましたが新しい発見でした。福祉が平時で、防災が災害時。その対比から、どう連携から融合へ、融合をどうするかということを受けて、ワークショップに僕も出て、学生さんと話し

ました。大学の違いはあるけれども、僕と友人関係のような雰囲気で議論がなされました。今日の最後に壇上での話を聞いて、今までいろいろな活動をちょっとずつ積み重ねていたんだ。あれだけフラットな壁のない関係を、横のつながりをやっているのは、すごいと思いました。今日の最後のお話にも感性豊かなものがありましたので、納得したしだいです。川上先生と同じように、僕も 20 代の頃、急に人前で話してくれと言われて、しどろもどろだったのを覚えています。あれだけの立派な発表をされたので未来は明るいと思いました。

ワークショップの中で、もう 1 つ。ボランティア活動をしているとハードルが低くなっていく。福祉は、どちらかというと、いい人でいなきゃ、という雰囲気があると思いますが、いい人でなくてもいい、と。そこに到達したというのが、非常に感動的でした。そういう感性をお持ちの皆さんなので、将来がいいなと思いました。14 年間、学会が行われる中で、非常に充実して、発表の一つひとつに学ぶことが多く、全部聞きたいと、思いました。今後、福祉の人たちと医療関係者、僕はあえて言えば医療の立場ですが、どの様に融合していくかが大きなテーマとなり、子ども世代とどうするかというのもあります。ヨーロッパでは子どものころから、取り組まれている。日本は福祉に取り組むのは大人になってから。でも、子どもの頃のことはよく覚えているので、子どものころから福祉に接する機会が多くあると良いと思います。世田谷区で今後、この学会を軸にしながら、子ども世代とどうお付き合いしていくか。それから、ここを軸にして医療職とどう付き合うか。今日の言葉では、融合していくことが、大きな課題だと思います。僕がイメージしたのは、高校生や大学生の学生さん、そして医療職、福祉職も出て、そして区民が出ているようなシンポジウムができないかという夢を抱きました。そういうものが形になればいいなと。それこそ世代、立場も融合できればいいと思います。僕も非常に大きな学びを得て、感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

司会／長谷川会長、ありがとうございました。学生の皆さんのワークショップもそうですが、いずれの会場でも大変、活発に交流が行われていた様子を私も拝見しました。今回の大会の成果を皆様の今後の実践活動、ひいては、未来につなげていければと考えています。

では、次回、第 15 回大会は東京農業大学にて、令和 5 年 11 月 11 日に開催が予定されています。次回開催校を代表いたしまして、東京農業大学の杉原 たまえ先生にご挨拶をお願いします。

杉原／東京農業大学の杉原です。こんにちは。本日は入試業務のため、私は本大会に参加できず、4 時半すぎに参りました。今、振り返りの会に参加して、本当に充実した、素晴らしい学びが共有できるという感想を持ちました。第 14 回大会は、コロナ禍にも関わらず、約 350 名の参加があったということで、まずもってスムーズな運営をされた駒澤大学様、事務

局、大会運営委員会、学生理事さん、ボランティアの皆さんのお陰だと感じています。来年ですが、私ども東京農業大学で開催校として開催させていただきます。先ほど、学生から話がありましたが、私どもの大学は 6 学部 23 学科がありますが、どの学部・学科、研究室にも 1 つも福祉を冠しているものはありません。ただ、農業を軸に「食と農」生きることを追求して福祉と親和性が高い学びをしています。ただ、私どもは、第 11 回大会、2019 年から会員となりました。会員としては若造であり、右も左も分からない状態です。そこで皆様方のご支援をいただきながら、本日、第 14 回大会の成果を引き継ぎながら、あと 1 年かけて取り組んでまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

東京農業大学世田谷キャンパスの最寄り駅は経堂で、世田谷通り沿いバス停、農大前です。ちょっと交通の便の悪いところですが、来年 11 月 11 日にお運びいただければと存じます。どうぞ、よろしくお願いします。

司会／杉原先生、ありがとうございました。東京農業大学も、「つなぐ」というテーマでしたが、福祉分野だけでなく、農業も非常に大切な社会資源となっています。農福連携は、各地で実践研究が進んでいて、私も興味がある分野です。東京農業大学とも福祉で連携できればいいと思います。

次回、第 15 回大会の詳細が決まり次第、学会のホームページでお知らせをさせていただきます。皆様、お誘い合わせのうえ、ご参加ください。

今回は、コロナ第 8 波でもありますので、残念ながら、懇親会を設けることはできませんでした。無事にこの対面形式、集合形式で開催できたことを改めて、お礼申し上げます。

以上をもちまして、第 14 回大会を閉会とさせていただきます。皆様、ありがとうございました。

大会プラス

- KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展
- 区内障害者施設手作り品販売
- 第１４回大会実績

KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展

せたがや福祉区民学会会場ロビーで、「KAiGO PRiDE@SETAGAYA」の写真を展示しました。
22 人 17 枚の写真とメッセージから介護の仕事の〝誇り・やりがい”を発信しました。

区内障害者施設手作り品販売

区内４ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

第１４回大会実績

参加者数３４４人

内訳）来場者　２５３人

当日スタッフ、理事等役員９１人（うち学生ボランティア３２人）

分科会参加者（各発表終了時の人数：単位　人）

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
ポスター発表	２４（コアタイム時　延べ人数）						
第１分科会	32	26	14	24	22	33	14
第２分科会	33	41	18	16	13	26	17
第３分科会	11	17	27	24	17	21	6
第４分科会	27	25	18	14	14	30	16
第５分科会	19	18	34	23	37	38	22
第６分科会	14	12	14	23	17	14	18
ワークショップ	26（延べ人数）						

その他

＊手話通訳及びパソコン文字通訳をお願いしました。

＊会員大学（昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学、東京農業大学、日本女子体育大学）の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影等の大会運営にご協力いただきました。

学会名簿

- せたがや福祉区民学会役員名簿
- 第１４回大会実行委員名簿
- 会員名簿

せたがや福祉区民学会役員名簿

【順不同】

役職	氏　　名	所　属／職　名
会長	長谷川　幹	世田谷公園前クリニック名誉院長
副会長	園田　巌	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
理事	神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
理事	川﨑　愛	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
理事	長尾　譲治	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教授
理事	諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
理事	助友　裕子	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
理事	大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
理事	佐藤　貴緒	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	成嶋　セルジオ正章	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
理事	手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
理事	樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
理事	徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	中原　ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
理事	田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
理事	山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
理事	長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	瓜生　律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	太田　一郎	世田谷区会計管理者
監事	牧野　まゆみ	ＮＨＫ学園高等学校教諭

第７期（令和３年４月１日～令和５年３月 31 日）

第１４回大会実行委員名簿

【順不同】

			氏　　名	所　属／職　名
◆	◎	委員長	長尾　譲治	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教授
◆		副委員長	川上　富雄	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◆			佐藤　光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◆			荒井　浩道	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◆			髙橋　三江子	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻助手
◆			村上　乃梨子	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻助手
	◎		長谷川　幹	世田谷公園前クリニック名誉院長
	◎		園田　巖	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
	◎		神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
	◎		川﨑　愛	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
	◎		諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
	◎		横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
	◎		杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
	◎		助友　裕子	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
	◎		大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
	◎		田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
	◎		佐藤　貴緒	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
	◎		成嶋　セルジオ正章	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
	◎		手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
	◎		樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
	◎		徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
	◎		中原　ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
	◎		田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
	◎		山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
	◎		長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
	◎		板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
	◎		瓜生　律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
			栗原　慎次	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係

◆印＝開催校委員　　◎印＝学会理事

事務局	世田谷区福祉人材育成・研修センター

会員名簿

	団体名
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部児童学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	東京農業大学
8	日本女子体育大学
9	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
10	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立駒沢生活実習所
11	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
12	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立九品仏生活実習所
13	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立烏山福祉作業所
14	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　福祉事業部
15	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　市民活動推進部
16	社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房
17	社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房
18	社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房
19	社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園
20	社会福祉法人康和会　久我山園
21	社会福祉法人大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所
22	社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷
23	社会福祉法人大三島育徳会　ホームいろえんぴつ
24	社会福祉法人大三島育徳会　二子玉川地域包括支援センター
25	社会福祉法人友愛十字会　砧ホーム
26	社会福祉法人友愛十字会　友愛デイサービスセンター
27	医療法人社団慈泉会　介護老人保健施設　うなね杏霞苑
28	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　おおらか学園
29	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園
30	社会福祉法人嬉泉　宇奈根なごやか園
31	社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園
32	砧地域ご近所フォーラム2023実行委員会
33	世田谷区
34	社会福祉法人　世田谷区社会福祉協議会
35	社会福祉法人　福音寮
36	学校法人大東学園　世田谷福祉専門学校
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（特養）
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（特養）
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（短期入所）
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（短期入所）
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　寿満ホームかみきたざわ
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム弦巻
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム太子堂
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム上北沢

	団体名
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷一丁目介護保険サービス
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢介護保険サービス
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花介護保険サービス
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂介護保険サービス
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上町地域包括支援センター
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢地域包括支援センター
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上祖師谷地域包括支援センター
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　松原地域包括支援センター
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　烏山ホームヘルプサービス
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションけやき
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション北沢
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション芦花
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう
64	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
65	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　パルメゾン上北沢
66	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　総務課
67	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
68	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
69	社会福祉法人正吉福祉会　きたざわ苑
70	世田谷区老人問題研究会
71	世田谷区介護サービスネットワーク
72	社会福祉法人奉優会　等々力の家　居宅介護支援事業所
73	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム　等々力の家
74	社会福祉法人奉優会　通所介護　等々力の家デイホーム
75	社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
76	社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター
77	社会福祉法人奉優会　デイホーム野沢
78	社会福祉法人奉優会　等々力の家　訪問介護ステーション
79	社会福祉法人奉優会　奥沢居宅介護支援事業所
80	社会福祉法人奉優会　喜多見居宅介護支援事業所
81	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　特別養護老人ホーム フレンズホーム
82	社会福祉法人古木会　特別養護老人ホーム　成城アルテンハイム
83	社会福祉法人敬心福祉会　特別養護老人ホーム　千歳敬心苑
84	有限会社　ケアステーションたね
85	在宅介護家族会　かたよせ会
86	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻
87	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿
88	社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
89	老人給食協力会ふきのとう
90	セントケアリフォーム等々力
91	一般社団法人　子ども・若者応援団
92	特定非営利活動法人　若者の自立支援すみれブーケ
93	グループホーム成城さくらそう
94	東京リハビリテーションセンター世田谷

	団体名
95	社会福祉法人なごみ福祉会　ここから
96	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム　深沢共愛ホームズ
97	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム　等々力共愛ホームズ
98	社会福祉法人青藍会　ハートハウス成城
99	認定特定非営利活動法人　語らいの家
100	株式会社　世田谷サービス公社
101	トラストガーデン桜新町
102	医療法人財団青葉会　介護老人保健施設 ホスピア玉川
103	NPO法人　せたがや子育てネット
104	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム　なかまっち
105	公益社団法人　東京都世田谷区歯科医師会
106	公益財団法人　世田谷区保健センター
107	社会福祉法人敬寿会　東京敬寿園
108	東京ロイヤル株式会社
109	世田谷区柔道整復師会
110	社会福祉法人南山会　特別養護老人ホーム　喜多見ホーム
111	社会福祉法人東京有隣会　第2有隣ホーム
112	社会福祉法人東京有隣会　有隣ホーム
113	社会福祉法人緑風会　特別養護老人ホーム　エリザベート成城
114	社会福祉法人楽晴会　世田谷希望丘ホーム
115	社会福祉法人寿心会　特別養護老人ホーム　フォーライフ桃郷
116	社会福祉法人七日会　せたがや給田乃杜
117	社会福祉法人常盤会　ときわぎ世田谷
118	一般社団法人　玉川砧薬剤師会
119	社会福祉法人ノテ福祉会　ノテ地域ケアセンター深沢
120	一般社団法人　世田谷トラストまちづくり
121	一般社団法人　輝水会
122	医療法人プラタナス　桜新町アーバンクリニック
123	株式会社　メディヴァ
124	株式会社　生活構造研究所
125	シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
126	世田谷区立すまいる梅丘
127	一般社団法人　つながりラボ世田谷
128	公益財団法人　世田谷区産業振興公社
129	特定非営利活動法人　視力障害者福祉協会
130	たまごの家
131	田辺薬局　三軒茶屋店
132	社会福祉法人聖救主福祉会　砧愛の園
133	都民シルバーサポートセンター
134	ケアプラン　そら
135	一般社団法人　KAiGO PRiDE
136	インケアフィット　株式会社
137	社会福祉法人たちばな福祉会　RISSHO KID'Sきらり代沢

個人会員
５１名

協賛企業等広告

一般社団法人　KAiGO PRiDE
学校法人大東学園　世田谷福祉専門学校
シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
一般財団法人　世田谷トラストまちづくり
東京ロイヤル株式会社
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
あらかわ総合保険
株式会社　世田谷サービス公社
東京リハビリテーションセンター世田谷
世田谷区柔道整復師会
世田谷区介護サービスネットワーク
世田谷区福祉移動支援センター　そとでる
NPO 法人　せたがや移動ケア「おでかけサポーターズ」
冨士エレベーター工業株式会社
株式会社　メディアチャンネル
医療法人社団　輝生会　在宅総合ケアセンター成城
森永乳業株式会社
有限会社　みやざき印刷
世田谷区福祉人材育成・研修センター

（掲載順）

KAiGO® PRiDE

厚生労働省のパイロット事業としてスタートした
日本の介護をブランディングするプロジェクトです

マンジョット・ベディ
(一社) KAiGO PRiDE 代表理事
クリエイティブディレクター
カメラマン

KAiGO × Creative

世界的クリエイター“マンジョット・ベディ”が日本の介護をリデザイン。
介護職の声＝介護の真実の姿・魅力をクリエイティブの力で見える形にし、
介護職の self-respect を社会からのリスペクトに繋げます。そして、社会の
マインドをポジティブにシフトさせることで介護人材不足の課題に応えます。

公式 SNS をフォロー！

クリエイティブの力で描き出す「介護の真実」や
全国各地での活動の様子を発信中

開催予告

介護の認識を変える１週間
KAiGO PRiDE WEEK

新しい介護の魅力発信機会の創出を目指し、２月２２日は『KAiGO PRiDE DAY』として記念日登録されています。２０２３年は、２月２２日を中心とした９日間を「KAiGO PRiDE WEEK」として、日本全国だけでなく海外をつなぐ様々な企画を検討しています。KAiGO PRiDE の SNS をフォローして今後の情報発信をチェック！

一般社団法人 KAiGO PRiDE は「せたがや福祉区民学会」の団体会員です

地域に根差した福祉教育の実践

- ■介護福祉学科（2 年）
- ■介護福祉士実務者研修
- ■介護福祉士国家試験　受験対策講座
- ■介護職員初任者研修
- ■介護職員スキルアップ研修
- ■手話講座

介護福祉士になる

学校法人大東学園

世田谷福祉専門学校

厚生労働大臣指定・介護福祉士養成校

〒156−0055　東京都世田谷区船橋7−19−17　https://setagayafukushi.ac.jp

T/ 03−3483−4106　F/ 03−3483−4107　mail/ info@setagayafukushi.ac.jp

SHIDAX
人と社会を健康に美しく

シダックスグループは
「すべては未来の子どもたちのために」を大義とし
「運動・栄養・休息・心・美」の総合サービス企業として
人と人との絆を育み、社会を健康に美しくする
ソリューション・カンパニーです。

シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社

〒150-0041　東京都渋谷区神南 1-12-10 シダックス・カルチャービレッジ　TEL.03-6731-9111（代表）
https://www.shidax.co.jp

地域共生のいえ

住まいをまちに ひらいてみませんか

ふくふくのいえ（世田谷区喜多見）

地域共生のいえとは

「地域共生のいえ」とは、建物所有者（オーナー）が主体となって自宅や所有する空き家を地域にひらき、交流の場とする取り組みです。一般財団法人世田谷トラストまちづくりが地域への想いをもつオーナーへ伴走支援を行うことで、累計28ヵ所の拠点が生まれました。活動内容は囲碁や麻雀といった地域交流が目的の趣味を中心とした活動から、子ども食堂、児童養護施設退所者の居場所、高齢者の食事会など社会的活動まで多岐にわたります。オーナーの地域課題への気付きによって多様な活動が展開されています。

きんしゃい（世田谷区下馬）

地域福祉の担い手
オーナーの募集

地域共生のいえの創出に向け、オーナーに対して３段階の支援を行います。①構想支援では、オーナーの意向をもとに地域の調査を行い、具体的な地域へのひらき方、無理なく活動を継続する方法を一緒に考えます。②試行支援では、構想支援で策定したプランを実施します。何度もお試し活動を繰り返すことで運営ルールと運営体制を整えていきます。最後が③開設支援です。地域へのお披露目会を開催し、周知を行います。地域にひらいてみたいとお考えの方はお問い合わせください。

ななこの積み木ハウス（世田谷区上馬）

地域を支える協働パートナー
連携団体の募集

地域共生のいえの多くは、多様な主体と連携して活動しています。社会福祉協議会、あんしんすこやかセンター、まちづくりセンター、世田谷区の各部署、大学、まちづくり団体などと協働してきました。地域共生のいえ単体でできることは限られていますが、多様な主体と一緒になって、地域に何が必要で、何ができるのかを考えることで可能性が拡がっていきます。参画してみたい団体の方はお問い合わせください。

一般財団法人
世田谷トラストまちづくり

地域共生まちづくり課
東京都世田谷区松原6-3-5
Tel: 03-6379-1621　Fax: 03-6379-4233

（一財）世田谷トラストまちづくりは、区民主体による良好な環境形成及び参加・連携・協働のまちづくりを推進し支援することによる、「自然環境や歴史的・文化的環境を保全した美しい風景のあるまちの実現」、「安全に安心して活き活きと住み続けられる共生のまちの創出」、「居住環境を魅力的に守り育む活動とコミュニティの形成」を目的に設立された法人です。

有料老人ホーム・サ高住のことなら

老人ホーム紹介センター ロイヤル介護 入居相談室

業界トップクラスの実績
業歴13年以上の経験
相談実績100,000組以上

ご相談無料

インターネットに載っていない情報も、対面で丁寧にお伝えしています。

老人ホーム探しをスムーズに解決したい方！私達にお手伝いさせてください。

情報力に自信があります。
実際に現地に何度も足を運んで集めた情報をお伝えしています。
現場の声・実際に入居されている方の声を大事にしています。

丁寧な対応を心がけています。
お客様のお話をしっかりお聞きしてから、ご要望に合わせてご提案します。担当者が見学の段取りや入居後のアフターフォローも行いますのでご安心ください。

スピーディーな対応をいたします。
年中無休（年末年始を除く）で、夜20時まで毎日営業しています。
独自の情報システムや各種のネットワークを使い、
急なご相談にもスムーズにお応えします。

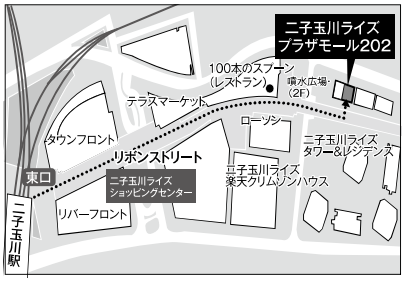
安心ポイント 60名以上の資格者・経験者がご対応いたします！

世田谷二子玉川ライズ店 二子玉川駅東口徒歩5分

0120-03-6186

〒158-0094 東京都世田谷区玉川1-15-6
二子玉川ライズプラザモール202号

営業時間／9：00～20：00　TEL.03-3709-2111（代）
年中無休（年末年始を除く）　FAX.03-3709-2112

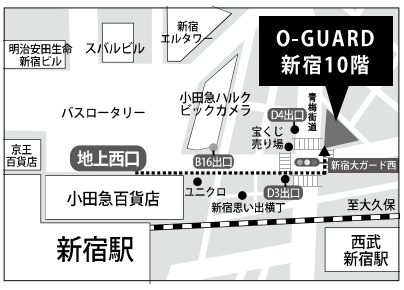


新宿本店　新宿駅西口徒歩2分

0120-87-6186

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-10-1
O-GUARD新宿10階

営業時間／9：00～20：00　TEL.03-3371-2111（代）
年中無休（年末年始を除く）　FAX.03-3371-2110



〈運営〉東京ロイヤル株式会社　〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-10-1　O-GUARD新宿10階
〈仲介〉東京都知事免許（3）第93579号（公社）全日本不動産協会会員（公社）首都圏不動産公正取引協議会加盟（公社）不動産保証協会会員

人をつなぎ　地域をつなぐ　共に笑顔のパートナー

社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団

私たち、事業団が展開する

7つのサービス

世田谷区内全30事業所の総合力

【法人本部】
〒154-0017　東京都世田谷区世田谷1-23-2
TEL 03-5450-8223

世田谷区社会福祉事業団　検索

事業団のホームページ　事業団の採用サイト　事業団の公式Twitter　事業団の公式Instagram

安心と安全のコンサルタント
保険のことなら何でもご相談ください

（財）東京都人材支援事業団指定代理店

特別区職員互助組合指定代理店

◆火災保険
　◆自動車保険
◆旅行保険
　◆自治会保険
◆イベント保険
　◆その他各種損害保険

三井住友海上火災保険（株）代理店
日本損害保険協会認定　特級（一般）資格

あ ら か わ 総 合 保 険

〒157-0067　東京都世田谷区喜多見 6-6-18
TEL:03-3415-8513　FAX:03-3415-8516
E-mail:kazusige@msh.biglobe.ne.jp

世田谷区の地方公社として、
地域社会の発展と区民福祉の向上に寄与する経営を基本とします。
だれもが輝く働き方で、地域社会とともに歩み、持続可能な共生社会の実現に貢献する企業を目指します。
私たちは、つながる　広がる　心づかいで、区民の笑顔を増やします。

玉川区民会館1F
せせらぎホール併設
Café STREAM
カフェ ストリーム

香り高いトラジャ・コーヒー、
区内唯一の
ディッピンドッツ・アイスクリームは
いかがですか？

03-3702-4536

障害者の就労受入れを積極的に進めています。

現在、公共施設の日常清掃をはじめ、受付案内、事務補助として、知的・精神・身体障害のある従業員、総勢 88 名が就労しています。

エフエム世田谷

83.4MHz

災害時にも、皆様に必要な情報を提供します。

― FM放送エリア ―
世田谷区 他

＜インターネットラジオ＞

FM 世田谷
ホームページ

Listen Radio

ひとと　街と　明日の　まん中に
株式会社 世田谷サービス公社
SETAGAYA GENERAL SERVICES CO.,LTD.

社会福祉法人 南東北福祉事業団／一般財団法人 脳神経疾患研究所

東京リハビリテーション センター世田谷

〒156-0043　東京都世田谷区松原六丁目 37 番 1 号

TEL：03-6379-0427(代表)　FAX：03-6379-0428

Mail：setagaya.info@mt.strins.or.jp

【公式サイト】

http://www.tokyo-rehabili.jp/

東京リハ　世田谷　検索

*小田急小田原線　「梅ヶ丘駅」北口　徒歩５分
*京王井の頭線　「東松原駅」下車　徒歩14分
*東急世田谷線　「山下駅」　下車　徒歩９分
*小田急バス（渋54）渋谷駅～梅ヶ丘駅～経堂駅
光明学校・松原下車　徒歩１分

世田谷区柔道整復師会

公益社団法人東京都柔道整復師会　世田谷支部

ほねつぎ
商標登録 第4452730号
公益社団法人東京都柔道整復師会

世田谷区内でのスポーツ大会・防災・介護予防において

ケガの予防・応急処置や機能訓練指導をおこなっております

ケガを治し、地域を支える、
公益社団の接骨院をご利用ください。♫

世田谷区柔道整復師会
事務局：(5313)1522

世田谷区介護サービスネットワーク

世田谷区介護サービスネットワークは、世田谷区内で
介護保険サービスを提供する事業者の団体です。

介護サービスの質向上

独自の研修・勉強会を開催

地域包括ケアの推進

加盟事業所数 350 以上

コロナを乗り切る！今こそ力を合わせよう！

事務局:世田谷区福祉人材育成･研修センター
〒156-0043 世田谷区松原 6-37-10-1F
TEL：03-6379-4280
FAX：03-6379-4281

そとでる

世田谷区福祉移動支援センター

誰もが自由に外出できる世田谷にするために

お一人では外出が困難な方を対象に、車いす、ストレッチャーで乗車できる介護タクシーや移送 NPO の配車・相談をいたします。加盟事業者 127、登録車両 250 台程の「そとでる」をご利用ください。

※原則として世田谷区民が対象ですが、移動に関するご相談は、区外のかたでもお受けいたします。

＜受付時間＞
祝日を除く月～金 9：00 ～ 17：00
TEL：03-5316-6621
FAX：03-3329-8311
http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

「そとでる」は、世田谷区から補助金交付を受け NPO 法人せたがや移動ケアが運営しています。

ボランティアグループ
おでかけサポーターズ
おでかけ支援ボランティア募集

誰もが自由に「おでかけ」できる世田谷を創るために一緒に活動しませんか

- **おでかけイベントの企画と実施**
  - おでかけの運転や付き添い
- **区内の交通不便地域を考える**
  - おでかけに関する調査や提言
- **活動を通じての仲間づくり**
  - おでかけサポートの担い手育成

＜事務局は「そとでる」です。気軽にお電話ください。＞
TEL：03-5316-6621

「安全」「安心」「快適」を乗せて75年。

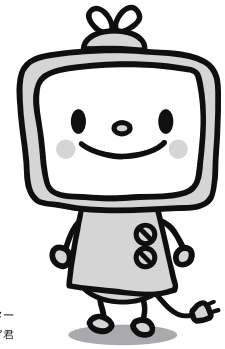
エレベーターの一生に、
責任を持ちます。

Fuji Elevator

冨士エレベーター工業株式会社

fuji-elevator.co.jp

〒101-0047 東京都千代田区内神田3-4-6 TEL:03-3252-8961



弊社キャラクター
メディア君

メディアチャンネルは、
「見るホームページ」から
「使えるホームページ」へ！
を、プロデュースするホームページ制作会社です。

株式会社メディアチャンネル ◆ http://www.media-ch.com/ ◆ 03-5738-7662

kisei·kai

在宅総合ケアセンター成城

成城リハケア病院

外来 ●祝祭日も診療しています ●休診日／日曜日・年末年始 入院

診療科目 内科・リハビリテーション科・整形外科 病床数 30床(個室3室・3人床1室・4人床5室・2人床2室)

受付時間 8:30~17:00 診療時間 8:50~17:15 電話 03-5429-2292

morinaga

かがやく"笑顔"のために

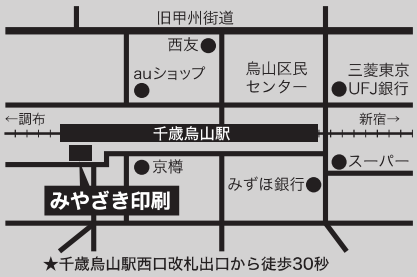
森永乳業

世田谷区の印刷は「みやざき印刷」へ

主要品目／名刺・ハガキ・封筒・伝票・冊子・チラシ・ポスター・パンフレット・カタログ

創造する喜び
有限会社 みやざき印刷

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-33-2
TEL(03)5384-1331・FAX(03)3305-2528
E-mail : info@miyazaki-p.co.jp
URL: http://www.miyazaki-p.co.jp/ みやざき印刷 検索



研修センターの取り組み

- ◆ 福祉の理解
- ◆ 人材発掘・就労支援
- ◆ 人材育成
- ◆ 事業者支援活動支援
- ◆ 調査・研究

世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒156-0043　世田谷区松原 6-37-10　世田谷区立保健医療福祉総合プラザ 1 階

TEL ： 03-6379-4280　FAX ： 03-6379-4281

ホームページ

https://www.setagaya-jinzai.

Twitter

@SetagayaKenshuC

せたがや福祉区民学会
第14回大会
会場　種月館（3号館）2階
時間　12時～17時30分

発表者
参加者
記載台
総合受付

資料

- せたがや福祉区民学会規約
- せたがや福祉区民学会設立趣旨

「せたがや福祉区民学会」規約

平成２１年１２月１２日
改正 平成２６年　３月１０日
改正　令和元年１２月　７日

第１　総　則

１　名称

本会は、せたがや福祉区民学会（以下「学会」という。）という。

２　事務局

学会の事務局は、社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団世田谷区福祉人材育成・研修センター（以下「研修センター」という。）に置く。

第２　目的及び事業

３　目的

学会は、世田谷区民（以下「区民」という。）の福祉の向上をめざして、世田谷区内（以下「区内」という。）において福祉の事業所で働く人、福祉について学ぶ人、教育・研究する人、行政に携わる人及び区民が、互いに対等な立場で福祉実践活動の工夫や抱える課題について、研究成果を発表し、相互に学びあうために、世田谷区を区域として設置する。

①　区内の優れた福祉事業や実践活動について発表する機会をつくり、福祉に携わる人の仕事への意欲を増進させ、専門性の向上を目指す。
②　区民が学会への参加活動を通じて、福祉活動への関心を高め、地域福祉に対して理解を深める。
③　会員が自由に議論し、共に学び、交流を深める。
④　実践事例を発表することにより、時代に即した新しい試みを推進する。

４　事業

学会は、次の事業を行う。

①　大会の開催
②　報告集、学会通信などの発行
③　会員同士の情報交換と交流
④　区民および全国に向けた学会の周知
⑤　その他、学会の目的を達成するために必要な事業

第３　会員

５　会員の要件

学会の会員は、世田谷区に在住、在勤、在学者で次のいずれかに該当する者（個人または団体）とする。

①　福祉サービスを提供している者、福祉サービスを利用している者
②　福祉に関するボランティア活動や地域福祉活動を行っている者
③　高齢者、障害者または子どもの福祉に関わる者
④　福祉について学び、研究する者
⑤　福祉活動について関心のある者
⑥　福祉行政に携わる者

６　会員の権利

学会の会員は次の権利を持つ。

（１）総会における議決権を行使する。
（２）大会において研究発表を行う。
（３）学会通信への投稿及び配付を受ける。
（４）会員の交流

７　賛助会員の要件及び権利

賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の目的に賛同する者（個人または団体）とし、６の会員の権利のうち、総会における議決権は持たない。

８　入会

学会に入会しようとする者は、所定の申込書を事務局に提出し、登録する。

９　会費

（１）会員、賛助会員は、別に定めるところにより会費を納めなければならない。
（２）既納の会費は返納しない。

１０　退会等

（１）会員、賛助会員は、事務局に所定の退会届を提出し、退会することができる。
（２）会費を納期から１年以上滞納した場合は、退会したとみなすことができる。
（３）学会の名誉を傷つけ、または本会の目的に反する行為をし、あるいはこの規約に反する行為のあったときは、理事会の議決を経て除名することができる。

第４　組織

１１　役員

学会に理事及び監事を置く。

（１）理事　２０名程度
（２）監事　２名

１２　役員の選任

理事及び監事は、会員の互選により選任する。

（１）理事のうち１名は理事の互選により会長となる。
（２）会長は必要と認めるときは、理事の中から副会長を指名する。

１３　役員の任期
（１）役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
（２）役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行うものとする。
（３）補欠により就任した役員の任期は、前任者の残任期間とする。
１４　会長の職務
会長は、学会を代表し、会務を統括する。
１５　会長の職務代行
会長に事故あるときは、会長があらかじめ指名する他の理事が、その職務を代行する。
１６　理事会
（１）学会の運営に関する審議は、理事をもって組織する理事会において行う。
（２）理事会は、会長の招集により随時開催する。
（３）理事会に議長を置き、議長は会長がつとめる。
（４）理事会は、理事総数の過半数の出席がなければ開会することができない。
１７　理事会の審議
（１）理事会の議事は、出席者の過半数で決し、審議事項は次のとおりとする。
①　予算、決算、事業計画及び事業報告
②　学会の規約の制定及び改廃
③　その他、会務運営のために必要な一切の事項
（２）会議の議事については、議事録を作成するものとする。
１８　監事
監事は、学会の会計及び会務執行状況を監査する。
１９　運営委員
（１）理事の互選により運営委員を置き、適宜、運営委員会を開催する。
（２）運営委員は、学会の運営に関わる実務を行う。
２０　総会
（１）会長は、毎年１回会員の総会を招集する。
（２）会長は、必要と認めるとき又は会員総数の３分１以上から総会招集を求められた場合には、臨時総会を開くことができる。
２１　総会の議決
総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。議決事項は次のとおりとする。
①　１７の①及び②に掲げる事項
②　その他理事会が必要と認めた事項

第５　会計

２２　経費
学会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもって充てる。
２３　予算
学会の予算は、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２４　決算
決算は、監事の監査の後、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２５　会計年度
会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６　解散

２６　解散
学会は、会員総数の３分の１又は理事総数の過半数から発議された場合には、総会において出席会員の３分の２以上の承認により解散する。

附　則
（施行期日）
１　この規約は平成２１年１２月１２日から施行する。
ただし、第５の２２から２４までの規定については、平成２２年４月１日から施行する。
（学会設立時の措置）
２　設立総会の議事は設立発起人会が提起し、総会出席者の半数以上の賛同により、学会は設立する。
３　設立発起人会の事務局は、研修センターに置く。
４　学会設立前に、設立発起人会の事務局に入会の申込書を提出してある場合は、設立の日からこの学会の会員となるものとする。
５　この学会の設立当初の役員は、設立総会で選任する。この役員の任期は、第１１条の定めに関わらず、平成２３年３月３１日までとする。
６　平成２１年度の会計については、世田谷区から研修センターに交付される委託料により研修センターで行い、理事会及び世田谷区に報告する。

附　則（令和元年１２月７日）
（施行期日）
１　この規約は令和元年１２月７日から施行する。

せたがや福祉区民学会設立趣旨

福祉活動は何よりも実践を基本とし、その質を高め、内容が広く地域の方々に共有されることが望まれ、地域の中で行われている取り組みについて互いに発表し、共有することによって、さらに高まります。また、自分たちの取り組みが、地域全体の中でどのように位置づけられるのか、再発見することも大切です。

せたがや福祉区民学会は、世田谷区内の大学、福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に、福祉活動や研究成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成２１年１２月に設立されました。

本学会は身近な地域で日頃の実践を発表し、情報交換を通してお互いの交流を深めあい、区民福祉を向上することを目的としています。

せたがや福祉区民学会第１４回大会
報告集

発　　行：せたがや福祉区民学会第１４回大会実行委員会
発 行 日：令和５年３月
編集協力：日本大学文理学部社会福祉学科学生
（表紙、裏表紙）
開 催 校：駒澤大学

〈事 務 局〉
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒１５６－００４３
世田谷区松原６－３７－１０
世田谷区立保健医療福祉総合プラザ１階
ＴＥＬ：６３７９－４２８０　ＦＡＸ：６３７９－４２８１
E-mail：fukushijinzai@setagaya-jinzai.jp
ＵＲＬ：https://www.setagaya-jinzai.jp/society

主催　せたがや福祉区民学会

協力　駒澤大学文学部
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団

後援　世田谷区
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会